福岡市

有田・小田部

ARI TA KO TA BE

第18集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第340集

1993

福岡市教育委員会

SD02　第1ベルト土層

1.褐色土に明黄褐色ロームブロック・暗褐色粘質土混入。
2.褐色土砂粒・小礫を少量混入。
3.暗褐色土・粘性が強い。
4.暗褐色土。3より暗い。
5.褐色土で粒子が細かく、黄褐色砂質ローム少量混入。
6.5よりやや暗い。
7.黄褐色砂質ロームブロックに褐色土混入。
8.暗褐色粘質土、マンガン粒子をわずかに混入。
9.8に黒褐色粘質土を混入。
10.9に更に黄橙色地山ローム土を混入。
11.9と同じ
12.10に明黄褐色ロームブロック混入。
13.明褐色ロームブロックに黒褐色粘質土少量混入。
14.黒褐色粘質土に橙色ロームブロック少量混入。
15.13と同じ
16.14と同じ

SU01

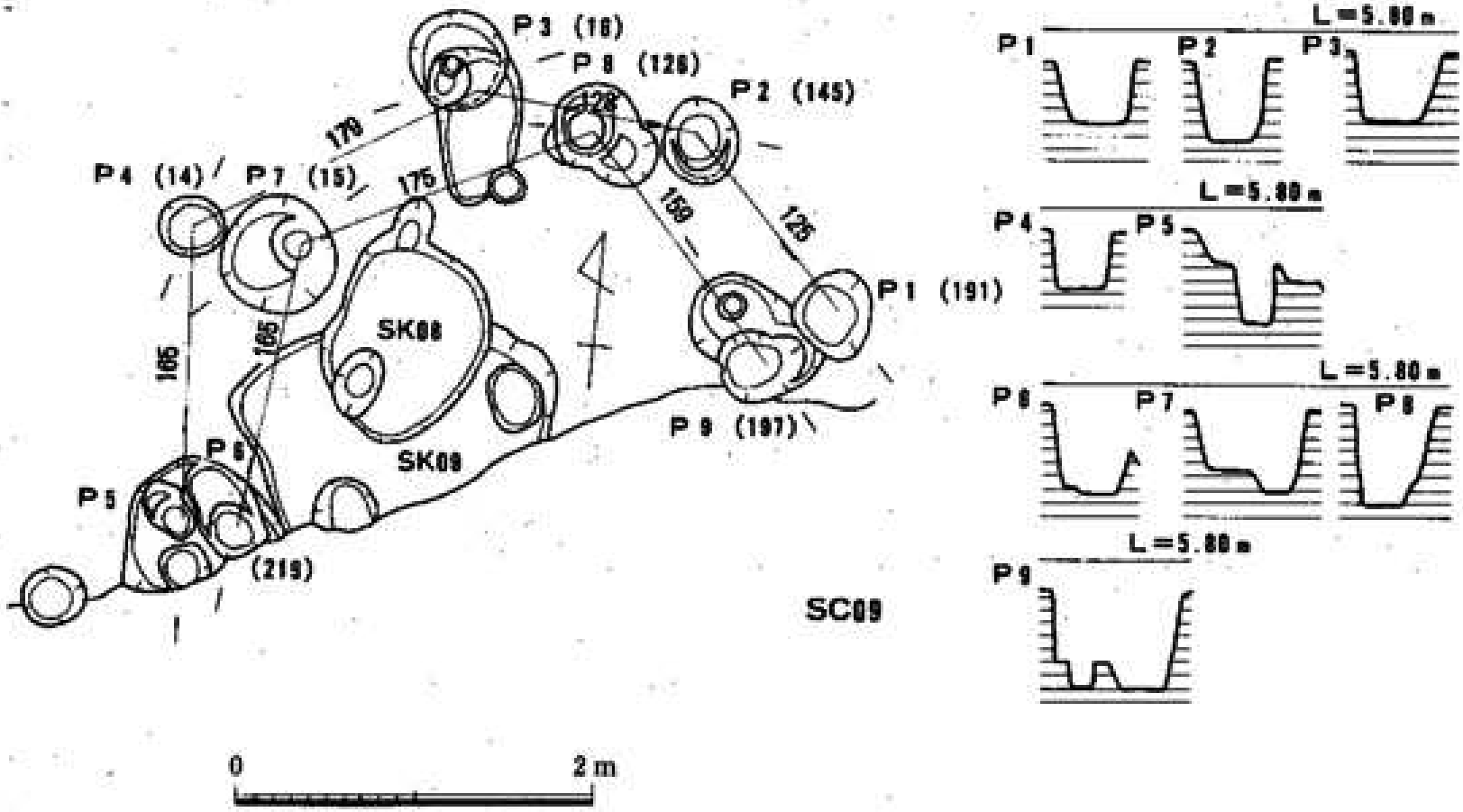


Fig. 19 SC08・09 (1/60)

有田・小田部第１８集掲図正誤表

Ｐ２６　Ｆｉｇ.１９を貼り替えてください。

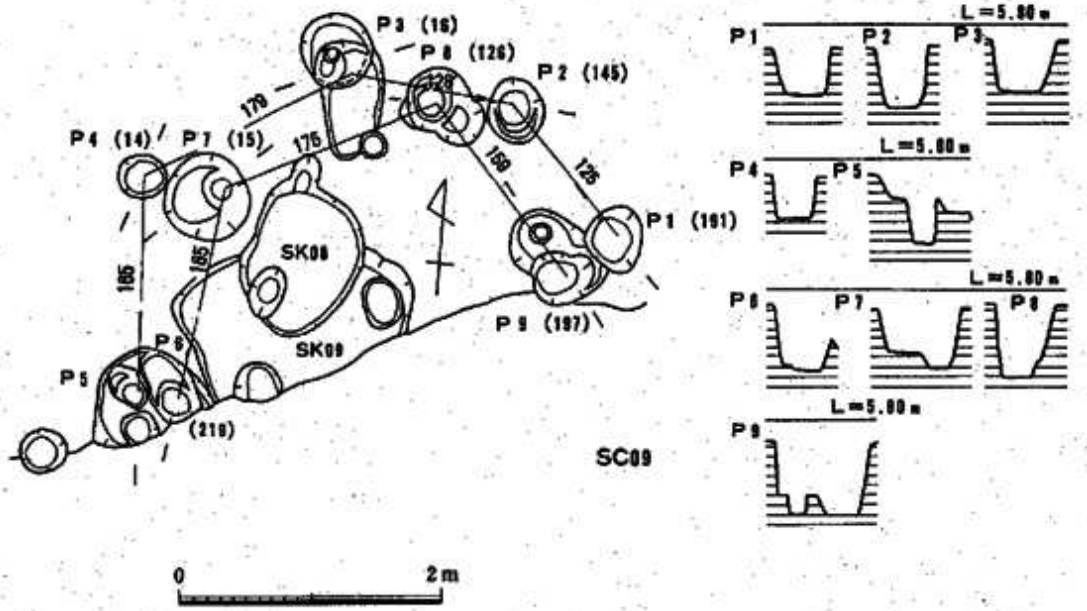
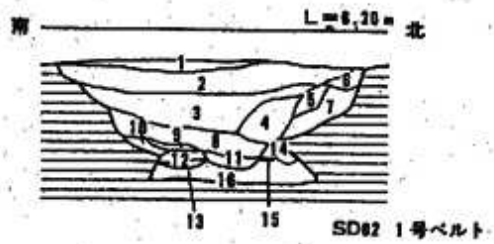


Fig. 19　SC08・09 (1/60)

Ｐ３５　Ｆｉｇ.２６　ＳＤ０２第１ベルト土層を貼り替えてください。



SD02　第１ベルト土層

1.褐色土に明黄褐色ロームブロック・暗褐色粘質土混入。
2.褐色土砂粒・小礫を少量混入。
3.暗褐色土・粘性が強い。
4.暗褐色土。3より暗い。
5.褐色土で粒子が細かく、黄褐色砂質ローム少量混入。
6.5よりやや暗い。
7.黄褐色砂質ロームブロックに褐色土混入。
8.暗褐色粘質土、マンガン粒子をわずかに混入。
9.8に黒褐色粘質土を混入。
10.9に更に黄褐色地山ローム土を混入。
11.9と同じ
12.16に明黄褐色ロームブロック混入。
13.明褐色ロームブロックに黒褐色粘質土少量混入。
14.黒褐色粘質土に橙色ロームブロック少量混入。
15.13と同じ
16.14と同じ

SU01

有田・小田部第１８集正誤表

頁	行	誤	正
例　言	１４	ＳＡ…柵、ＳＢ…掘立柱建物	ＳＡ…柵・ＳＢ…掘立柱建物
Ⅰ	5	２．調査の組織	２．発掘調査の組織
〃	7	１．遺跡の立地と調査の成果	１．立地と調査の成果
〃	7	２．平成４年度の有田遺跡群の調査の成果…３	２．平成４年度の有田遺跡群の調査の成果…５
Ⅴ	１０	……折込み	……折り込み
１９	3	粒子・褐石粒子	粒子・褐色粒子
３１	7	桁行全長7.35m	桁行全長7.30m
３９	３３	上中下の３層	上・中・下の３層
４４	２４	粘土を貼り付ける	粘土で造り付ける
４５	7	申請面積293㎡	申請面積297㎡
〃	１６	東西4.44～5.20m、南北4.44～4.64m	東西4.46～5.20m、南北4.44～4.65m
〃	２２	規模は南北5.70m	規模は南北5.20m
ＰＬ１９		ＳＣ０２出土遺物２	ＳＣ０１出土遺物２
ＰＬ２０		遺物番号７４	遺物番号７８
〃		遺物番号７８	遺物番号７４
〃		ＳＣ０１・及び床面ピット出土遺物	ＳＣ０１及び０１内ピット出土遺物

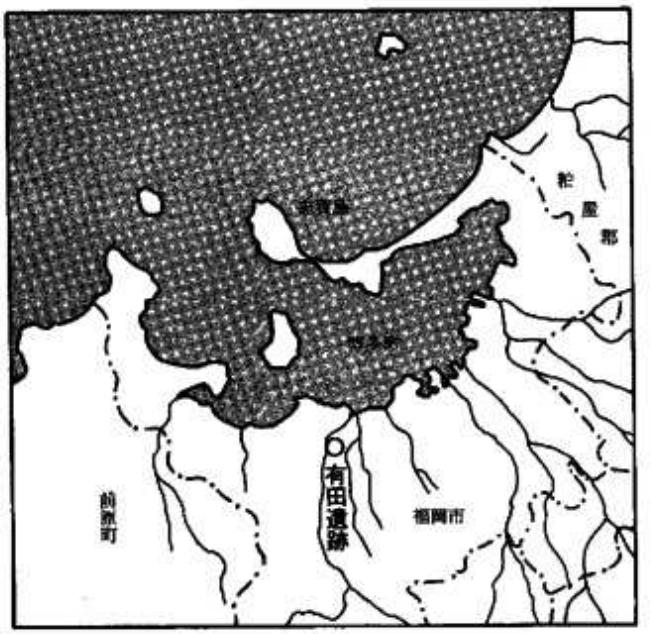
（行数は見出しも含む）

ARI TA KO TA BE

有田・小田部

〈福岡市早良区有田・小田部地区における遺跡群の発掘調査報告書〉

第18集



1993

福岡市教育委員会

序

福岡市の西部に位置する早良平野は、近年、人口増加が著しく都市開発が目ざましく進んでいる地域です。それにつれて、埋蔵文化財の調査も増加し、王墓級の墓が発見された吉武高木遺跡や東入部遺跡を始め、学術的価値の高い遺跡の発見が相次いでいます。

有田遺跡群は、この早良平野の北側、有山・小田部・南庄地区にある、旧石器時代から江戸時代にかけての大遺跡です。昭和41年の九州大学による区画整理に伴う調査以来、今年度迄、170次に及ぶ発掘調査が行われました。その結果、板付遺跡と並んで、日本で最古期の弥生時代前期の環濠集落の発見を始め、多大な成果をあげています。

今回報告する第125・135・140・145・147次調査は、昭和62～63年度に調査が行われたものです。調査では、弥生時代から中世にかけての各種の遺構・遺物が発見されました。特に第125次調査では古墳時代中期の火災にあった竪穴住居跡が、また第148次調査では中世末の小山部城に関連すると思われる濠跡や井戸跡などが発見されました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、地権者を始めとする関係各位に多大な御理解と御協力を賜りました。記して深く感謝の意を表します。

また、本書が埋蔵文化財の理解を深める一助となり、合わせて研究資料として御活用いただけることを願うものです。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長　井口雄哉

例　言

(1). 本書は、福岡市早良区有田・小田部・南庄地区における民間開発に伴い、福岡市教育委員会が、平成4年度の国庫補助を得て実施した、緊急発掘調査の報告書である。

(2). 本書には、昭和62年度の第125次・135次調査、63年度の第140次・145次・148次調査を収録する。

(3). 本書では、有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見なし、広義の有田遺跡群とする。

(4). 本書に収録した調査は、第125次・135次・140次調査を山崎龍雄・小林義彦・米倉秀紀（現福岡市博物館）が、第145次・148次調査を加藤良彦がそれぞれ担当した。

(5). 本書に掲載した遺構の実測は、担当者の他、清原ユリ子・金子由利子・宮原邦江・吉岡田鶴子・黒田和生・英豪之・溝口武司が行い、写真は担当者が行った。遺物の実測とトレース、遺構のトレースについては、各担当者の他、平川敬治・井上加代子・岡根なおみ（現松山市教育委員会）・蜂須賀博子・坂本智子が行い、遺物の写真撮影は担当者と平川敬治が行った。

(6). 遺構記号は、福岡市の遺構記号基準によっている。

SA…柵、SB…掘立柱建物、SC…竪立住居址、SD…溝状遺構、SE…井戸、SK…土坑、SR…土壙墓、木棺墓、ST…甕棺墓、SP…ピット、SX…その他

(7). 本書に使用した方位は磁北であり、その他については図中に記した。

(8). 本書報告の遺物・図面・写真類は、すべて本市の埋蔵文化財センターに収蔵保管する予定である。

(9). 本書の執筆は以下のとおりである。

第1章　はじめに　…山崎

第2章　遺跡の立地と調査の成果…山崎

第3章　調査の記録　…山崎・加藤

(10). 本書の編集は、加藤と協議のうえ、山崎が行った。

本 文 目 次

頁
第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査の組織……2
第２章　遺跡の立地と調査の成果……3
　１．遺跡の立地と調査の成果……3
　２．平成４年度の有田遺跡群の調査成果……3
第３章　調査の記録……7
〈小田部地区の調査〉……7
　１．第125次調査……9
　１）調査区の地形と概要……9
　２）遺構と遺物……9
　３）小結……42
　２．第135次調査……45
　１）調査区の地形と概要……45
　２）遺構と遺物……45
　３）小結……48
　３．第145次調査……49
　１）調査区の地形と概要……49
　２）遺構と遺物……49
　３）小結……63
〈有田地区の調査〉……65
　４．第140次調査……67
　１）調査区の地形と概要……67
　２）遺構と遺物……67
　３）小結……70
　５．第148次調査……71
　１）調査区の地形と概要……71
　２）遺構と遺物……71
　３）小結……88

図 版 目 次

PL. 1　有田遺跡群周辺航空写真（1961年撮影）

PL. 2　同（1972年撮影）

PL. 3　(1)調査区全景（北から）　(2)調査区全景（東から）

PL. 4　(1)SC01焼土面（南から）　(2)SC01・06・07完掘状況（南から）

PL. 5　(1)SC06内土坑SK07（南から）　(2)SC07（南から）

PL. 6　(1)SC01遺物出土状況　(2)SC01遺物出土状況　(3)SP203遺物出土状況　(4)SP238遺物出土状況　(5)SP228遺物出土状況　(6)SK13勾玉出土状況（西から）

PL. 7　(1)SC02（北西から）　(2)SC03（東から）

PL. 8　(1)SC04（南西から）　(2)SC05（北西から）

PL. 9　(1)SC08（北から）　(2)SC09（南東から）

PL. 10　(1)SB01・02（南東から）　(2)SB01（東から）

PL. 11　(1)SB03（南西から）　(2)SB04（東から）

PL. 12　(1)SD01～03（北東から）　(2)SD03（北東から）

PL. 13　(1)SD04・05（南東から）　(2)SD02上層（東から）　(3)SD03土層（東から）

PL. 14　(1)SK01（北から）　(2)SK02（南から）

PL. 15　(1)SK03（東から）　(2)SK04（東から）

PL. 16　(1)SK05（北から）　(2)SK08・09（南から）

PL. 17　(1)SU01（南東から）　(2)SU02（南東から）

PL. 18　SC01出土遺物1

PL. 19　SC01出土遺物2

PL. 20　SC01及び01内ピット出土遺物

PL. 21　住居址・土坑・溝出土遺物

PL. 22　溝・ピット出土遺物

PL. 23　(1)調査区全景（西から）　(2)SB01・02（東から）

PL. 24　(1)SB03・04（西から）　(2)SD01（北から）　(3)各遺構出土遺物

PL. 25　(1)調査区遠景（北東から）　(2)調査区全景（北西から）

PL. 26　(1)SC01上面（南から）　(2)SC01上面（東から）　(3)SC01下面（南から）　(4)SC01下面（東から）　(5)SC01屋内土坑（東から）　(6)SC01ピット内高杯（東から）

PL. 27　(1)SC02（北から）　(2)SC02（西から）　(3)SC02土層断面（北から）　(4)SC03（北から）　(5)SC03（東から）　(6)SC04（北東から）

PL. 28　(1)SB10（北から）　(2)SB10柱穴土層断面（北から）　(3)SB11（北西から）　(4)SB11柱穴土層断面（南西から）　(5)SB12（北から）　(6)SB12柱穴土層断面（北から）

PL. 29　(1)SB06・07（南東から）　(2)SB06・07（北東から）　(3)SB柱穴土層断面（北東から）
PL. 30　(1)SB08（北西から）　(2)SB08柱穴土層断面（北東から）　(3)SB09（北から）　(4)SK05（東から）　(5)SK05（北から）　(6)SK05遺物出土状況（東から）
PL. 31　SC01出土遺物
PL. 32　各遺構出土遺物
PL. 33　(1)調査区全景（北から）　(2)SD01（西から）
PL. 34　(1)SD01土層（南から）　(2)SE01（東から）　(3)各遺構出土遺物
PL. 35　(1)調査区全景（南から）　(2)調査区全景（東から）
PL. 36　(1)調査区北壁土層断面（南から）
(2)調査区東壁土層断面（西から）
PL. 37　(1)SE06内詰石（北から）　(2)SE16（東から）　(3)SE16内側石組井側（北から）　(4)SE16内側内石白（西から）　(5)SE16外側石組井側（東から）
PL. 38　(1)SK08（西から）　(2)SK08土層断面（南から）　(3)SK09（北から）　(4)SK14集石（西から）
(5)SK15土層断面（北から）
PL. 39　(1)SG01・SD03土層断面（西から）　(2)SG01・SD02土層断面（北から）　(3)SD02（西から）
(4)SD04土層断面（西から）　(5)SD12土層断面（北から）
PL. 40　各遺構出土遺物1
PL. 41　各遺構出土遺物2
PL. 42　各遺構出土遺物3

挿　図　目　次

本文頁

Fig. 1　有田・小田部周辺遺跡（1/25,000）……4
Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点（1/5,000）……折り込み
Fig. 3　有田・小田部台地の旧地形図（1/5,000）……折り込み
Fig. 4　小田部地区調査地点位置図（1/5,000）……7
Fig. 5　第125次調査区遺構配置図（1/200）……10
Fig. 6　SC01・06・07（1/60）……折り込み
Fig. 7　SC01出土遺物1（1/4）……13
Fig. 8　SC01出土遺物2（1/4）……14
Fig. 9　SC01出土遺物3（1/4）……15
Fig. 10　SC01出土遺物4（1/4）……16
Fig. 11　SC01出土遺物5（1/4）……17
Fig. 12　SC01出土遺物6（1/4）……18

Fig. 13　SC01ピット出土遺物（1/4）…… 20
Fig. 14　SK13出土遺物（1/4）…… 21
Fig. 15　SC01出土遺物7（1/4）…… 21
Fig. 16　SC03・05（1/60）…… 23
Fig. 17　SC02・04（1/60）…… 24
Fig. 18　SC02・03・05・SK11出土遺物（2/3・1/3・1/4）…… 25
Fig. 19　SC08・09（1/60）…… 26
Fig. 20　SB01・02（1/100）…… 28
Fig. 21　SB03とSB01出土遺物（1/100・1/4）…… 29
Fig. 22　SB04・05（1/100）…… 30
Fig. 23　SK01～05（1/40）…… 32
Fig. 24　SK06・08・09（1/40）…… 33
Fig. 25　SU01・02（1/40）…… 34
Fig. 26　SD01～03土層図（1/60）…… 35
Fig. 27　各溝出土遺物1（1/4）…… 37
Fig. 28　各溝出土遺物2（1/4）…… 38
Fig. 29　ピット出土遺物（1/4）…… 40
Fig. 30　有田遺跡群における弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居の変遷 …… 折り込み
Fig. 31　第135次調査区遺構配置図（1/200）…… 46
Fig. 32　SB01～04（1/100）…… 47
Fig. 33　各遺構出土遺物（1/4）…… 48
Fig. 34　第145次調査区遺構配置図（1/200）…… 50
Fig. 35　SC01（1/60・1/20）…… 51
Fig. 36　SC01出土遺物1（1/4・1/3）…… 52
Fig. 37　SC01出土遺物2（1/4・1/3）…… 53
Fig. 38　SC02（1/60）…… 55
Fig. 39　SC03（1/60）…… 55
Fig. 40　SC04（1/60）…… 56
Fig. 41　SB10（1/80）…… 56
Fig. 42　SB11（1/80）…… 57
Fig. 43　SB11出土遺物（1/4）…… 57
Fig. 44　SB12（1/80）…… 57
Fig. 45　SB06（1/80）…… 58
Fig. 46　SB06出土遺物（1/4）…… 59

Fig. 47　SB07（1/80）……59
Fig. 48　SB08（1/80）……59
Fig. 49　SB09（1/80）……60
Fig. 50　SK05（1/30）……60
Fig. 51　SK05出土遺物（1/3・1/4）……60
Fig. 52　その他の出土遺物（1/2・1/3・1/4）……62
Fig. 53　有田地区調査地点位置図（1/5,000）……65
Fig. 54　SK01（1/40）……67
Fig. 55　SE01（1/40）……68
Fig. 56　第140次調査区遺構配置図（1/200）……折込み
Fig. 57　SD01土層断面図及び出土遺物（1/40・1/4）……69
Fig. 58　SD02出土遺物（1/4）……70
Fig. 59　ピット出土遺物（1/4）……70
Fig. 60　第148次調査区遺構配置図（1/200）……72
Fig. 61　調査区北壁・東壁土層断面図（1/100）……73
Fig. 62　SE06・16（1/40）……74
Fig. 63　SE06出土遺物（1/4）……75
Fig. 64　SE16出土遺物（1/4）……76
Fig. 65　SE16掘方出土遺物（1/4）……77
Fig. 66　SK08・09・14（1/40）……78
Fig. 67　SK14出土遺物（1/4）……79
Fig. 68　SK15（1/40）……79
Fig. 69　SK17（1/40）……80
Fig. 70　SK18（1/40）……80
Fig. 71　SG・SD土層断面図（1/40）……82
Fig. 72　SG01出土遺物（1/4）……83
Fig. 73　SD02上層出土遺物（1/4）……83
Fig. 74　SD02下層出土遺物（1/4）……84
Fig. 75　SD03出土遺物（1/4）……85
Fig. 76　SD04・11・12出土遺物（1/4）……86
Fig. 77　下段出土遺物（1/4）……87
Fig. 78　その他の出土遺物（1/4）……87

表 目 次

本文頁

Tab. 1　第18集報告調査地区一覧表……1

Tab. 2　平成３・４年度調査地区一覧表……5

付 図 目 次

付図１　有田遺跡群遺構配置図Ⅰ（1/1,000）

付図２　有田遺跡群遺構配置図Ⅱ（1/1,000）

付図３　有田遺跡群遺構配置図Ⅲ（1/1,000）

付図４　有田遺跡群遺構配置図Ⅳ（1/1,000）

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

福岡市近郊の純農村地帯であった有田・小田部の台地上には、有田・小田部・南庄の3つの集落が存在している。近年国道202号線バイパスと市営地下鉄1号線の開通は、福岡市西部地区の都市開発を大きく促進し、当地区一帯も市街地化への変貌は著しく、昔日の面影はない。

有田遺跡群の考古学的調査は、昭和41年の九大の調査以降、昭和50年度から、国庫補助事業として出発したが、52年度からは1,000㎡以下の小規模開発についても対応を行っている。

昭和60年度迄の開発傾向は、都心に近い手近な住宅地として個人専用住宅の建設が多かったが、以降平成2年迄は、バブル景気の影響が及び、店舗・高層の共同住宅・分譲住宅などの開発が増加していた。バブル景気の沈静化と共に、開発も少し鎮まりつつある。平成4年度迄の調査件数は170件である。この中には学校建設・下水道建設・市営住宅建設などの公共事業も含まれている。

本書では、昭和62年度から63年度にかけて行った小田部地区の第125次・135次・145次調査、有田地区の第140次・148次調査の成果を報告する。各調査の要項は下表のとおりである。

Tab. 1　第18集報告調査地区一覧表

調査次数	調査番号	地区名	調査地地番	申請面積	調査面積	申請者	調査期間	埋蔵文化財番号	備考
第125次	8718	E	早良区小田部5丁目172・173	731.77㎡	722㎡	守田敏行	1987年6月29日～10月7日	61-12 169	
〃135〃	8754	D	〃　小田部1丁目361	297.23	145	佐藤　正	1988年3月7日～3月24日	62-2-321	
〃140〃	8815	J	〃　有田1丁目29番10号	155	136	三苫健太	〃　5月28日～6月16日	62-2-153	
〃145〃	8851	F	〃　小田部2丁目90番	682	682	坂下良一	1989年1月19日～3月31日	61-2-22	
〃148〃	8861	I	〃　有田1丁目18-4	441	414	渡田　剛	1989年2月22日～3月31日	63-2-63	

2．発掘調査の組織

1）　昭和62年度～平成4年度の調査組織

調査主体　福岡市教育委員会

調査総括　昭和62～平成2年度　埋蔵文化財課長　柳田純孝
平成3～4年度　埋蔵文化財課長　折尾学

事務担当　昭和62～同63年度　埋蔵文化財課第2係長　飛高憲雄、(庶務) 第1係　岸田隆
平成元～2年度　同課第2係長　柳沢一男、(庶務) 第1係　阿部徹・中山昭則
平成功3～4年度　同課第1係長　飛高憲雄、同課第2係長　塩屋勝利、(庶務) 第1係　中山昭則

発掘担当　昭和62年度　同課第2係　山崎龍雄・米倉秀紀（現福岡市博物館）・小林義彦
昭和63年度　同課第2係　山崎・小林・加藤良彦

調査・整理作業　昭和62～平成4年度　平川敬治（九州大学）・梶村嘉長・溝口武司・黒田和生・英豪之・井上加代子・蜂須賀博子

なお、発掘調査・資料整理にあたっては、申請者及び施工業者の皆様をはじめ、地元の方々のご援助、ご協力を得た。特に地元の寺田勝行氏には、事務所用地を心よくお貸しいただいた。また調査にあたっては、九州大学工学部建築学教室山本輝雄先生を始め、調査指導の諸先生及び、埋蔵文化財課の試掘担当の諸氏に、多大なご助言・ご指導を受けた。記して謝意を表したい。

第2章　遺跡の立地と調査の成果

1．立地と調査の成果

有田遺跡群は、福岡市の西南部に広がる早良平野の北側中央部に所在する、標高15m前後を測る周囲から孤立した独立台地である。行政的には福岡市早良区有田・小田部・南庄の一帯にまたがる。この台地の西側には室見川、東側には金屑川が北流し、これらの河川の度重なる流路変更による浸蝕や、台地北側を中心として小谷の開析によって、八手状に北側に広がる複雑な地形を形成している。

有田遺跡群は、過去170次に及ぶ調査の成果から、旧石器時代から近世に至る迄の遺構が台地上に分布する事が確認されている。旧石器時代については、有田地区の第6次調査区や小田部地区の第131次地点を初め、9ヶ所程で遺物が採集されており、早良平野内では吉武遺跡群や、羽根戸遺跡群と並んで数少ない旧石器時代遺跡である。縄文時代では台地西側の第5・116次・下水道調査区で、中期から後期にかけての貯蔵穴群が馬蹄形状に巡る事が確認されている。

弥生時代では前期初頭のV字溝が、第2次調査区を初めとして、第45次・54次・77次・95次・133次調査区で確認され、これらから長径300m、短径200mの規模の楕円形状の環濠が、有田台地高所部を巡る事が予想される。遺跡群の南西側には縄文時代晩期末に位置づけられる有田七田前遺跡がある。前期後半になると、集落は環濠の範囲を越えて、台地北側の小田部地区迄拡がる。この時期の墳墓は有田・小田部地区で5ヶ所確認されているが、検出した甕棺墓の数はいずれも少ない。遺跡南端の西福岡高校地内で出土した金海式甕棺墓から、細形銅戈が発見され、また小田部地区では細形銅戈と細形銅矛の出土も伝わる。中期になると前期より更に集落が拡大する。ほぼ台地全域に拡がるようである。当遺跡地内では青銅利器が鋳造されたようで、鋳型片が第3次・82次・108次調査区で出土し、また鋳型と同質の砥石なども各調査区で出土している。内陸部の吉武遺跡群・四箇遺跡群・海岸部の藤崎遺跡群などと共に早良平野の拠点集落の一つである。後期になると一変して集落は縮小する。これは早良平野に見られる一般的傾向である。この原因については、早良平野が東側の福岡平野の奴国の勢力下に入るからとか言われている。

古墳時代の集落は全期間を通して台地上に広く分布する。この時期、小田部地区には筑紫殿塚・松浦殿塚などの大型の円墳が出現する。遺跡の北側にある原北小学校内には、南庄地区から出土した石棺墓が移築保存されている。地元からの聞き取りによっても、調査成果（第89次・97次調査区）によっても南庄地区に墳墓地域がある事が想定出来る。

古代には早良郡の田部郷に比定されている。有田地区の第56次・57次・77次・78次・82次・101次・107次調査区では、方形区画に囲まれた大型の掘立柱建物群が検出されている。これら

Fig. 1　有田・小田部周辺遺跡 (1/25,000)

の建物群は古代西海道に付設された額田駅が、西方約2km離れた野方あたりに比定されていることから、それに関連する官衙的な建物群と考えられている。また3本柱の構で囲まれた倉庫群も有田・小田部地区に6ヶ所確認されている。

中世には小山部郷と呼ばれ、文永8年（1271）の飯盛宮社領坪付に記載が見られる。中世後半代には大内氏の筑前進出と共に、早良郡代大村興景が小田部の下中園に知行地を持ったとされるが、当地区にはその地名が小字名として残り、調査でもそれが裏付けられている。16世紀後半の戦国時代末期になると大友氏の被官であった小田部氏が小田部城を有田の地に築いたとされるが、有田地区では幅5－10m、深さ2mを測る薬研堀の空濠が200m四方の範囲に掘開され、それらは方形の郭状に複雑に巡っている。築造時期は出土遺物の時期から推定して16世紀代であり、小田部城の可能性が強い。

2．平成4年度の有田遺跡群の調査成果

平成4年度は公共事業・民間事業合わせて計2ヶ所の調査を行った。調査の概要は以下のとおりである。

Tab. 2　平成3・4年度調査地区一覧表

調査次数	調査番号	地区名	調査地地番	調査面積	調査期間	遺構	備考
第169次	9147	J	早良区有田1丁目25－1・2	385㎡	1992年2月4日～5月14日	古墳時代竪穴住居址1棟 掘立柱建物、古代溝1条	
〃170〃	9251	J	〃　小田部3丁目179－1				

有田遺跡群関係文献一覧表

『有田古代遺跡発掘調査概報』市報第1集、1967
『有田遺跡－福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告－』市報第2集、1968(2次)
『有田周辺遺跡調査概報』市報第43集、1977
「有田・小田部」現地説明会資料(孔版)、1977
『有田遺跡』(孔版)、1979
『有田・小田部第1集』市報第58集、1980
『有田・小田部第2集』市報第81集、1982
『有田・小田部第3集』市報第84集、1982
『有田七田前遺跡』市報第95集、1983
『有田・小田部第4集』市報第96集、1983
『有田・小田部第5集』市報第110集、1984
『有田・小田部第6集』市報第113集、1985
『有田遺跡群－第81次調査－』市報第129集、1986
『有田・小田部第7集』市報第139集、1986
『有田・小田部第8集』市報第155集、1987
『有田七田前遺跡の調査』九州文化史研究紀要32号、1987
『有田・小田部第9集』市報第173集、1988
『有田・小田部第10集』市報第212集、1989
『有田・小田部第11集』市報第234集、1990
『有田・小田部第12集』市報第264集、1991
『有田・小田部第13集』市報第265集、1991
『有田・小田部第14集』市報第266集、1991
吉良国光『小田部氏関係資料』福岡市博物館研究紀要創刊号、1991
『有田・小田部第15集』市報第306集、1992
『有田・小田部第16集』市報第308集、1992
『有田・小田部第17集』市報第339集、1993
『有田・小田部第18集』市報第340集、1993

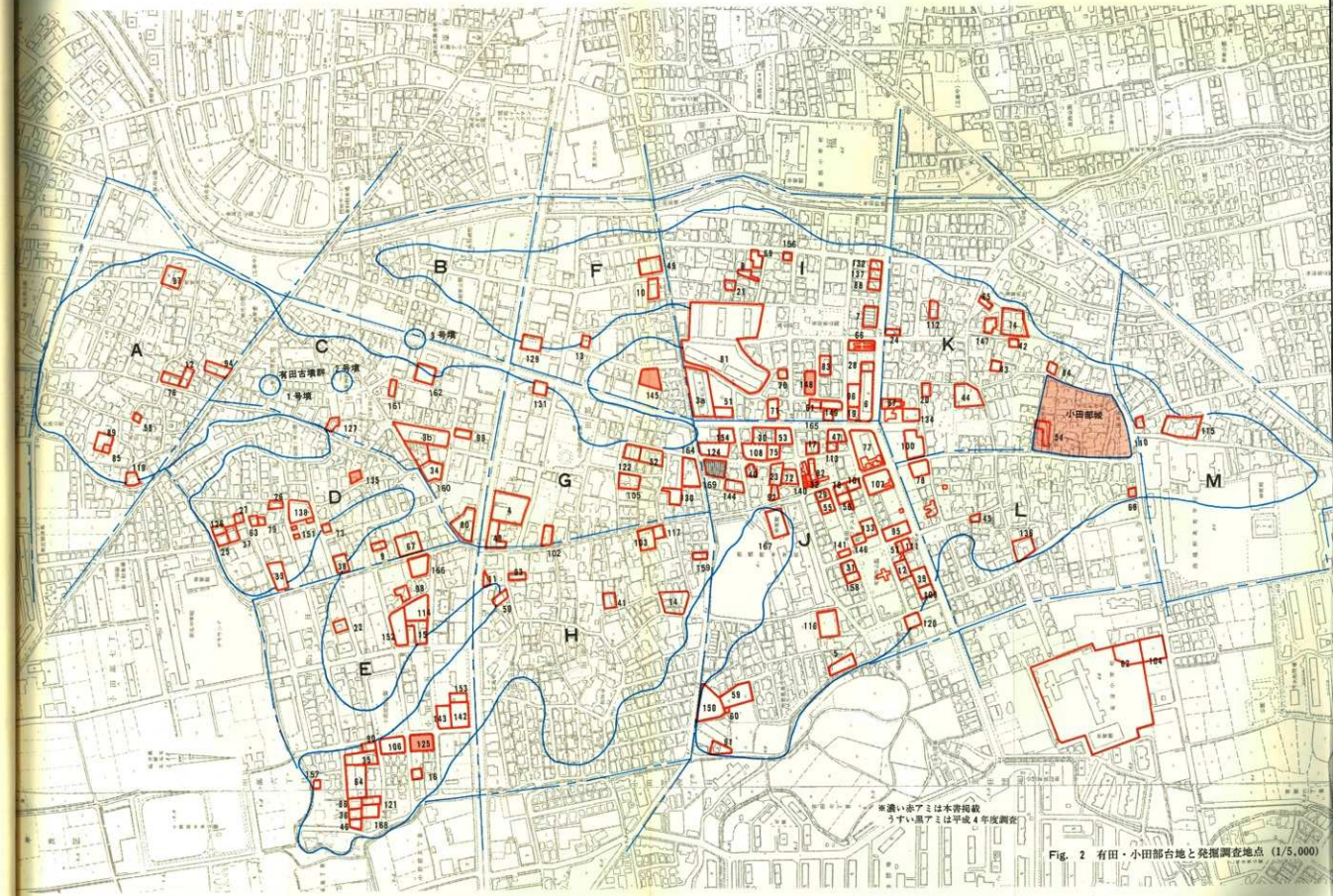


Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点 (1/5,000)

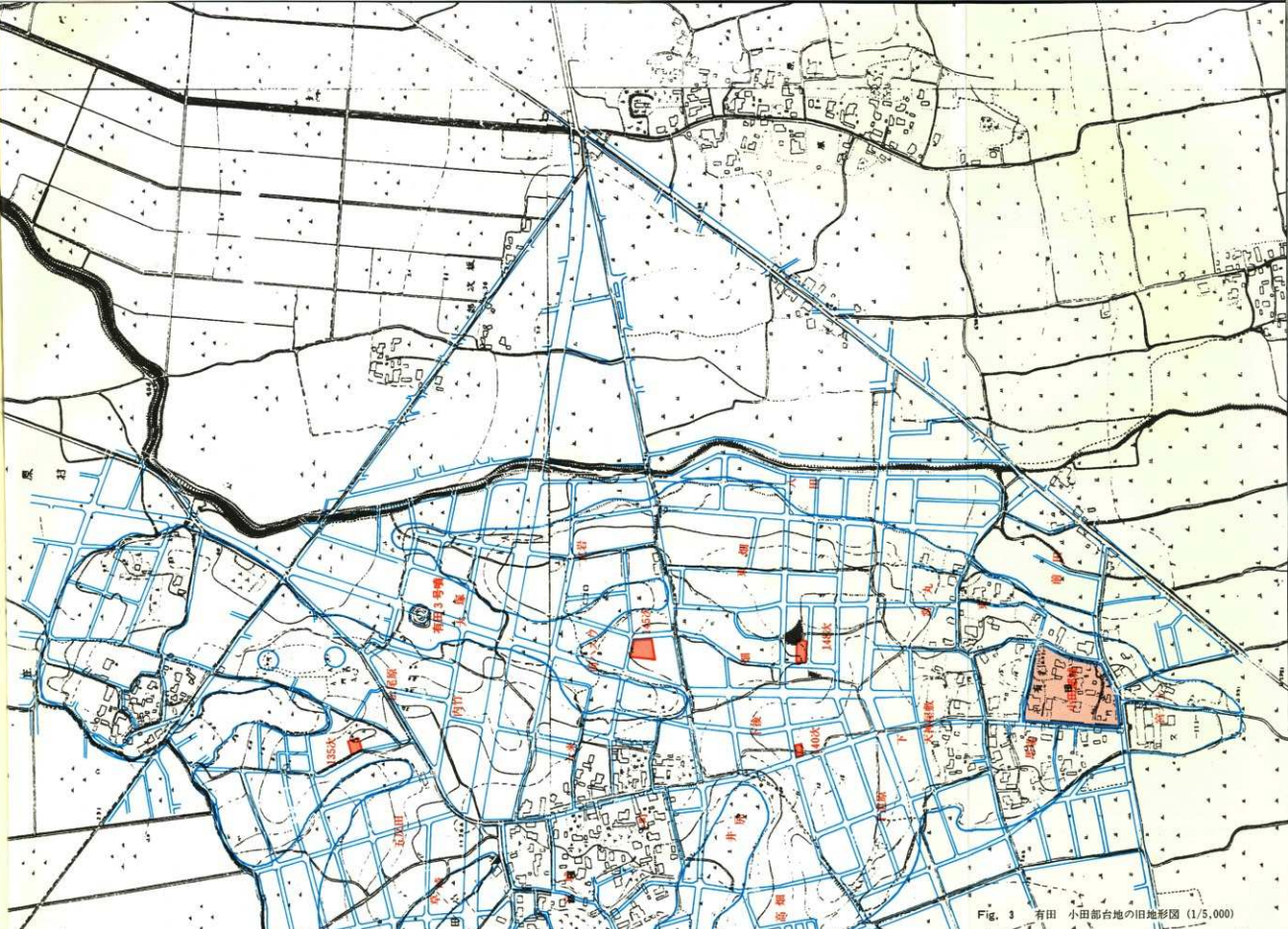


Fig. 3　有田　小田部台地の旧地形図（1/5,000）

第３章　調査の記録

―小田部地区の調査―

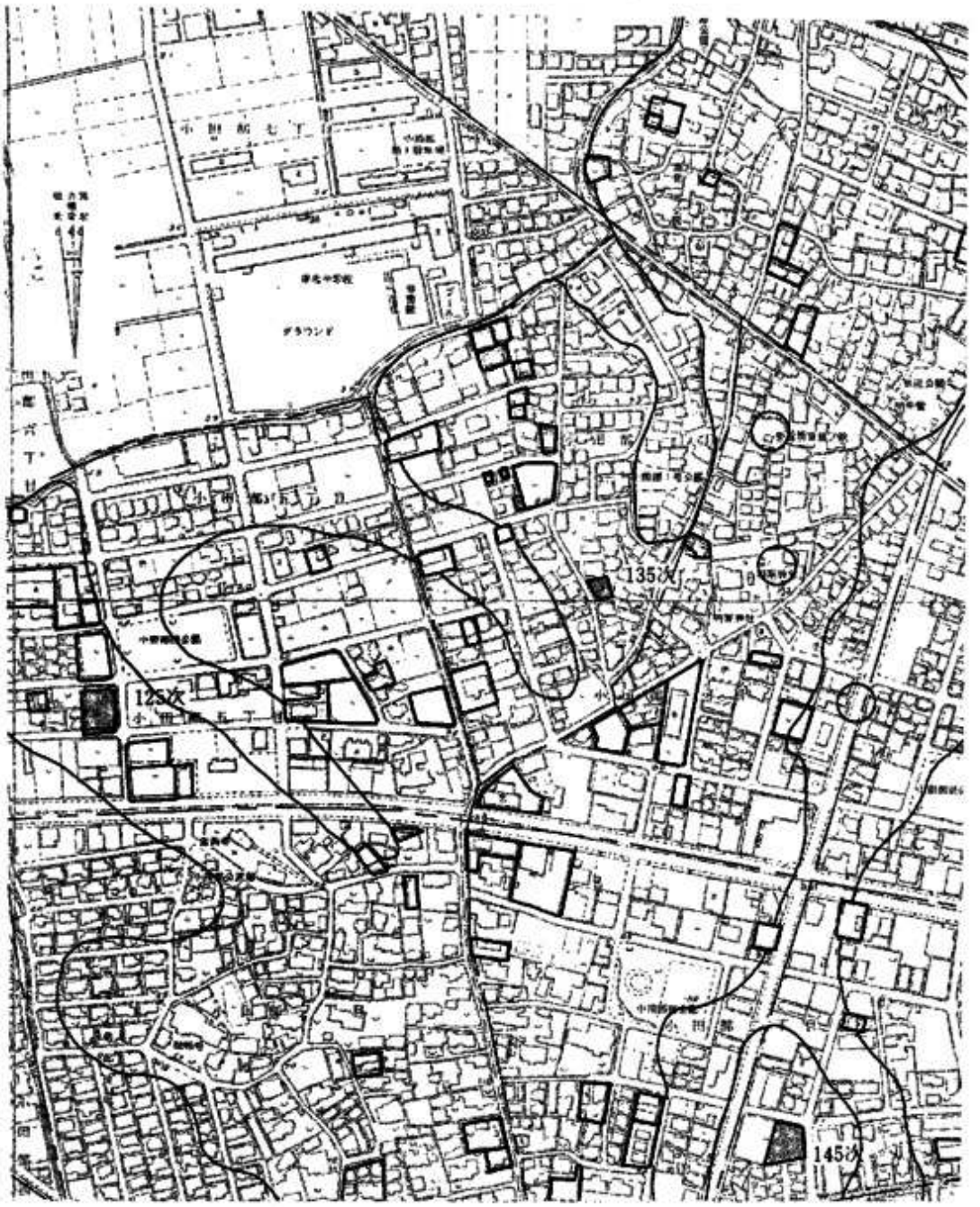


Fig. 4　小田部地区調査地点位置図 (1/5,000)

1．第125次調査（調査番号8718）

1）　調査区の地形と概要

申請地は早良区小田部５丁目172外に所在し、北に八手状に拡がる小田部台地の一番西側台地の中央部に立地する。現標高は約6.5mを測る。調査区の現況は畑であった。

申請地周辺は小田部地区で最も多く調査が行われており、過去の調査で縄文時代から中世末期に至る迄の各時代の遺構・遺物が確認されている。申請地の北側では弥生時代前期末から後期初め頃迄の甕棺墓地が確認され、古墳時代については住居址は周辺全体に確認されている。特に東側斜面では住居址の残りは良好である。古代では申請地北側の第35次・64次調査区で３本柱の柵に囲まれた倉庫群が確認されている。又中世では方形に巡る濠状遺構が見つかっており、中世居館の存在が予想されている。

発掘調査は昭和62年６月29日から10月７日迄行った。調査面積は申請面積732㎡中722㎡である。

調査区の遺構面は黄褐色又は明褐色の烏栖ローム土で、表土下約20～50cmで検出した。レベルは南西から北東方向へ若干低くなり、北側は一段少し段落ちする。堆積土も北側が少し厚くなるが、包含層はなかった。主な検出遺構は弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居址９棟、掘立柱建物５棟、土坑・貯蔵穴９基、中世末濠２条などである。出土遺物は竪穴住居址や溝を中心に多量出土した。

2）　遺構と遺物

竪穴住居址

SC01（Fig.６、PL.４）

調査区中央部で検出した主軸を南西から北西に取る住居址である。住居SC06・07を切っている。平面形は略方形を呈し、規模は東西長7.46m、南北長6.57mを測る。区画整理時の削平で残りは余り良くない。埋土は上層が10～15cmの黒褐色土であるが、その下は多量に炭化物と焼土ブロックが広範に検出され、火災を受けた家屋である事が判明した。炭化した住居の構築材が残っており、屋根の棟木から葺きおろした垂木などが確認出来た。また東・南・北の壁沿いに特に焼土ブロックを多く検出した。焼土は硬く締っていた。この焼土・炭化物層を取り除くと床面になる。床面中央には炉址と思われる焼土面を検出した。焼土面の形状は不定形で、長さ１m、幅0.7mの規模である。壁沿いには幅20cm、深さ10cm位の溝が全周し、間仕切り溝も北壁・東壁部に認められる。南壁中央部には土坑SK13が検出された。規模は0.95×1.05m、深さ45cmを測り、底面は壁近くが楕円形状に一段深くなる。主柱は４本柱であるが、それに付属する柱

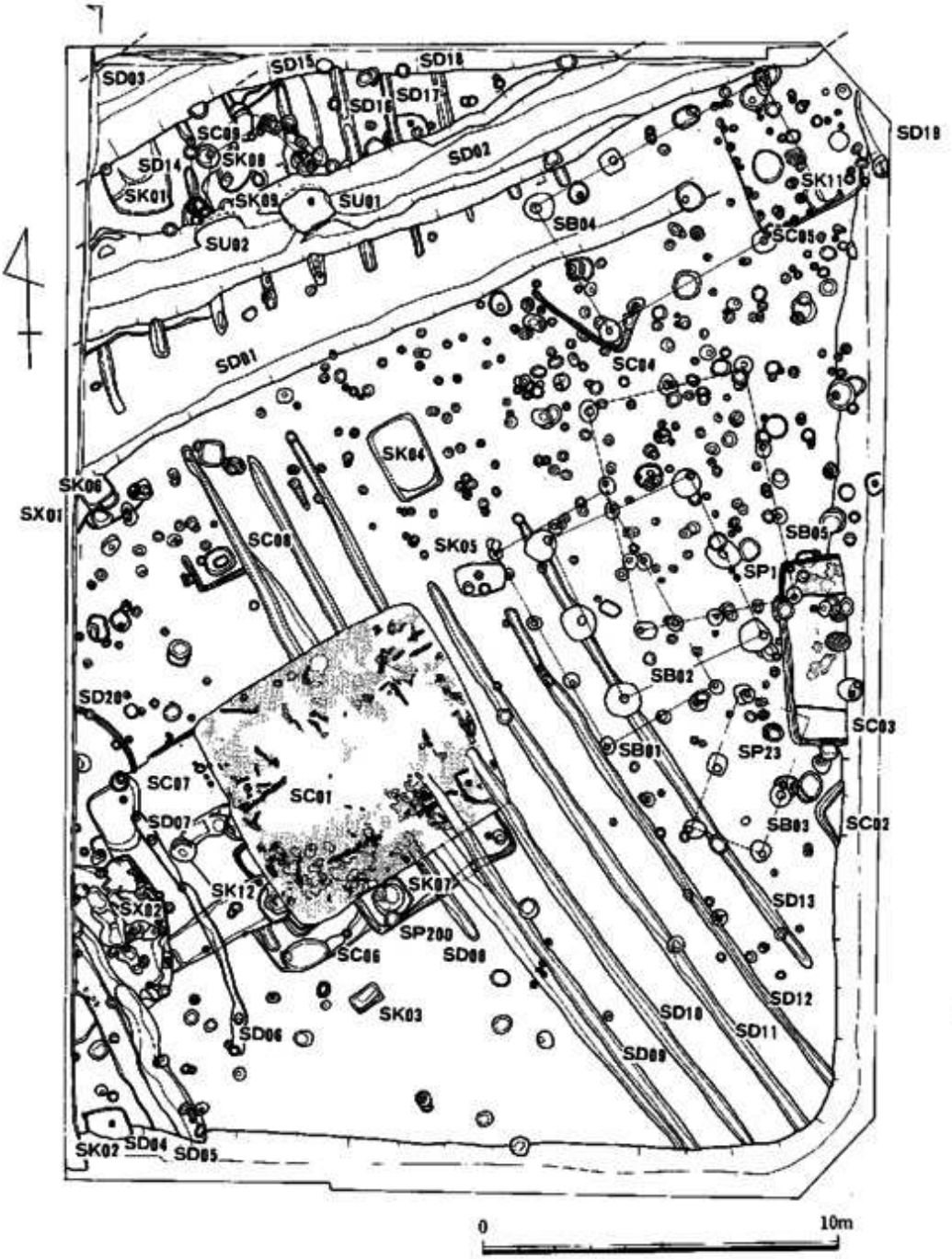


Fig. 5　第125次調査区遺構配置図 (1/200)

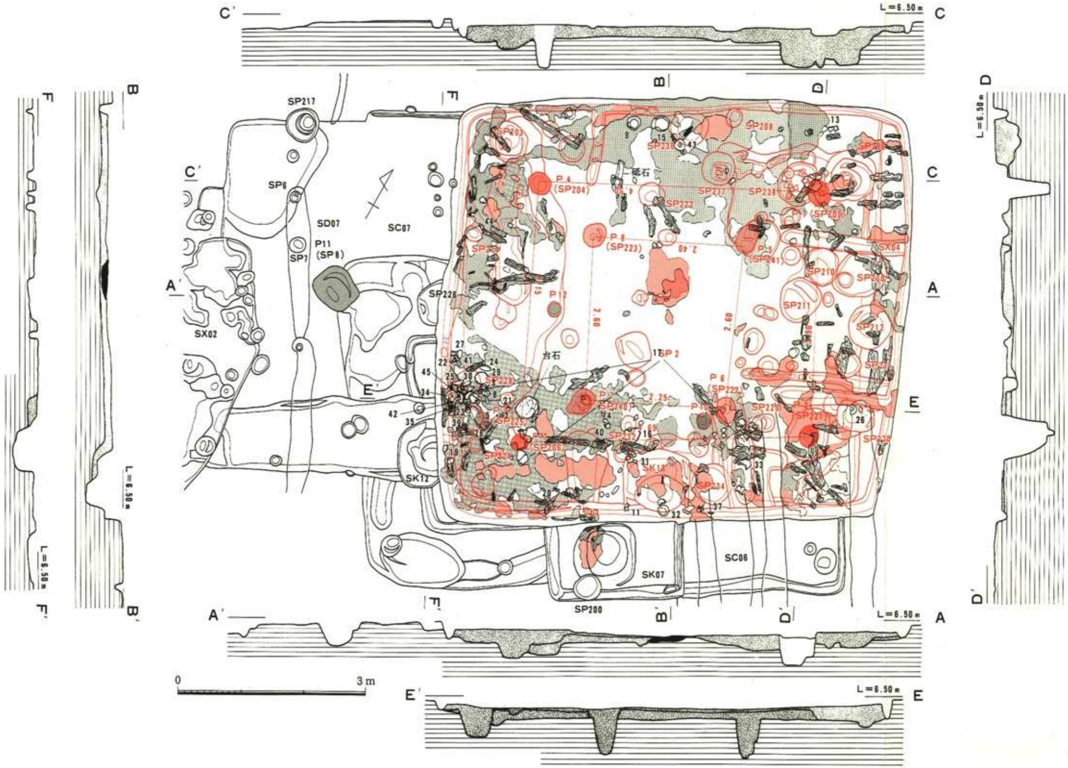


Fig. 6　SC01・06・07 (1/60)

穴も幾つか認められた。床面は暗褐色粘質土と黄褐色の地山ロームブロックの混合土を貼床している。この住居址はSC06・07を切るが、長さの規模・主軸の取り方はSC06・07とほぼ同様であり、建て替えられた事が考えられる。これについては小結で再度考察を加える。

出土遺物（Fig. 7～15、PL.18～21）

多量の遺物が表土直下からまとまって検出されており、特に住居の南側に集中している。表土剥ぎ作業中、遺物の表面を若干削っている。遺物としては土師器の壺・甕・高杯・小形丸底壺・鉢や須恵器の壺、勾玉・臼玉、黒曜石の剝片などが出土している。砥石や作業台石なども出土したが、不注意から整理作業中に紛失し、ここに図示・報告する事が出来ない。

1～44は焼土・炭化物面出土、1～9は壺である。1・2は小形の壺で、いずれも胴の張りが小さい。1は1/2片で復元口径9.0cm、胴部最大径11.9cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上る。外面は荒れがひどいが、胴内面はヘラ削りである。2はややいびつで、復元径に難がある。外面は縦の刷毛のちナデ、内面はナデのちヘラ削り。頸部外面に煤が付く。外面色調は1が淡灰黄色、2が灰桃色。胎土は1が石英粒を多量に含み、2は余り含まない。3～5は小形丸底壺。3は完形で底部は平底。ややゆがむが、口径は6.5～7.0cm、器高6.8cmを測る。手捏で指おさえ痕が内外全面に残る。外面には刷毛を施す。4は胴部1/4片。器壁はやや荒れるが、内外指おさえ痕が残る。外面には黒斑が残る。5は球形のものである。口径8.6cm、器形6.9cmを測る。胴部には焼成前穿孔の直径1.3cmの穴がある。調整は胴部下半が粗い刷毛、内面と外面上半が指おさえである。外面色調は3が灰黄色、4が黄色、5が灰桃色。胎土は3が石英微粒を多く含み、4・5は石英・褐色の粒子をわずかに含む。6～9は中形の壺である。6は復元完形の袋状に内湾して外へ開く口縁と、扁球気味の胴部を持つ器形である。口径12.6cm、器高15.3cmを測る。胴外面は斜めの細かい刷毛とナデ、口縁内面はヘラ削りで他はナデである。吉武4次調査SD05出土の壺と器形的に類似する。7は肩の張った胴部と細く締まった頸部を持つ器形で、最大胴径は16.7cmを測る。外面はやや磨滅するが、刷毛のちナデ消し、内面は胴部に指おさえ痕が残る。焼き胎土は一般的な土師器とは異なり、軽い感じがする。8は須恵器で肩の張る胴部を持ち、口縁部が直立気味に開く器形である。口縁部には2条の突帯を持ち、その間に櫛描波状文、胴上半に2条の凹線とそれに挟まれた櫛描波状文が巡る。調整はナデで、肩部外面に自然釉がかかる。9は短頸壺でほぼ完形。生焼けの須恵器のような器質で、全体に薄手である。口径10.4cm、器高18.7cm、胴部最大径20.3cmを測る。口縁部に一条突帯が巡る。調整は軟質の為、全体に磨滅が著しいが、外面下半はヘラ削りのような感じである。底部は平底でわずかに上げ底である。類を見ない器形である。外面色調は6が暗灰桃色、7が淡灰黄色、8が明灰色、9は淡桃黄色。胎土は6が精良で雲母微粒を多く含み、7は石英微粒を少し含み、8は精良、9は精良で褐色の粒子を若干含む。

10～12は甕である。10は小形の甕口縁部1/4片で、復元口径12.6cmを測る。口縁部がやや直立

気味に開き、厚手である。調整は胴外面は縦刷毛で内外面に指おさえ痕が残る。11は1/3片で、復元口径15.1cmを測る。く字状に開く口縁で、やや肥厚する。口縁部内外面はナデで、胴内面はヘラ削りである。12は胴部1/8片で、胴部復元径はやや正確さにかける。胴外面は斜め刷毛、内面は横ヘラ削りである。外面色調は10が淡灰黄色、11が淡灰桃黄色、12が淡桃色。胎土は10・11が石英微粒を多く含み、12は精良。

13～17は短頸壺である。13・14は下膨れの胴部としまり気味の頸部から外反気味に開く器形である。13は復元口径14.8cm、器高26.0cmを測り、口縁部はかなりひずむ。器壁はやや磨滅するが、外面は横又は斜め刷毛、内面はヘラ削り。外面には黒斑がある。14は13より胴部に丸味を持ち、復元口径14.5cm、器高25.3cm、胴部最大径22.9cmを測る。器形はかなりひずむ。15は胴部の肩がやや張り、直立気味の口縁部を持ち、底部が平底気味の器形。口径13.3cm、器高23.0cm、胴部最大径21.4cmを測る。調整は胴部外面は刷毛のちナデ。内面はヘラ削りで、口縁部外面には指おさえ痕が残る。16は球形の胴部としまり気味の頸部から短く直立する口縁部を持つ器形で、底部は扁平である。復元口径13.7cm、器高27.0cm、胴部最大径27.0cmを測る。胴外面はかなり磨滅するが、上半に縦刷毛が残る。胴内面はヘラ削り。口縁部は横刷毛である。17は袋状の口縁を持つ球体のやや大形の短頸壺1/2である。復元口径24.8cm、器高32.7cm、胴部最大径34.0cmを測る。調整は胴外面が斜め刷毛、内面はヘラ削りするが、かなり磨滅する。外面色調は13・14・16は淡桃黄色、15は桃褐色、17は灰黄色。胎土は13・14・16・17は石英粒子を多く含むが、15はわずかに含む程度である。

18～21は椀又は杯。18はややひずむが完形で口径14.0cm、器高4.5cmを測る。平底気味の底部を持ち、口縁端部はわずかに外反する。器壁は磨滅が著しいが、指おさえ痕が残る。19・20は底の浅い尖り気味の丸底の底部を持つ器形。19は口縁部が少し外へ屈折する器形。口径は13.6cm、器高5.2cmを測る。外面は斜め刷毛、その他はナデ。口縁外面に指おさえ痕が残る。20は1/3片で、復元口径12.6cmを測る。器壁は磨滅が著しく調整は不明。21は小杯ともいうべき器形で、完形の手捏土器。口径8.2cm、器高3.6cmを測る。底部は平底である。外面色調は18が桃色、19が灰桃黄色、20が桃黄色、21が淡黄色を呈し、胎土は18・19が石英粒子を多く含み、20は石英・金雲母の微粒を多く含む。21は余り石英粒子を含まない。

22～45は高杯である。形態から3類に分ける。Ⅰ類は底部に明瞭な段の付く丸味を持った杯部で、口縁部は内湾して外へ開く。比較的大形で、脚裾部が筒部から大きく屈折して水平に延びる。内外面刷毛目が残る。口縁端部が直ぐおさまるものⅠa、やや外反するものⅠbに細分する。Ⅱ類は杯部と底部の境に稜を持つが、口縁は径の割には深く丸味を持たない。口縁は外反気味に外へ開くが、開きは弱い。脚部は筒部から鈍角状に屈折する。筒部はわずかに膨みを持つ。脚部が大きく開くものⅡa類、開きが小さいものⅡb類に細分出来る。Ⅲ類はⅠ類とⅡ類の中間形態のものである。

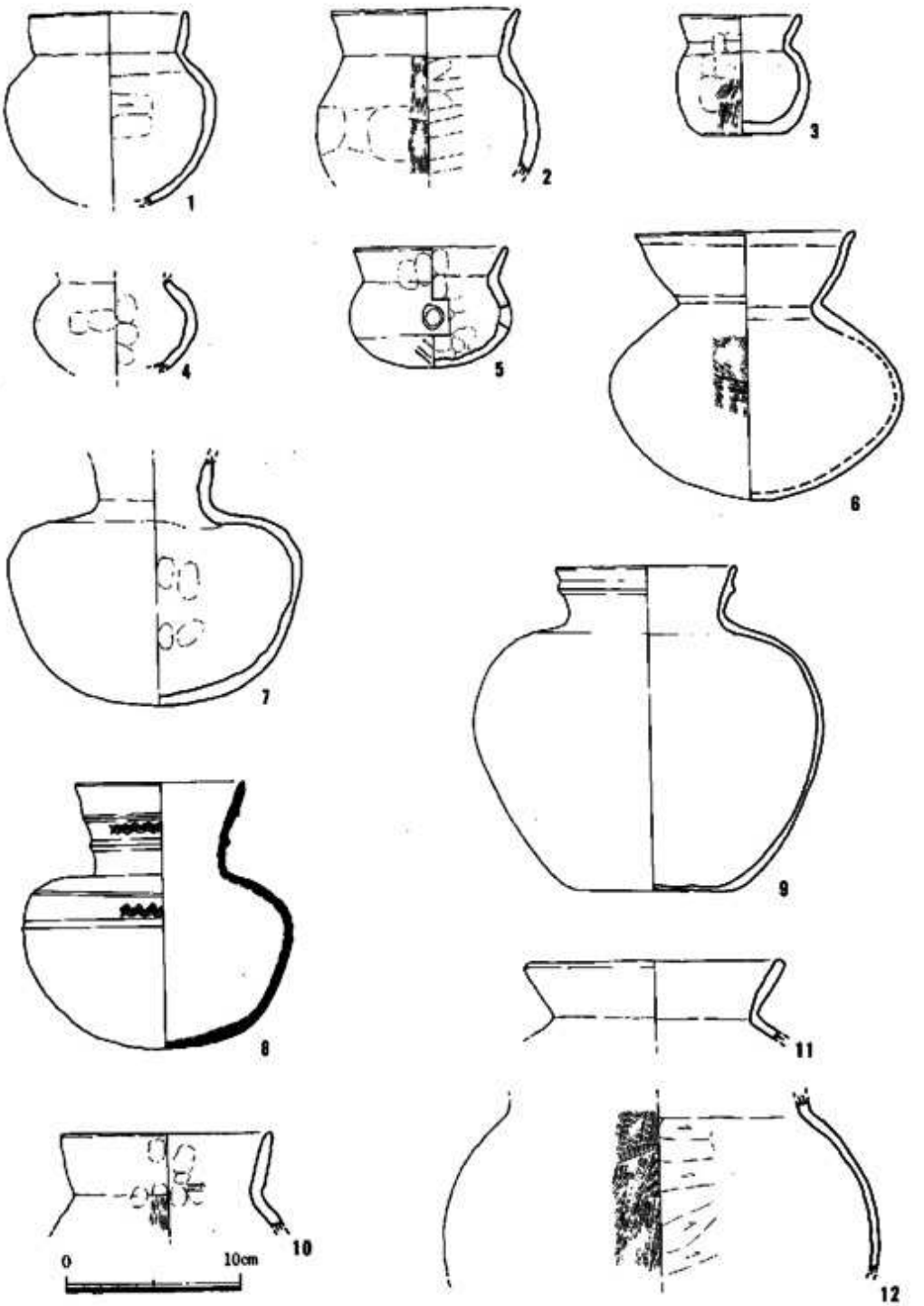


Fig. 7　SC01出土遺物1 (1/4)

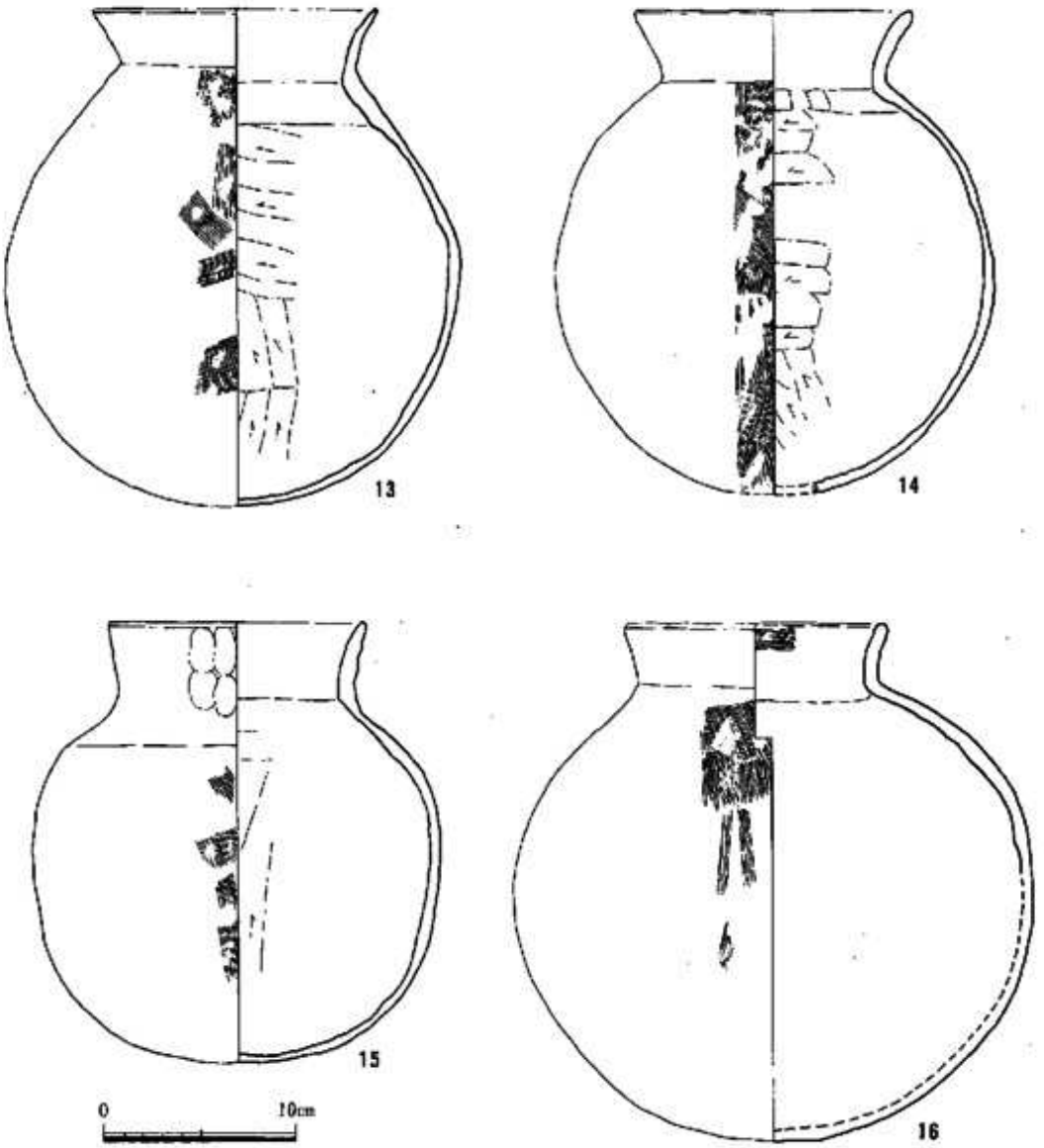


Fig. 8　SC01出土遺物2 (1/4)

22～26はⅠa類である。22は杯部片で、口径18.2cmを測る。調整は横ナデだが、外面には刷毛が少しと口縁内面には斜め刷毛が残る。23も杯部片で、口径17.9cmを測る。調整は横ナデだが、内外面斜めの刷毛が残る。24は完形で口径17.9cm、器高15.0cm、脚端径12.4cmを測る。やや磨滅するが、調整は横ナデで杯部外面には斜め刷毛が残り、脚筒部内面にはしぼり痕が残る。25～29はⅠb類。25は1/2片でかなり歪む。復元口径19.5cm、器高15.8cm、脚端径14.5cmを測る。調

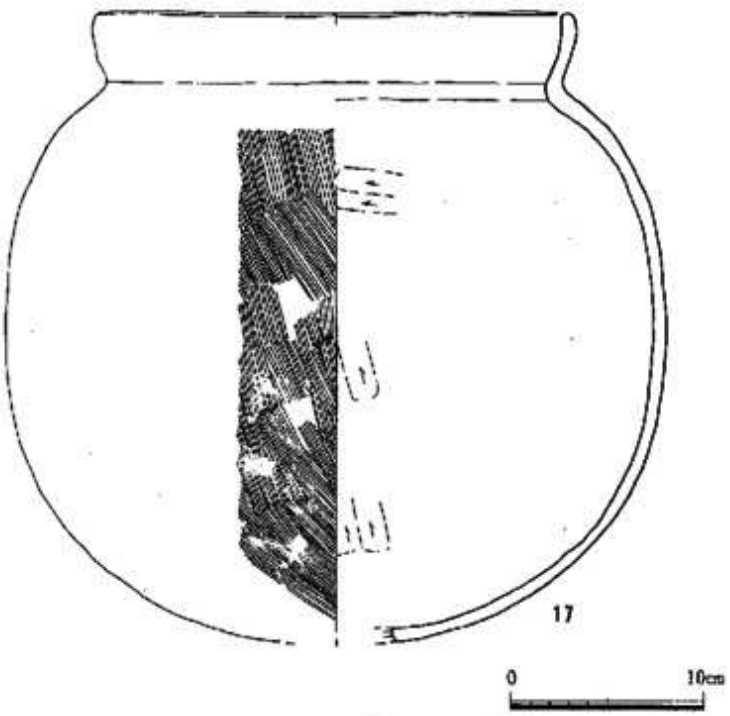


Fig. 9　SC01出土遺物3 (1/4)

整は横ナデだが杯部内面に斜め刷毛が残り、筒部にはしぼり痕が残る。杯部の底部との境の段は弱い。26は杯部片で、かなり歪み楕円形を呈す。口径は18.2～19.4cmを測る。外面はかなり荒れるが、内面には刷毛目が残る。27～29は杯部片で、口径は27が復元で18.4cm、28が17.4cm、29が19.5cmを測る。27は口縁部がかなり歪む。調整は内外面横ナデを主体とするが、いずれも刷毛目が残る。28・29は脚部との接合面で剥離している。外面の色調は22・23が桃色、24・28が暗桃色、25・27が暗桃灰色、26が桃黄色、29が灰黄色。胎土は22・26が石英微粒を多く含み、23・27・28が石英・金雲母の微粒を多く含み、24・29が雲母片を多く含み、25は精良で石英粒をほとんど含まない。30・31はIIa類である。30は1/2片で、口径18.2cm、器高13.2cm、脚端径は12.7cmを測る。やや磨滅するが横ナデ、脚部内面はヘラナデである。31は脚端部を欠失する。口径は19.4cmを測る。器壁は磨滅するが、杯部に刷毛目が残る。脚部には直径8mmの円孔が入る。外面色調はいずれも桃色を呈し、胎土は30が石英粒を多く含む。32～36はIIb類。32は杯部片で口径15.6cmを測るが、かなりひずむ。器表はやや磨滅するが、調整はナデ。外面刷毛目が残る。33は杯部片で口径15.6cmを測るがかなりひずむ。杯部底面に刷毛、その他は横ナデ。脚部とは接合部より剥離する。34は1/2片。復元で口径17.9cm、器高14.1cm、脚端径11cmを測るが、かなりいびつである。全体に磨滅が著しいが、脚部内面はヘラ削り。35は杯部1/2片。復元口径15.8cmを測る。器壁は全体に荒れるが、外面は刷毛目で、黒斑がある。内面は刷毛目のちナデ

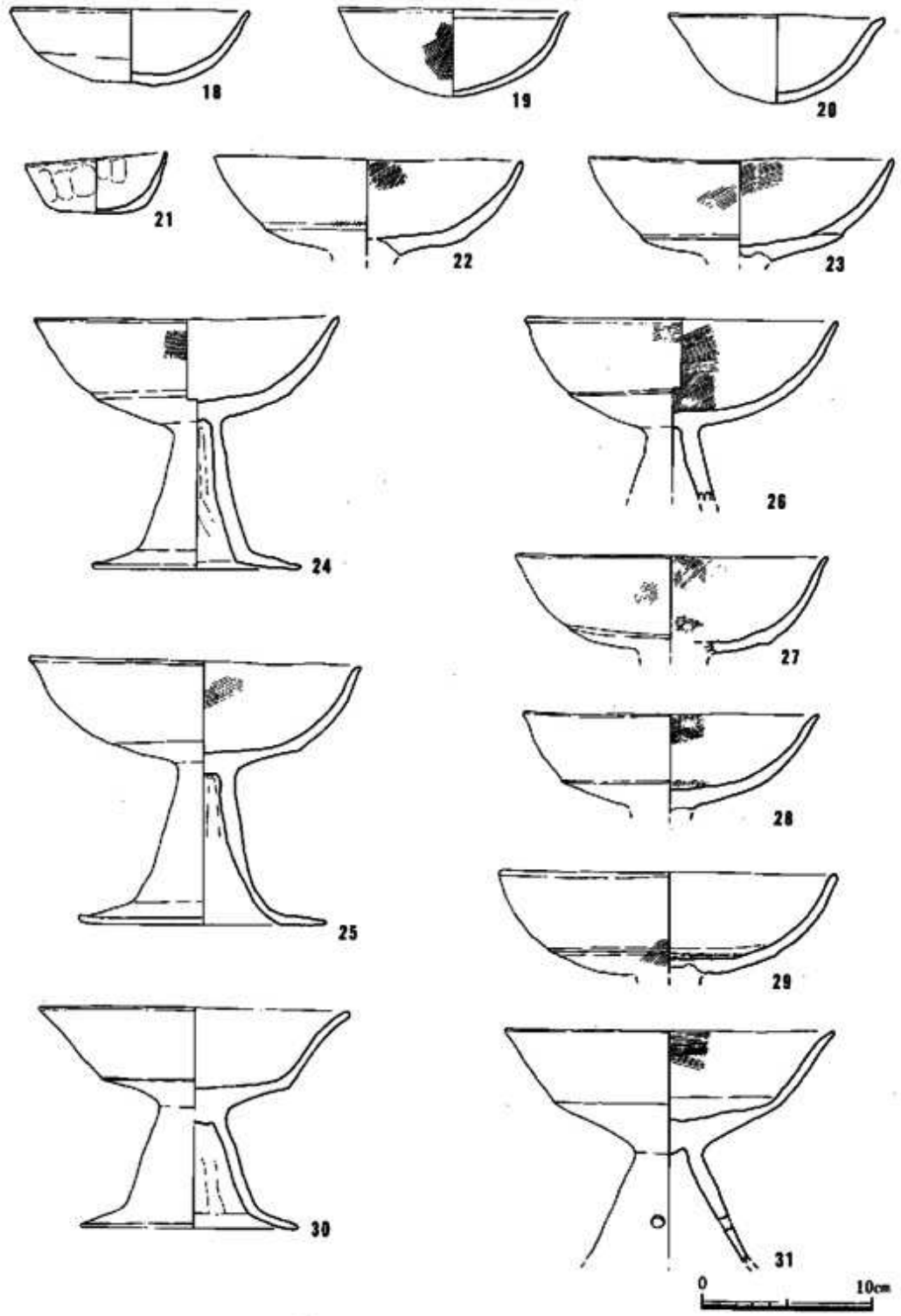


Fig. 10　SC01出土遺物4 (1/4)

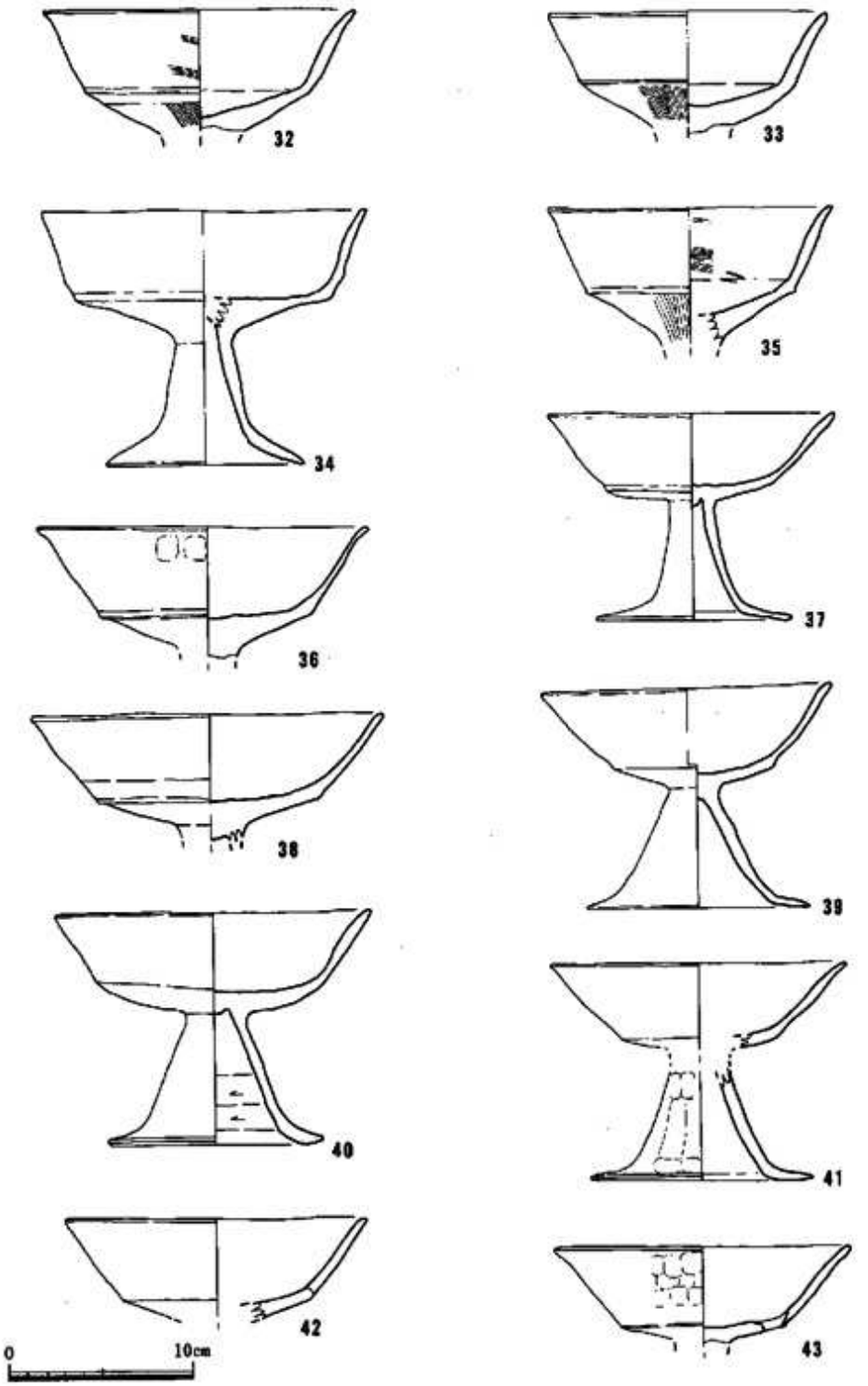


Fig. 11　SC01出土遺物5 (1/4)

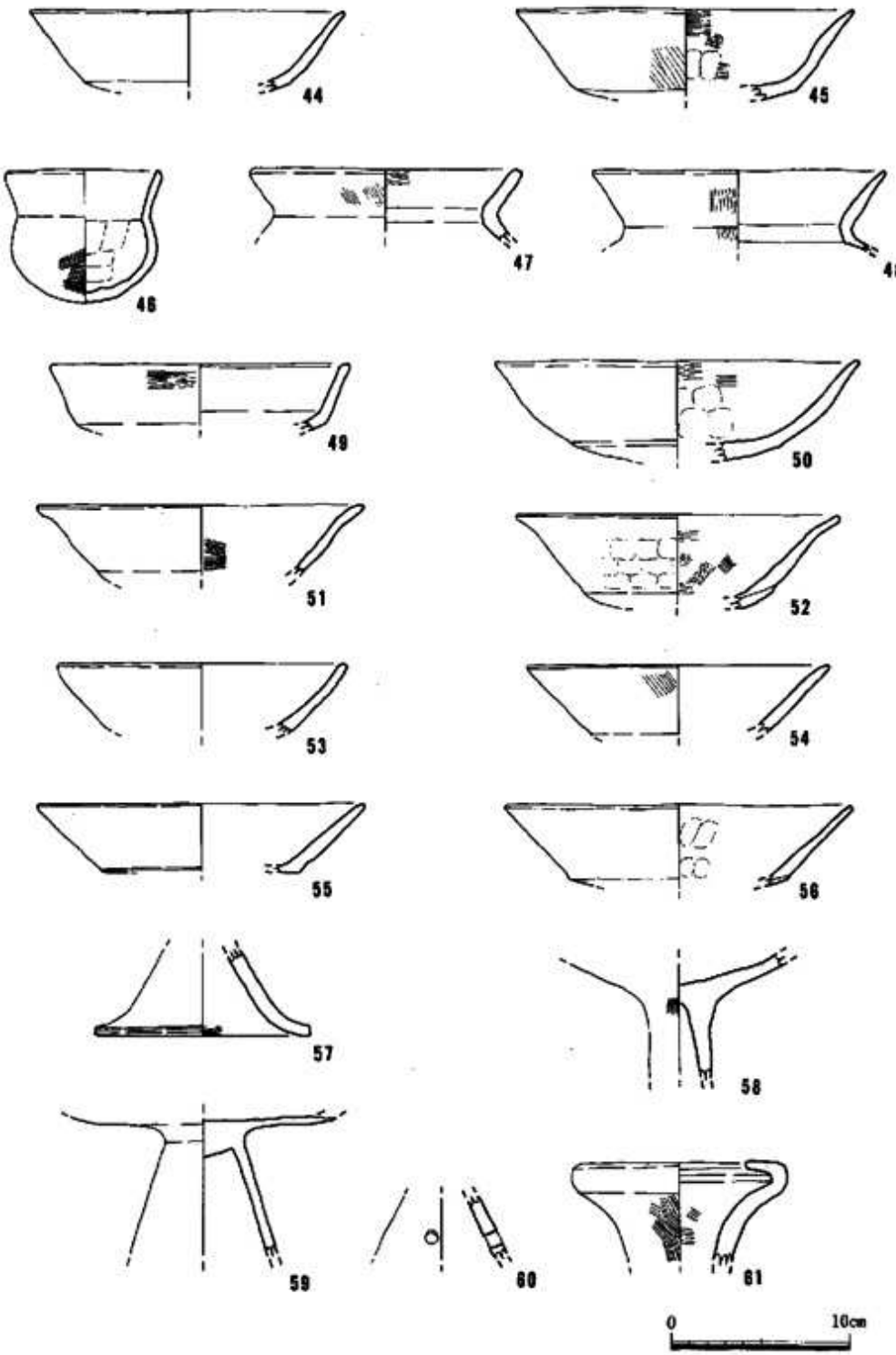


Fig. 12　SC01出土遺物6 (1/4)

で、工具痕が残る。36は杯部1/2片で、復元口径は18.4cmを測る。器壁は荒れるが横ナデ、外面の色調は32・33が桃黄色、34～36が桃色。胎土は32・34～36の石英粒子を多く含み、33が石英粒子・褐石粒子を多く含む。III類は37～45である。37は口径16.0cm、器高11.5cm、脚端径10.8cmを測る。かなり全形は歪む。全体に器壁は磨滅し、調整は不明。38は杯部片で口径19.5cmを測る。調整は横ナデで内底部は表面が剝離する。39は1/2片で、口径16.2cm、器高16.5cm、脚端径12.3cmを測る。器表はやや磨滅するが、調整はナデ又は横ナデ。脚部内面はヘラ削り。40は口径17.4cm、器高13.0cm、脚端径11.9cmを測る。器表はかなり磨滅するが、杯部外面に指おさえ痕がわずかに残り、脚内面は横ヘラ削り。41は推定復元したもので、復元口径16.4cm、脚端径12.4cmを測る。器壁は磨滅するが、ナデ調整で、脚部は指おさえ痕が残る。42は杯部1/2片で、復元口径16.7cmを測る。調整は横ナデ。43は杯部片で、口径16.4cmを測るがやや歪む。内外面横ナデで、杯底部に2次的に穿孔される。44は杯部1/6片で、復元口径17.8cmを測る。器表は磨滅し調整不明。45は杯部1/2片で、復元口径19.0cmを測る。器表はかなり磨滅するが、内外面刷毛目が、内底には指おさえ痕が残る。外面の色調は37・42・45が淡桃黄色、38・43・45が淡桃黄色、38・43・44は桃色、39・40が淡橙色、41が淡灰黄色を呈し、胎土は37・38・40・44が石英粒子を多く含み、39が白雲母の微粒を少量含む。41は白雲母の微粒を多く含み、42は石英・白雲母の微粒子を多く含む。43は精良で、石英・金雲母微粒を少量含み、45は石英粒子を少量含む。

46～61は床面及び床下貼付粘土出土の遺物である。46は炭化物層及び床面から出土した小形丸底壺1/3片である。復元口径8.8cm、器高7.4cmを測る。全体に器壁は荒れるが、胴外面は刷毛、胴内面はヘラ削りを施す。47・48は甕で床下より出土。くの字状の口縁部を持つ。47は口縁部1/8片で、復元口径15.4cmを測る。調整は横ナデであるが、内外面刷毛目が残る。48は1/6片で、復元口径16.6cmを測る。内外面ナデであるが、外面は縦刷毛が残る。49は複合口縁の壺と思われる口縁部1/6片、復元口径17.0cmを測る。外面は横刷毛のちナデである。外面色調は46が淡黄色、47・48が淡灰桃色、49が灰桃黄色。胎土は46・47・49が石英微粒をわずかに含み、48が石英・褐色微粒子をわずかに含む。

50～59は高杯である。50は床及び床粘土中出土のもの。丸底の杯部を持つ大形の高杯。杯身1/8片で、復元口径20.6cmを測る。全体に磨滅がひどいが、内面にかすかに粗い刷毛目が残る。51・52は大きく外反気味に開く杯部である。51は1/4片で、復元口径18.5cmを測る。全体にナデ調整であるが内面に刷毛目が残る。52も1/4片で、復元口径18.4cmを測る。外面はナデで指おさえ痕、内面に刷毛目が残る。53は杯部2/3片で、復元口径16.5cmを測り、ややいびつである。内湾気味に開く口縁部で、端部を丸くおさめる。内外面横ナデ。52・53共貼床粘土中から出土した。54・55は真っ直ぐに開く器形である。54は1/6片で、復元口径17.2cmを測る。外面は刷毛目が残る。55は1/8片で、復元口径は18.5cmを測る。器壁は磨滅し、調整不明。56は1/4片で、復

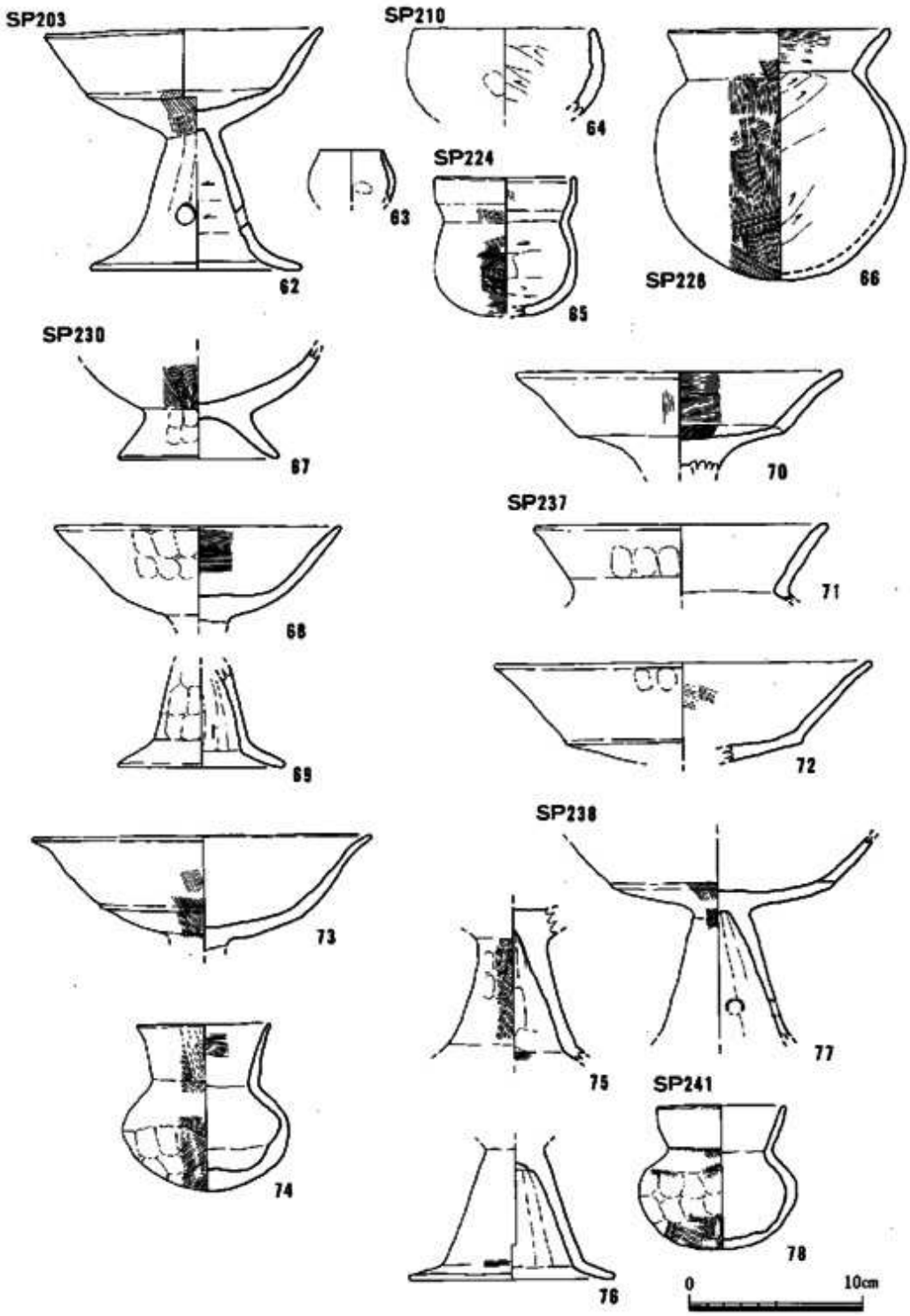


Fig. 13　SC01内ピット出土遺物 (1/4)

62・63はSP203、64はSP210、65はSP224、66はSP228、67～70はSP230、71～79はSP237、74～77はSP238、78はSP241。

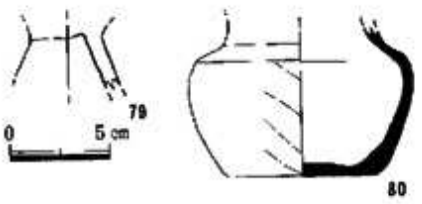


Fig. 14　SK13出土遺物（1/4）

元口径19.8cmを測る。器壁は磨滅が著しいが、内面に指おさえ痕が残る。55に近い。54・55は貼床粘土中、56は焼土中より出土した。57～60は脚部である。57は1/3片で、脚端部に浅い凹線が巡る。裾内面に横刷毛がかすかに残る。58は脚筒部が細く締まる器形。かなり器壁は磨滅するが、外面上半に刷毛目が残る。59・60は筒部が開く器形。60は直径0.8cmの焼成前穿孔の円孔を持つ。外面色調は50・59が淡黄色、51・57は淡灰桃黄色、52・56・58が淡灰黄色、53が淡桃色、54が灰黄色、55が淡灰桃黄色、60が淡桃黄色。胎土は50・55・59が石英粒子を多く含み、51・52・54は精良で、石英微粒子をわずかに含み、53・60は精良で、石英・褐色微粒子をわずかに含む。56は石英・褐色粒子をやや多く含む。57は褐色・石英微粒子を多く含む。58は石英・雲母・褐色微粒子をわずかに含む。61は口縁部が袋状を呈す器台1/8片。口径12.2cmを測る。内外面粗い刷毛を施す。外面色調は淡桃褐色を呈し、胎土は石英粒子を多く含む。

62～78は床面・床下検出のピット出土遺物で、いずれも土師器。62・63はSP203出土。62は完形の高杯で口径16.0cm、器高14.1cm、脚端径12.3cmを測る。先に分類したIIa類に入るもので、脚部に焼成前穿孔の直径1cmを測る円孔が2ヶ所ある。調整はナデで、杯部外底は刷毛、脚部内面はヘラ削り。63は手捏の鉢1/6片。復元口径3.6cmを測る。全体に磨滅がひどく調整は不明。外面色調は62が暗桃色、63が明橙色でいずれも黒斑がある。胎土は62が石英微粒を多く含み、63は精良で細砂粒をわずかに含む。64はSP210出土。椀1/2片で、復元口径10.4cmを測る。球形の胴部を持つ器形で、外面は指ナデでおさえ痕が残り、内面はヘラ削り。外面色調は淡灰黄色、胎土は精良で石英微粒を少し含む。65はSP224出土。小形丸底壺1/4片で、広口で胴部が張らない器形。復元口径8.2cm、器高8.1cmを測る。調整は外面横刷毛、内面ヘラ削り、色調は暗灰桃色、胎土に石英粒をわずかに含む。66はSP228出土。完形の小形壺で、やや歪むが口径13.3cm、

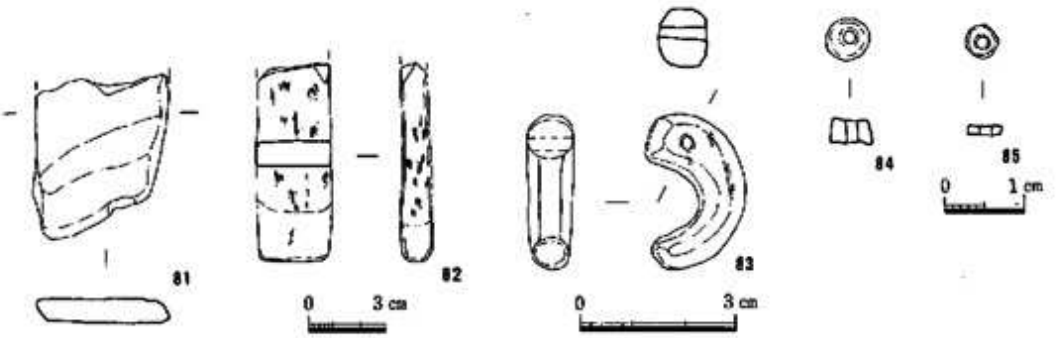


Fig. 15　SC01出土遺物7（1/1・2/3・1/3）

器高14.6cmを測る。外面は縦又は斜め刷毛で、内面は口縁が横刷毛、内面はヘラ削り。胴外面に黒斑がある。柱穴底に横たわって出土した。67～70はSP230出土。67は台付鉢で、脚台径9.4cmを測る。鉢部外面は刷毛で、内面はナデで、炭素を吸着させたのか灰黒色を呈す。脚台は刷毛のちナデ消し。68～70は高杯。68は杯部片で、口径16.6cmを測る。杯部は底部との境に明確な稜を持たない。外面はナデで、指おさえ痕が残り、内面は横刷毛を施す。69は脚部1/2片で、復元脚端径9.8cmを測る。外面は指おさえのちナデ。脚内面は削りを加える。70は杯部1/3片で、口縁部が外反して大きく開く器形。復元口径19.0cmを測る。細く長い脚部が付く器形であろう。杯内面には横刷毛、外面は刷毛のちナデ削り。接合部からの分離。67・70はSC01より古い時期の形態である。外面色調は67が灰黄色、68が暗灰桃色、69が淡灰黄色、70が灰黄色。胎土は67が石英微粒をやや多く含み、68・70が石英粒を少量、69が石英微粒を多く含む。71～73はSP237出土。71は甕口縁部1/4片で復元口径17.0cmを測る。ナデ調整で口縁部外面に指おさえ痕が残る。胴内面はヘラ削り。72・73は高杯杯部。72は1/3片で、復元口径21.9cmを測る。口縁部が外反気味に開く形態。調整は刷毛のちナデ。73は口径19.5cmを測る。丸底気味の底部から内湾気味に外反する口縁部を持つ。外面刷毛のち横ナデ。内面は器壁が荒れる。外面色調は71～73が淡灰黄色、胎土は71・72が石英粒子を少量含み、73は石英・褐色粒子を少量含む。74～77はSP238出土。74はほぼ完形の小形丸底壺。口径7.9cm、器高9.8cmを測る。全体に磨滅が著しいが、外面は刷毛目と指おさえ痕が下半に残り、内面はヘラ削りを加える。外面色調は淡灰黄色を呈し、胎土は石英微粒をやや多く含む。75～77は高杯で、75・76は脚部片。75は外面指おさえのち刷毛とナデ。内面は削り。76は復元脚端径11.9cmを測る。内外面ナデであるが、外面は横刷毛がわずかに残る。77は杯脚部片。外面は刷毛のちナデ、脚内面はヘラ削り。脚部には焼成前穿孔の直径1cmの穴が復元で2ヶ所ある。外面の色調は74が桃黄色、75が淡黄色、76が淡灰桃色、77が淡灰黄色。胎土は74～76が石英粒をわずかに含み。77が石英粒を多く含む。78はSP241出土。完形の小形丸底壺でSC01の主柱穴からの出土である。口を上にして出土している。口縁部はわずかに袋状に内湾している。胴外面は刷毛のちナデ、内面は削り。口縁外面は横ナデ。外面色調は桃黄色。胎土は石英粒を多く含む。

79・80はSK13出土。79は高杯脚部片で、II類に近い形態であろうか。80は須恵器と思われる平底の小形壺1/2片。口縁部を欠失する。復元口径7.6cmを測る。胴外面はヘラ又は板ナデ。胴上半は横ナデで若干自然釉がかかる。内面は横ナデ又はナデ。外面色調は79が淡橙色、80が灰色を呈す。胎土は79が石英・褐色粒子を若干含み、80が石英粒子を若干含む。

81は石錘である。上半を欠失するが花崗岩系の扁平な石材を用いている。下端を一部打ち欠いている。残存長6.4cm、最大幅5.1cm、重さ50gを測る。色調は淡灰褐色。82は手持ち砥石で石質は砂岩。色調は暗灰色。上端を欠失するが、残存長7.6cm、最大幅2.9cm、厚さ0.9cmを測る。表・裏2面を砥面として使用。83は勾玉。色調は黒灰色を呈し、石質は不明である。全長3cm、

直径1.1cm、孔径0.2～0.3cmを測る。全体に丁寧な研磨仕上。84・85は滑石の白玉。84は直径5㎜、高さ3㎜、孔径1.5㎜を測る。85は直径4㎜、器高1㎜、孔径1㎜を測る。81・82・84は床面、85は埋土上層、83はSK13埋土上層出土である。

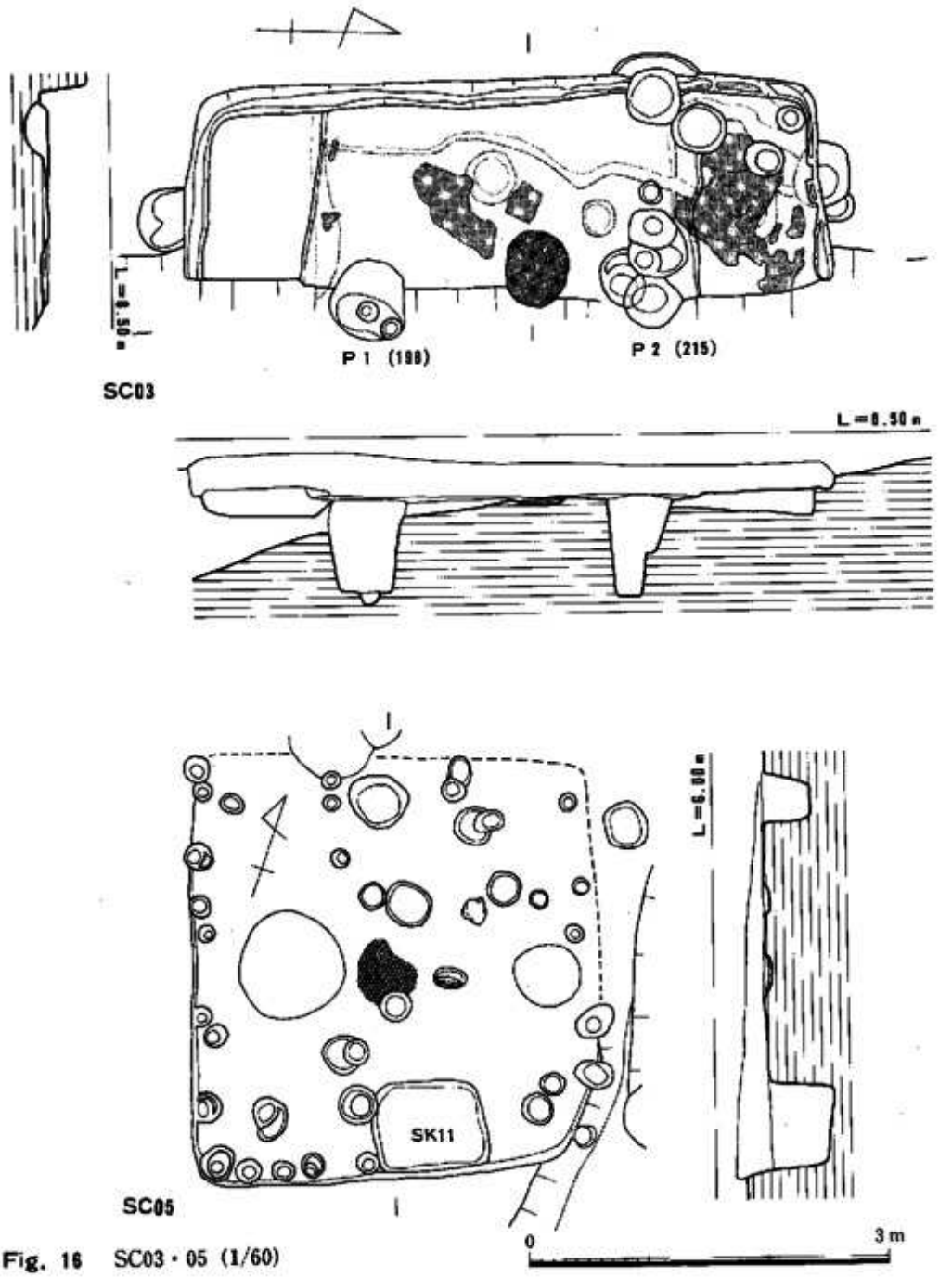


Fig. 16　SC03・05 (1/60)

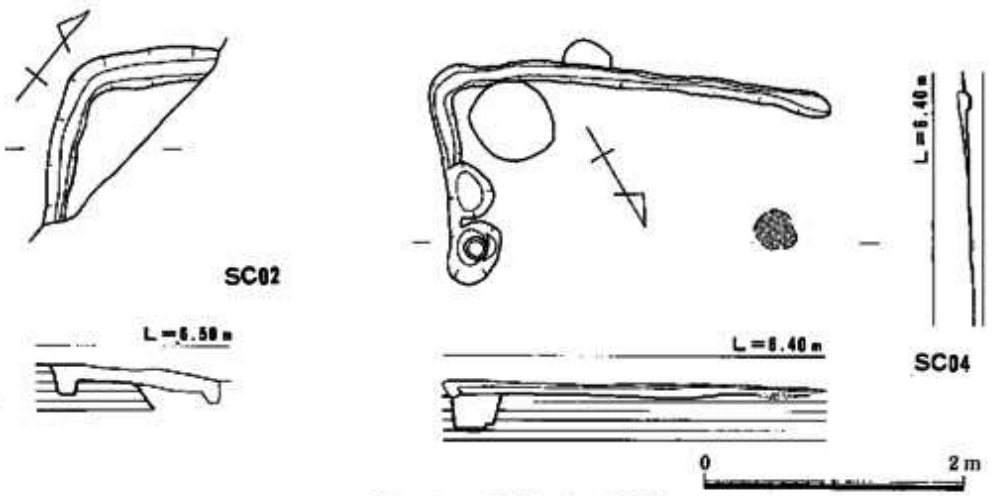


Fig. 17　SC02・04 (1/60)

SC02 (Fig.17、PL.7)

東側境界段落ち際で検出したコーナー部分のみの住居址。残存壁高は10cm程で、壁に沿って幅15cm、深さ10cm程の小溝が巡る。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig.18、PL.21)　弥生土器から土師器・陶器・青磁・白磁片・黒曜石剥片が少量出土しているが、量として土師器が多い。陶磁器類は上層出土である。

92は滑石製の平玉。直径12.5mm、厚さ3mm、孔径1.5mmを測る。色調は緑がかった灰色。

SC03 (Fig.16、PL.7)

SC02の北側、段落ち際で検出した住居。検出したのは西側半分のみでSB05に切られる。主軸を南北に取り、平面形は長方形を呈すと思われる。確認長は南北5.6m、最存幅2.2m以上、残存壁高32cmを測る。両側に幅1m、高さ5cm程のベッド状遺構を地山粘土で造り出し、壁沿いには周壁溝が全周する。主柱は2本柱で、柱穴は直径40～60cm、深さは85～90cmと大きく深くしっかりしている。主柱間には5～～60cmの楕円形を呈する焼土・炭化物がつまった底が浅く窪む炉がある。北側ベッド上及び炉の西側には焼土及び炭化物が散布しており、住居が焼けた可能性がある。床面からはまとまった遺物はなかった。ベッド状遺構及び床面粘土を除去すると、ベッド状遺構部及び壁に沿って一段深くなる。

出土遺物 (Fig.18、PL.21)　弥生土器から土師器の細片や黒曜石の剥片などが出土しているが、図示出来るものは少ない。

86は土師器の高杯脚部1/6片。復元脚端径10cmを測る。脚裾部が湾曲して大きく開く器形。器壁は磨滅し、調整は不明。外面の色調は桃色を呈し、胎土に石英・褐色粒子をわずかに含む。89は管状の土錘で残存長4.6cm、直径1.4cm、孔径2mm、重さ8.5gを測る。指おさえ仕上。色調は桃色を呈し、胎土は精良。94は凹基式の石鏃で、石質はサヌカイト。鏃身1.9cm、厚さ0.4cm、重さ0.74gを測る。貼床下からの出土。

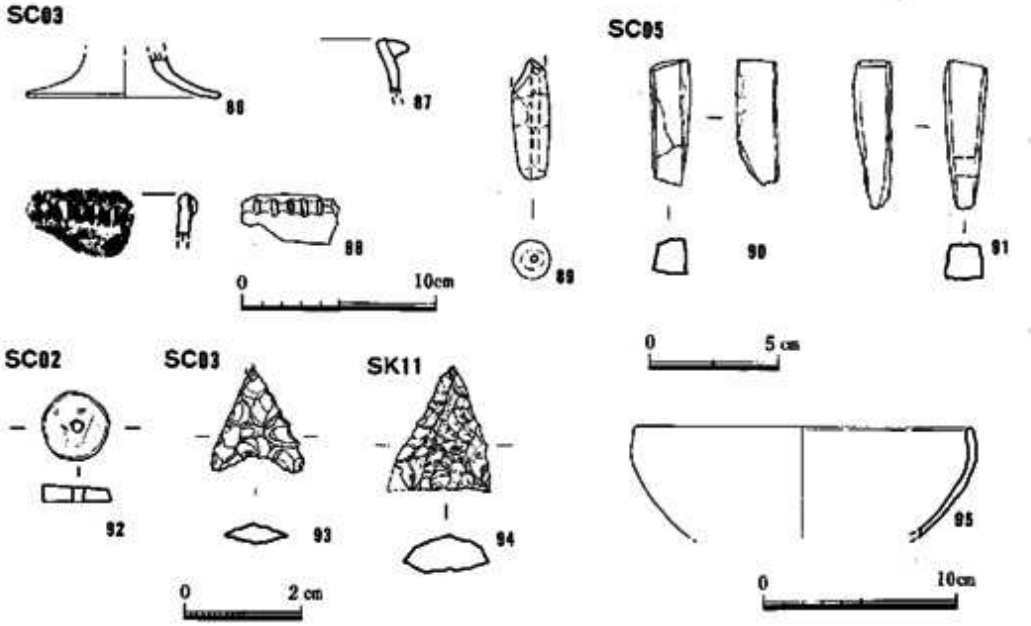


Fig. 16　SC02・03・05・SK11出土遺物（2/3・1/3・1/4）

SC04（Fig.17、PL.8）

調査区北側で検出した住居であるが、削平などによって南東コーナー部周溝と焼土面しか残っていない。主柱穴ははっきりしない。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は周溝内から弥生土器・土師器の細片が少量出土している。

SC05（Fig.16、PL.8）

調査区北東隅斜面上で検出した方形を呈する住居。南西側は壁が残るが、北東側は壁が削平で消滅する。規模は東西長3.5m、南北長3.6m、残存壁高20cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。床面はほぼ平坦である。明確な主柱穴は確認出来なかったが、壁沿いに直径10～25cm、深さ10～30cm位の小ピットが並んでいる。それらがSC05の柱穴と言えるのかもしれない。炉址は床面中央に検出された規模50×55cmの範囲の焼土面と考えられる。この炉は中央が浅く窪み、最大厚4cmを測る。

出土遺物（Fig.18、PL.21）　埋土中から出土しているが、量はさほど多くない。弥生土器片や土師器片らしきもの、黒曜石の剥片などがあるが、土器片は時期不明のものが多い。

87・88は弥生土器。87は甕口縁部小片。口縁部に断面三角形の貼付け突帯が付く。内外面ナデ。88は夜臼式土器甕口縁部細片。内外ナデ。外面色調は87が暗橙色、88が灰色を呈す。胎土はいずれも石英微粒を多く含む。90・91は柱状片刃石斧の未製品と思われる。いずれも断面は台形を呈し、石質は頁岩である。法量は90が長さ4.9cm、幅1.5cm、厚さ1.5cm、91が4.7cm、幅1.6cm、厚さ1.3cmを測る。

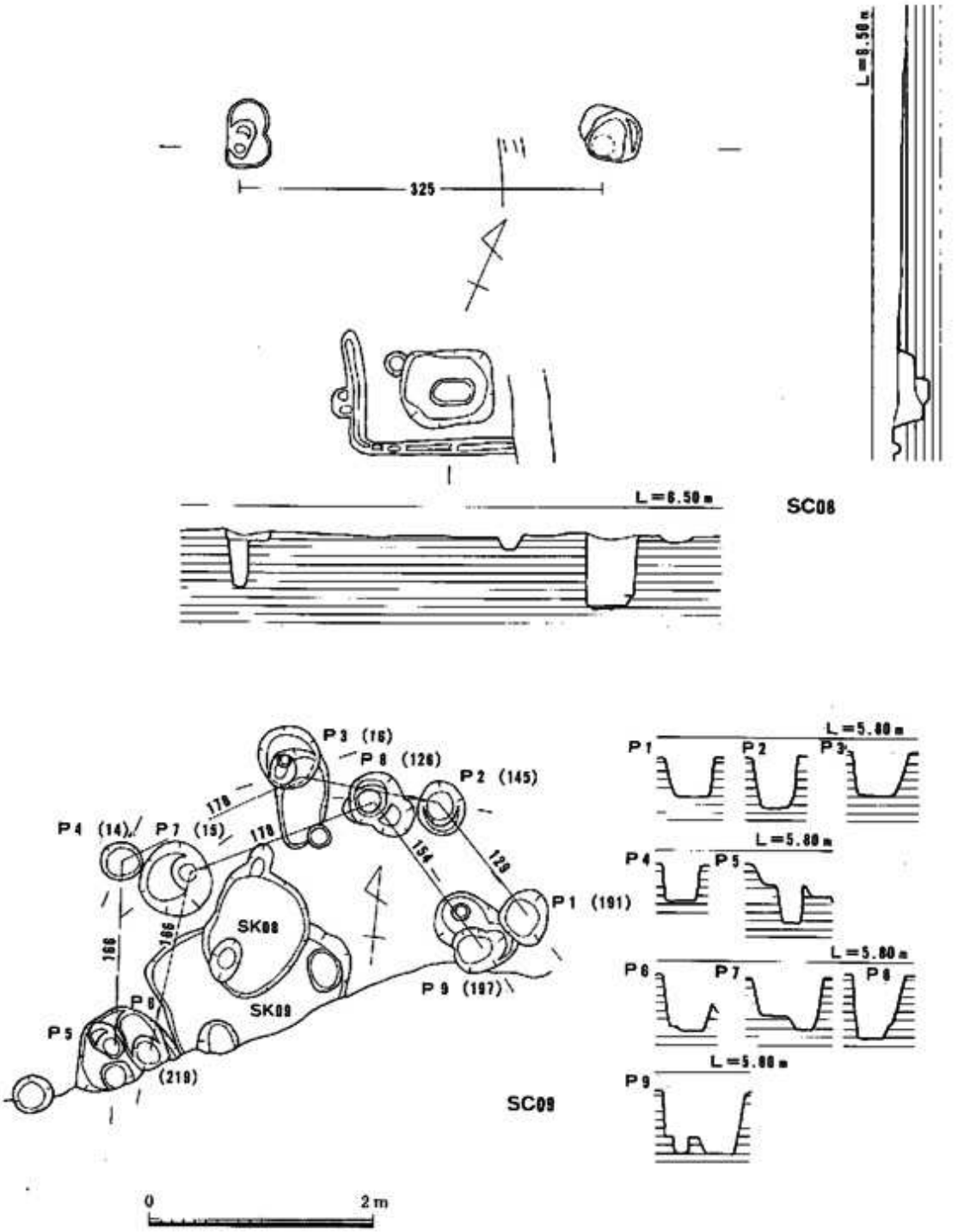


Fig. 19　SC08・09 (1/60)

SC06（Fig. 6、PL. 4・5）

SC01の南側に重複し、SC07に切られる住居。SC07と同様残りは悪く、確認したのは周壁溝と床面のみである。確認規模は東西長7.5m、南北５mを測る。南壁中央に0.85×0.8m、深さ45cmの隅丸方形を呈す土坑SK07がある。SK07西側には炭化物・焼土塊が流れ込んでいた。ベッド状遺構が南壁中央の土坑部を除いて全周する住居址であろう。主柱穴は２本でP９と10が相当すると考える。炉址は検出出来なかった。

出土遺物　床面密着のものはなく、周壁溝から土師器・須恵器の細片が少量出土している。

SC07（Fig. 6、PL. 4・5）

SC01に切られSC06を切り、西側はSX02に切られる住居。残存規模は東西で3.7m以上、南北5.6mを測る。遺存状態は悪く、床面のみ。周壁溝・ベッド状遺構は確認出来なかった。主柱は２本柱で、P11（SP８）とP12が相当する。南壁中央部にSC01に半分切られるが土坑SK12を確認した。SK12は規模長さ0.6m以上、幅1.1m、深さ37cmを測り、壁沿いは幅0.95～1.4mに亘って溝状に深さ12cm程一段下がる。又北西側にも楕円形状の落ち込みがある。炉址は不明であった。

出土遺物　床粘土中から土師器の甕口縁部らしい細片が10点程出土している。

SC08（Fig.19、PL. 9）

調査区北西側で検出したSC01と並行する住居。削平がひどく、壁沿いの土坑とベッド状遺構を区画する周溝の一部、２本柱の主柱を確認したにすぎない。土坑は平面隅丸長方形を呈し、底面は２段掘りで、規模は0.68×0.84mを測り、１段目迄の深さ22cm、２段目迄は更に14cm程下がる。主柱は直径45～60cm、深さ50～60cmを測る。柱穴径は痕跡から18cm前後を測る。主柱間は3.25mを測り、形状から土坑を挟んでベッド状遺構が全周するタイプで、規模はほぼSC06と同規模のものと思われる。

出土遺物　柱穴と土坑から弥生土器・土師器の細片を少量含む。

SC09（Fig.19、PL. 9）

調査区北西側SD02に南側を切られる柱穴だけの住居址である。南側を欠失する為断定は出来ないが、柱穴群が円形に巡る事から、弥生時代前期後半から中期後半迄の円形住居址と考えられる。柱穴群は組み合せから二重に巡り、少なくとも２時期の住居が考えられる。それぞれSC09、SC09'とする。SC09はP１～P５で柱穴形態は円形から楕円形、直径は35～55cm、深さは34～54cmを測り、柱間距離はP１－P２が1.25m、P２－P３が1.28m、P３－P４が1.79m、P４－P５が1.65mを測る。SC09'はP６－P９で、柱穴形態は円形又は楕円形で、直径42～65cm、深さは46－58cmと形態でSC09より一まわり大きい。各柱穴間距離はP６－P７が1.65m、P７－P８が1.75m、P８－P９が1.59mを測る。埋土は黒色粘質土から黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物　柱穴から細片が一点出土している。弥生土器から土師器・須恵器片を数点含み、時期を比定出来るものはない。

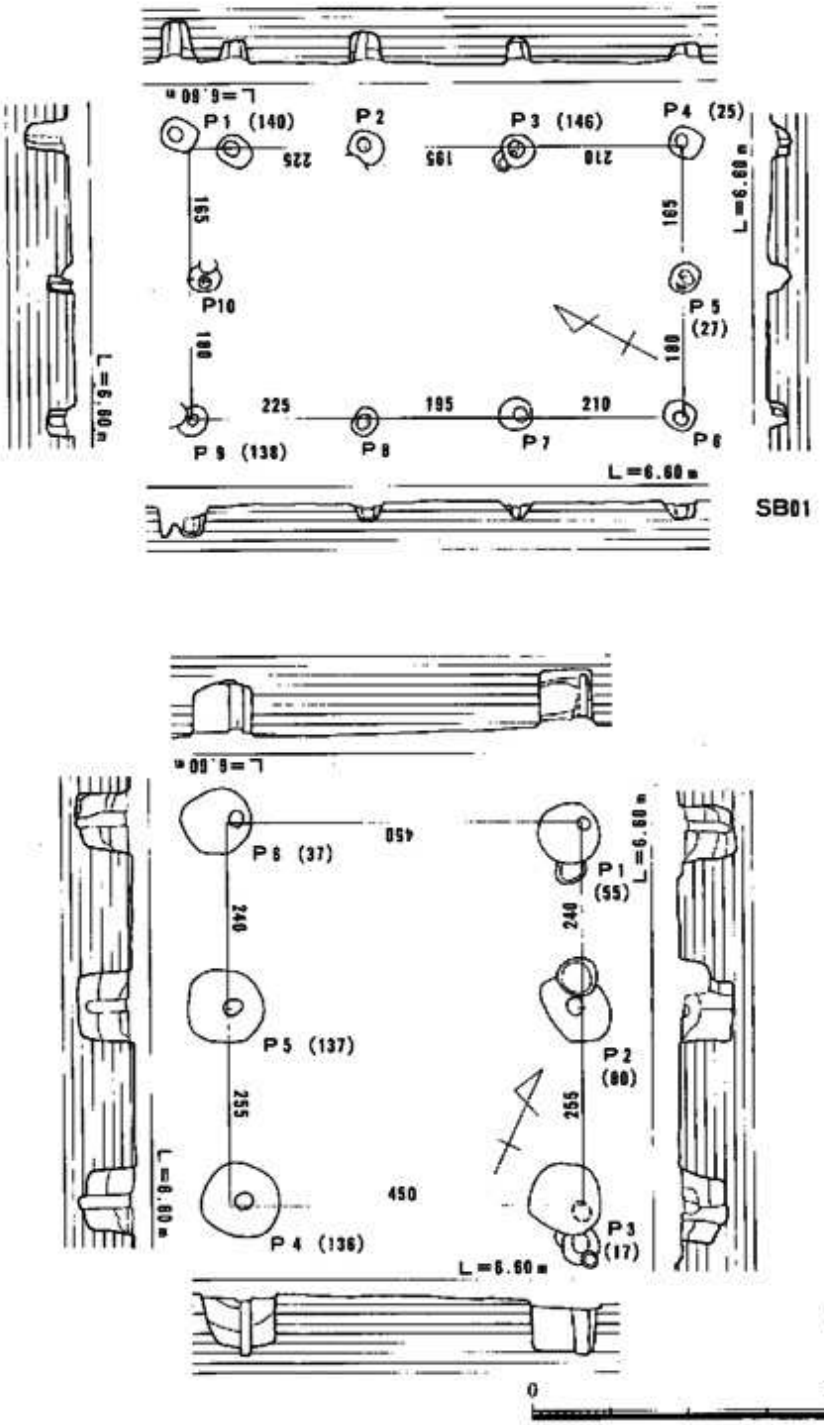


Fig. 20　SB01・02 (1/100)　※(　)内数字は遺物取上げピット番号

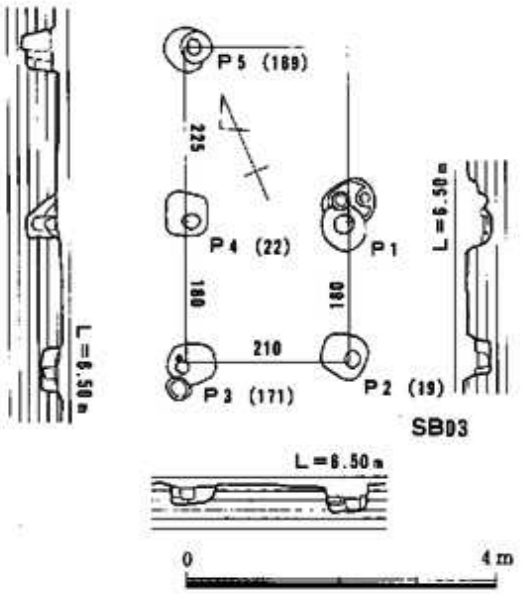


Fig. 21　SB03とSB01出土遺物 (1/100・1/4)

掘立柱建物

SB01 (Fig.20、PL.10)

SC01東側で検出した主軸方位をN-28°-Wに取る2×3間の側柱建物。北東隅柱P1はSB05柱穴と重複する。規模は桁行全長6.30m、梁間全長3.45m、床面積21.74㎡を測る。柱穴掘方は隅丸方形又は円形で、直径は35～45cm、深さ20～50cmを測る。P1が極端に深いが、SB05の柱穴は一般的にSB01より深く、P1のそれに合う事からSB05のものかも知れない。柱径は柱痕跡から10cm前後である。掘方埋土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig.20)　土師器や須恵器片が数点ずつ出土している。

96は須恵器甕口縁部1/4片。復元口径23.9cmを測る。口縁部が大きく外反して開く器型で、外面には調整工具の痕跡が残る。調整は横ナデ、自然釉がかかる。色調は灰色、胎土に石英粒1㎜前後を多く含む。

SB02 (Fig.20、PL.10)

SC01東側で検出した主軸方位をN-24°-Wに取る1×2間の側柱建物。SC01とほぼ平行し、SB04と方向としてほぼ直交する。規模は、桁行全長4.95m、梁間全長4.50m、床面積22.28㎡を測る。梁間間隔が広く、本来床束などがあったかも知れない。柱穴掘方は楕円形で、直径は0.8～1m、深さは63～72cmを測り、大きく深い。柱径は痕跡から、12～18cm位と考えられ、掘方規模の割には小さい。柱穴掘方は地山ブロックを主体とし、黒褐色粘質土をブロック状に混えている。

出土遺物　各柱穴から弥生土器から土師器の細片が出土する。須恵器片も2点含む。

SB03 (Fig.21、PL.11)

SC03と重複し主軸方位をN－24°－Eに取る1×2間の建物である。北東隅柱はSC03と重なり

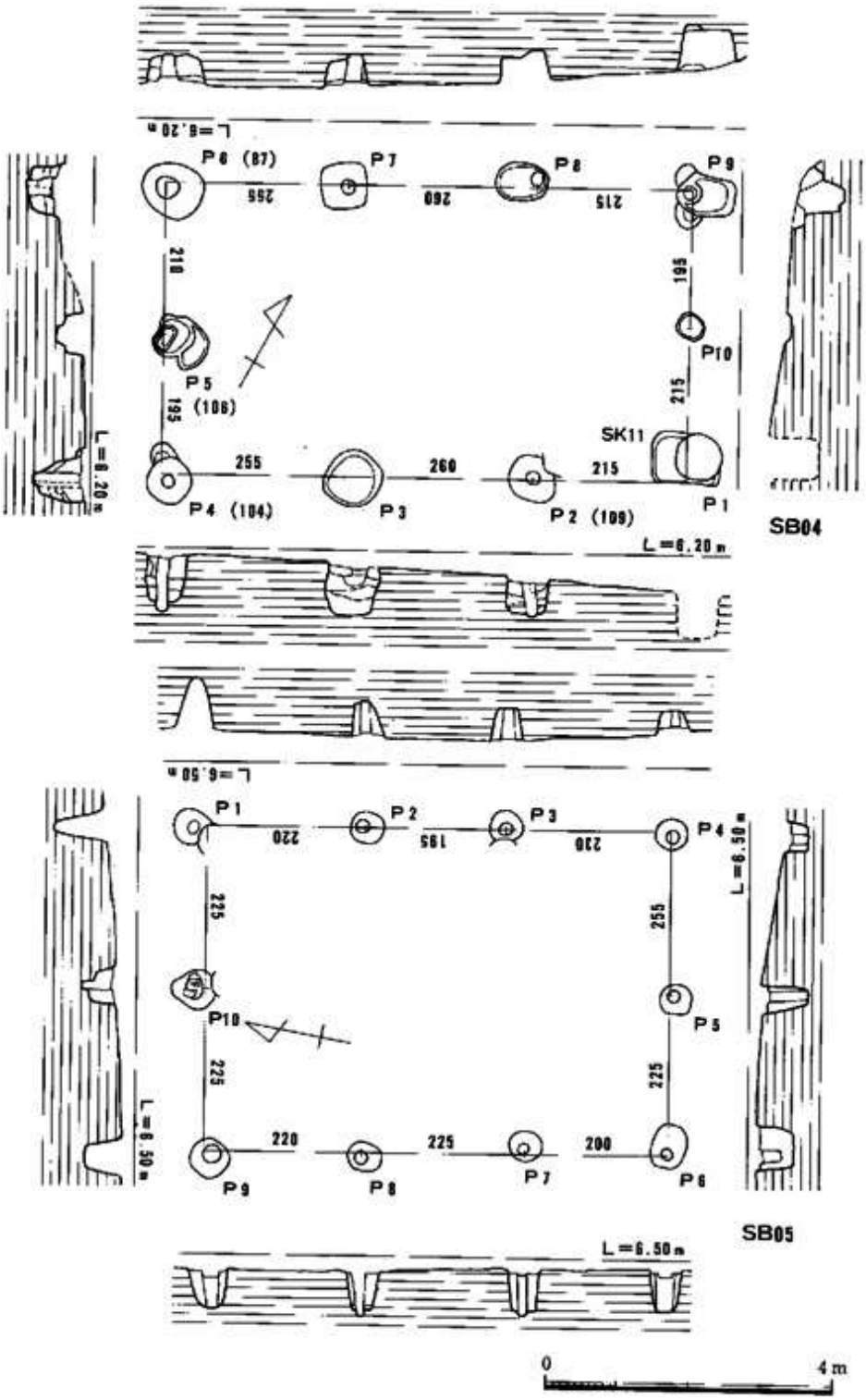


Fig. 22　SB04・05 (1/100)

確認出来なかった。建物規模は桁行全長4.05m、梁間全長2.1m、床面積8.51㎡を測る。柱穴掘方平面は不整円形又は隅丸方形を呈し、規模は直径0.52～0.62m、深さ25～42cmを測り柱径は柱痕跡から15～25cmを測る。埋土は黒褐色粘質土と黄褐色地山ローム土の混合である。

出土遺物　弥生土器や土師器の細片を小量ずつ含む。

SB04（Fig.22、PL.11）

調査区北側で検出したSC05を切る主軸方位をN－61°30′－Eに取る2×3間の側柱建物である。桁行全長7.35m、梁間全長4.05m、床面積29.77㎡を測る。柱穴掘方平面形は円形から楕円又は隅丸長方形を呈し、規模は直径0.38～0.85m、深さ50～75cmを測り、P10を除いて大きく深い。しかしP1とP9は他遺構と切り合う為、はっきりした形は確認できなかった。柱径は、痕跡から20cm前後を測る。埋土は黒色又は黒褐色粘質土に地山ローム土を混入する。

出土遺物　各柱穴から弥生土器や土師器・須恵器の細片が出土している。

SB05（Fig.22）

調査区西側で主軸方位をN－11°－Wに取る2×3間の側柱建物である。SC03・SB01を切る。規模は桁行全長6.45m、梁間全長4.5m、床面積29.03㎡を測る。柱穴掘方平面は円形又は楕円形で、規模は直径0.44～0.64m、深さ30～80cmを測り、全体的に深い。柱径は痕跡から12cm前後である。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、黄褐色ロームブロックを混入する。

出土遺物　各柱穴から弥生土器・土師器・須恵器の細片と瓦器椀片が1点出土。

土抗

全部で13基検出したが、SK06はSC06、SK12はSC07、SK13はSC01の屋内土抗である。

SK01（Fig.23、PL.14）

東西隅で検出した北半をSD03に切られ、主軸を南北に取る平面形が隅丸長方形を呈す土抗である。確認長は南北2m以上、北西1.77m、最大深30cmを測る。残りは余り良くなく、底面は南側が一段テラス状に高くなる。埋土は2層に分かれる。埋土は暗褐色土や地山ローム土、褐色土を主体としている。弥生時代前期に見られる方形の竪穴と同様の物と考える。

出土遺物　弥生土器と思われる細片が小量と赤焼きの叩き痕のある須恵器細片が1点出土。

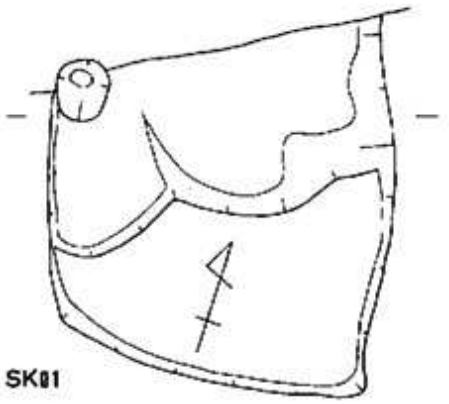
SK02（Fig.23、PL.14）

調査区南西隅で検出した主軸を南北に取る長方形を呈すと思われる土抗。南半を段落ちで消失する。確認規模は南北0.95m以上、東西1.15m、深さ15cmを測る。底面はほぼ平坦で、径17×12cm、深さ5cm程の浅い小ピットが有る。埋土は黒色土に地山ロームブロックを小量含む土である。

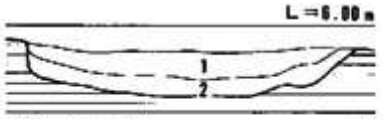
出土遺物　須恵器・土師器の細片が小量と、砥石片や混入と思われる磁器細片が1点出土。

SK03（Fig.23、PL.15）

SC01南側で検出した主軸を南西に北東に取る長方形の土抗。規模は長さ0.86m、幅0.53m、



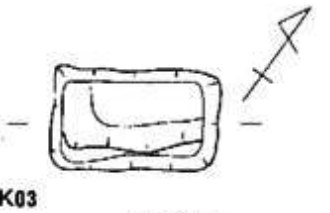
SK01



SK01土層名称

1．暗褐色土に黄褐色ローム・ブロック混入(炭化物も若干含む)。
2．黄褐色ローム・ブロックに褐色土少量混入。

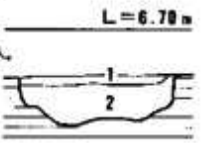
SK02

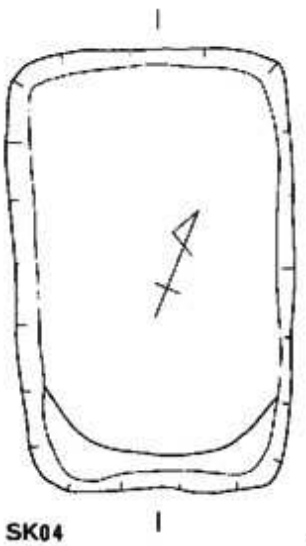


SK03

SK03土層名称

1．暗褐色粘質土に黒褐色粘質土ブロック混入。
2．黄褐色ローム・ブロックに褐色土少量混入。



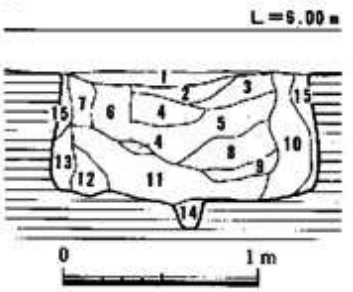


SK04

SK04土層名称

1．褐色土(やや粘性がある)に黄褐色ローム・ブロック混入。
2．暗褐色土に黄褐色ローム粒子多量混入。
3．1に黒色土混入。
4．褐色粘質土と黄褐色ローム・ブロックの混合に黒色土ブロック混入。
5．暗褐色粘質土に黄褐色地山粒子混入。
6．5に更に黄褐色ローム・ブロック・炭化物混入。
7．黒褐色粘質土に黄褐色ローム・ブロック少量混入。
8．1とほぼ同じ(柱穴)。

SK05



SK05土層名称

1．黒褐色粘質土で黄褐色ローム粒子・小ブロック混入。
2．褐色粘質土でローム粒子を多量混入。
3．暗褐色粘質土。
4．3にローム粒子を混入(3より暗い)。
5．3に黒褐色土ブロック・黄褐色地山ブロック少量混入。
6．黒色粘質土でローム粒子を少量混入。
7．3に黒褐色土ブロック混入。
8．黒褐色粘質土と黒色粘質土ブロックの混入。
9．5とほぼ同じ(ロームブロックはやや大きい)。
10．3で黄褐色地山ブロック・黒褐色粘質土ブロック混入(ややしまらない)。
11．黒色粘質土に暗褐色粘質土混入。
12．黒色粘質土と暗褐色粘質土の混合。
13．暗褐色粘質土に黒色土混入(軟らかく、しまっていない)。
14．黒色粘質土に黄褐色ローム・ブロック混入。
15．焼けた黄褐色地山ブロック(地山の崩れたもの)。

Fig. 23　SK01～05 (1/40)

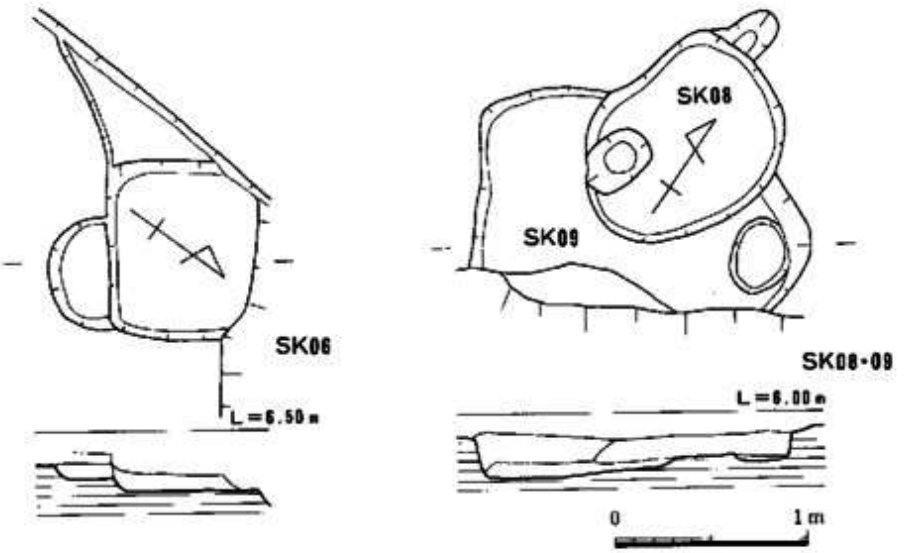


Fig. 24　SK06・08・09 (1/40)

深さ25cmを測る。底面は北側が一段深くなる。埋土は暗褐色粘質土と黒褐色粘質土の混合土で、下の方は炭化物・土器片を混入する。本来は住居に伴ったものかも知れない。

出土遺物　弥生土器から土師器、須恵器の坏身の細片などが小量出土している。

SK04 (Fig.23、PL.15)

調査区中央で検出した主軸をN－22°－Wに取る若干羽子板状を呈す土坑。規模は長さ2.28m、幅1.47m、深さ27cmを測る。中央部分がなだらかに深くなる。埋土は暗褐色粘質土と黄褐色ロームブロックを主体とし、余り締まらない。炭化物をわずかに含む。SK01と同様弥生前期の竪穴土坑と考えるが、時期不明の細片が大半で、時期が特定出来ない。

出土遺物　弥生土器片が大半であるが土師器や須恵器と思われる細片もある。

SK05 (Fig.23、PL.16)

調査区中央で検出した主軸を東西に取る土坑。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は上面で長さ1.33m、幅0.9m、最大深さ68cmを測る。上面は後世のピットが切り、又底面には直径23×17cm、深さ27cmの楕円形状のピットがある。断面はやや袋状を呈すが、断面ではかなり壁が崩れているようである。埋土は暗褐色や黒色粘質土、地山ロームブロックの混合土を主体とする。

出土遺物　まったくなかったが、形態的に見て貯蔵穴又は落し穴であろうか。

SK06 (Fig.23)

北半を段落ちで削平される平面形が方形を呈する土坑。規模は南北0.78m、最大幅0.93m、最大深さ13cmを測る。埋土は暗褐色土で、比較的新しい時期の埋土である。

出土遺物　弥生土器の細片が1点出土している。

SK08（Fig.24、PL.16）

調整区北側で検出したSK09を切る土坑。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ1.13m、幅0.86m、最大深さ12cmを測る。遺存状況は悪い。埋土は黒色土。SC09の中央土坑の可能性がある。遺物の出土はなかった。

SK09（Fig.24、PL.16）

SK10と一体の土坑と考える。確認最大幅1.83m、現存長１m以上、最大深さ18cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で少量地山ロームブロックを含んでいる。

出土遺物　弥生土器の細片が少量出土している。

SK11（Fig.16）

SC05内南壁ほぼ中央で検出した長方形状の土坑。規模は長さ0.95m、長さ0.7m、深さ75cmを測る。壁はほぼ直立する。埋土は上層は黒褐色粘質土と褐色ロームの混合、下層は褐色ロームに黒褐色粘質土を少量混入する。SB04の隅柱にあたるのか、SC05の中央土坑にあたる可能性が強い。

出土遺物（Fig.18）　弥生土器や土師器の細片が少量出土しているが、混入と思われる須恵器・白磁の細片も１点出土している。

95は土師器の鉢1/4片。復元口径17.5cmを測る。底が深い丸底で、口縁はやや内傾する。器壁は磨滅するが斜めナデ。外面色調は橙色、胎土は精良。95は平基の黒曜石石鏃、鏃身2.4cm。

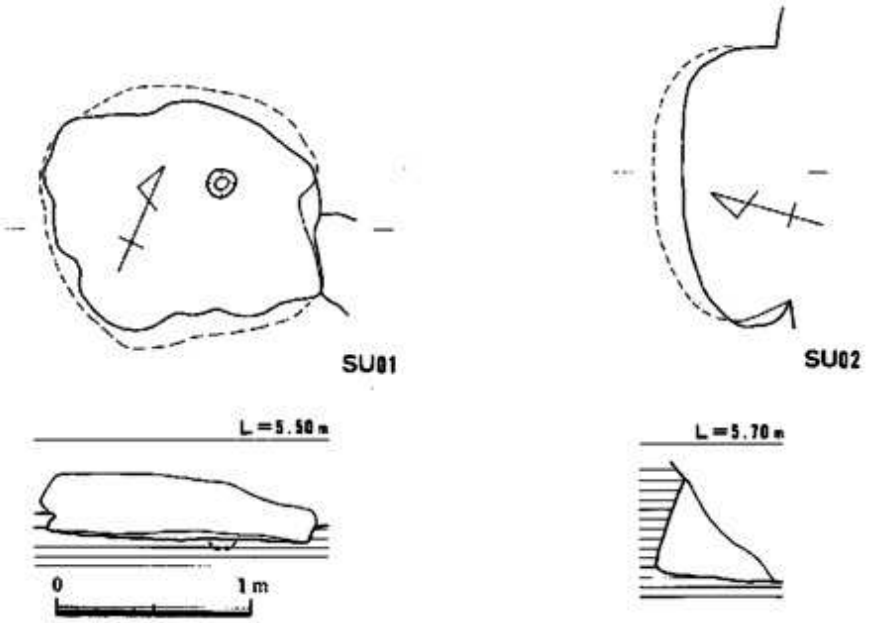
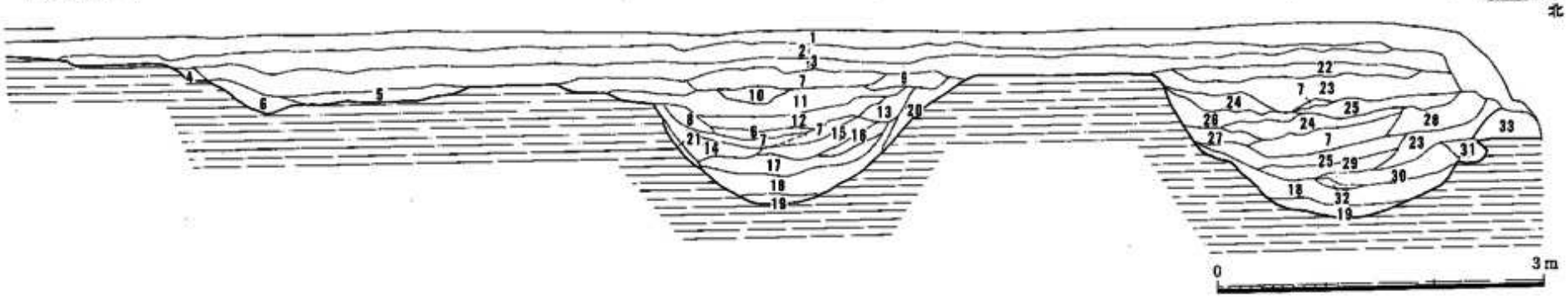
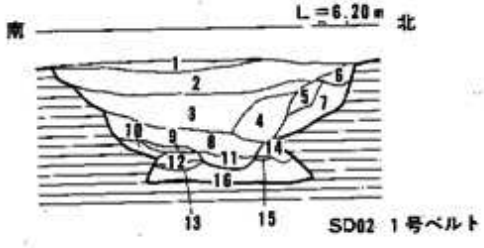
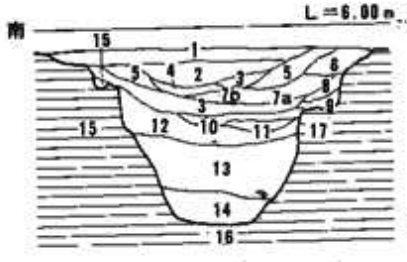


Fig. 25　SU01・02（1/40）







SD02 第1ベルト土層

1.褐色土に明黄褐色ロームブロック・暗褐色粘質土混入。
2.褐色土砂粒・小礫を少量混入。
3.暗褐色土・粘性が強い。
4.暗褐色土。3より暗い。
5.褐色土で粒子が細かく、黄褐色砂質ローム少量混入。
6.5よりやや暗い。
7.黄褐色砂質ロームブロックに褐色土混入。
8.暗褐色粘質土、マンガン粒子をわずかに混入。
9.8に黒褐色粘質土を混入。
10.9に更に黄橙色地山ローム土を混入。
11.9と同じ
12.16に明黄褐色ロームブロック混入。
13.明褐色ロームブロックに黒褐色粘質土少量混入。 } SU01
14.黒褐色粘質土に橙色ロームブロック少量混入。

SD02 第2ベルト土層

1.にぶい黄褐色土に木炭・黄褐色砂質ロームブロック混入。
2.暗褐色土に黄褐色砂質ブロック混入。(より多い)。
3.褐色粘質土。
4.3に黄褐色ロームブロック・黒褐色粘質土少量混入。
5.オリーブ褐色土。黄褐色ロームブロックを少し含む。
6.5より暗くロームブロックを混入せず。
7a.暗褐色土。黄褐色ロームブロック少量混入。
7b.7aより黒色土・ロームブロックを少し多く混入。
8.7aでより明るく粘性が少ない。
9.褐色土。黄褐色地山ローム大ブロック混入。
10.明褐色砂質土。粘性が強い。
11.9で軟質で粘性が強い。
12.褐色土。粘性が強い。
13.やや暗い褐色粘質土。軟質で粘性が強い。
14.13に黒色マンガン粒混入。底は灰味を帯びた粘土(八女粘土混入)。
15.やや暗い褐色粘質土。
16.褐色～灰黄褐色砂質ローム。
17.灰色八女粘土。
18.褐色砂質ロームブロックの汚山部分。

西壁土層名称

1.褐色土に明褐色ロームブロック混入。
2.褐色土。
3.灰黄褐色土。
4.暗褐色土に橙色ロームブロック少量混入。
5.黒褐色　明褐色ロームブロックを混入。 } SD01
6.暗灰黄色シルト(マンガン沈殿)。
7.褐色土。　7'クロームブロック混入多くなる。
8.暗褐色に黄褐色ローム少量混入。
9.暗灰黄色土(シルト質)。
10.7に黄褐色ローム粒子、ブロックと黒褐色土ブロック少量混入。
11.8に黄褐色ロームブロック多量混入。
12.暗褐色土に黄褐色ローム大ブロック少量混入。
13.暗褐色土に黄褐色大ブロックを少量混入。
14.7よりやや暗い褐色土。
15.暗褐色土柔らかい
16.14とほぼ同じ
17.にぶい黄褐色。粘性かべ低くない。6をわずかに混入する。
18.暗灰黄粘質シルト。砂質でやや柔らかい。
19.暗灰黄色粘土。
20.黄褐色ロームブロックに褐色土混入。
21.にぶい黄褐色粘質砂質土。
22.灰黄褐色土に黄褐色ロームブロック少量混入。
23.灰黄褐色土。
24.にぶい黄褐色に黄褐色.ロームブロックやや多く混入。
25.にぶい黄褐色土。
26.暗灰黄色土に黄褐色ロームを混入。24より混入割合は少ない。
27.24ににぶい黄橙色ロームブロック混入。
28.黄褐色土に明黄褐色ロームブロック少量混入。
29.暗褐色土。
30.オリーブ褐色土。やや粘性が強い。
31.暗褐色土。
32.褐色土。
33.橙色ロームブロック。

S D02
SD03

Fig. 28　SD01～03土層図 (1/60)

貯蔵穴

SU01（Fig.25、PL.17）

SD02溝底で検出した本来袋状を呈すと思われるもの。規模は上面で1.36×1.17m、下面で1.41×1.30m、残存壁高は最大で30cmを測る。平面形は略円形を呈す。底面はほぼ平坦で、中央やや北寄りに直径15cm位、深さ5cmの小ピットがある。埋土は黒褐色粘質土に地山ロームブロックを少量混入する土で、マンガン粒子が多量に沈着する。

出土遺物　弥生土器の細片が11点余り出土しているが、図示しうるものはない。

SU02（Fig.25、PL.17）

SU01と同じく、SD02溝底で検出した。大半はSD02で破壊されているが、北半のみかろうじて残る。残存規模は底面で径1.4m、残存壁高は最大で50cmを測る。底面は中央部がやや深くなる。壁はSU01と同様袋状を呈す。埋土はSU01とほぼ同じ、同様の貯蔵穴は北側の第35次調査区でも確認されている。

出土遺物　弥生土器の細片が8点出土した。

溝状遺構

20近番号を付したが、その内SD06～18迄は埋土も暗灰褐色土と新しく、区画整理以前の畑の畝跡と考えられる。

SD01（Fig.26、PL.12）

調査区北側段落ち際で検出したものである。溝というよりは段落ち部に堆積したものである。幅約2.4mに亘って底面は段落ち沿いに10cm程深くなり、更に段落ち際は浅く溝状に深くなる。埋土はオリーブ褐色土であり、区画整理前の農道と思われる。SD08～18はSD01に関連するものであろう。

出土遺物（Fig.27、PL.21）　弥生土器から近世・近代迄の遺物を含む。弥生土器・土師器・須恵器・陶器・青磁・白磁・鉄製品・ガラス小玉などがあるが、量はそれ程多くない。

97は青磁Ⅲ底部片で、復元高台径4.2cmを測る。内底は蛇の目状に釉を掻き取る。外底部は露胎、その他は淡草色の釉がかかり、細かい氷裂が入る。98は李朝の青磁の椀底部片で、復元底径5.0cmを測る。淡青緑色の釉を厚めに施釉する。底部は削り出す。99は陶製の徳利又は瓶の底部片で、復元底径9.8cmを測る。外底はやや上げ底で、内面に水引痕が残る。内外面あめ色の釉が施釉されるが、外底部はかき取りしている。高取系であろうか。

SD02（Fig.26、PL.12・13）

調査区北側で検出した南西から北東に延びる溝で、確認規模は21m、幅は2～2.5m、深さ1.15～1.4mを測る。溝は八女粘土迄掘り切っており、湧水が少量見られた。溝底のレベルは西から東へ低くなる。溝断面形はU字形又は逆台形を呈す。埋土は暗褐色土や黄褐色地山ローム土を主体とし、レンズ状に堆積するが、下方ほど粘性が強くなり、軟質で灰味を帯び、グライ化す

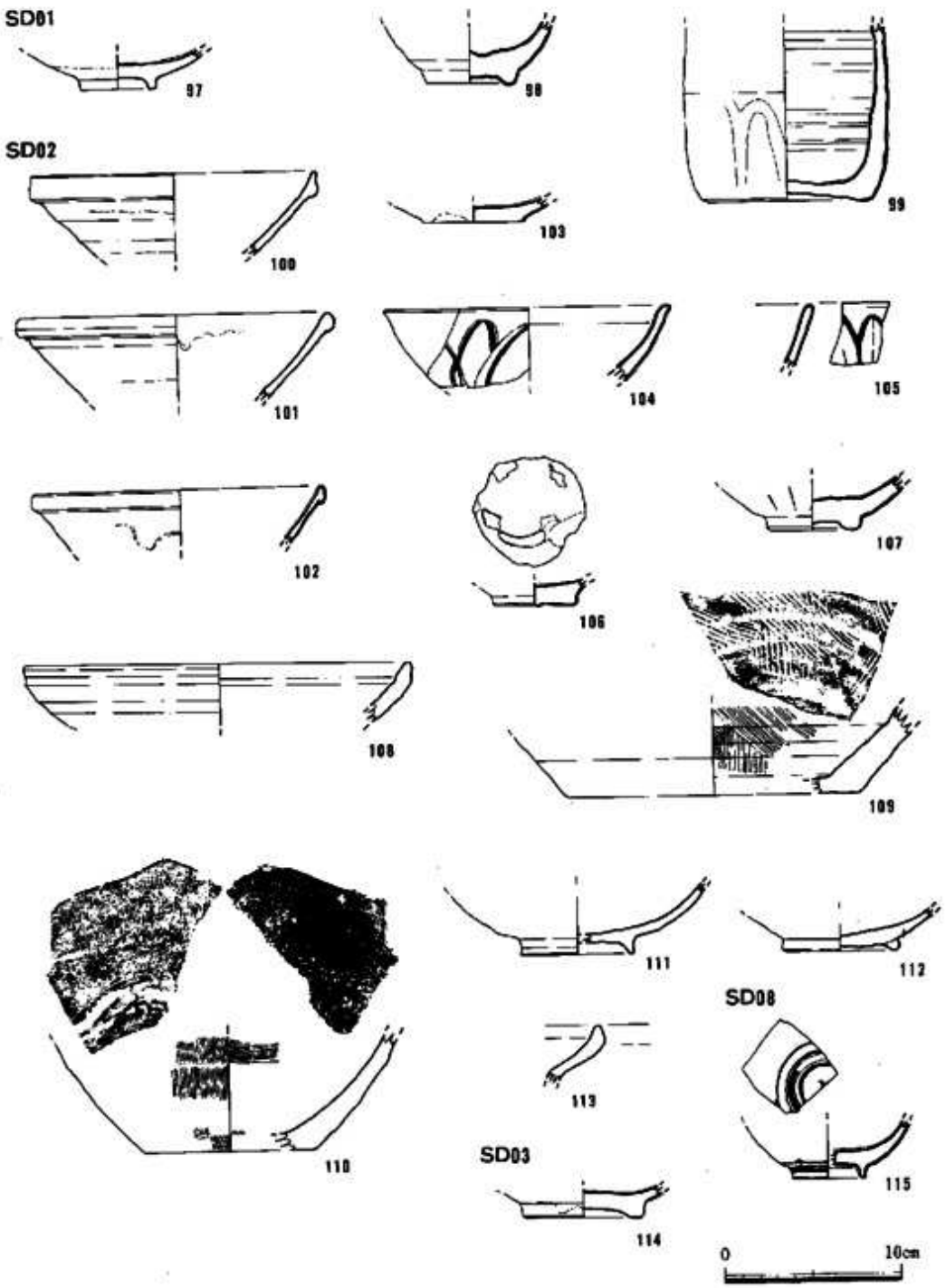


Fig. 27　各溝出土遺物1 (1/4)

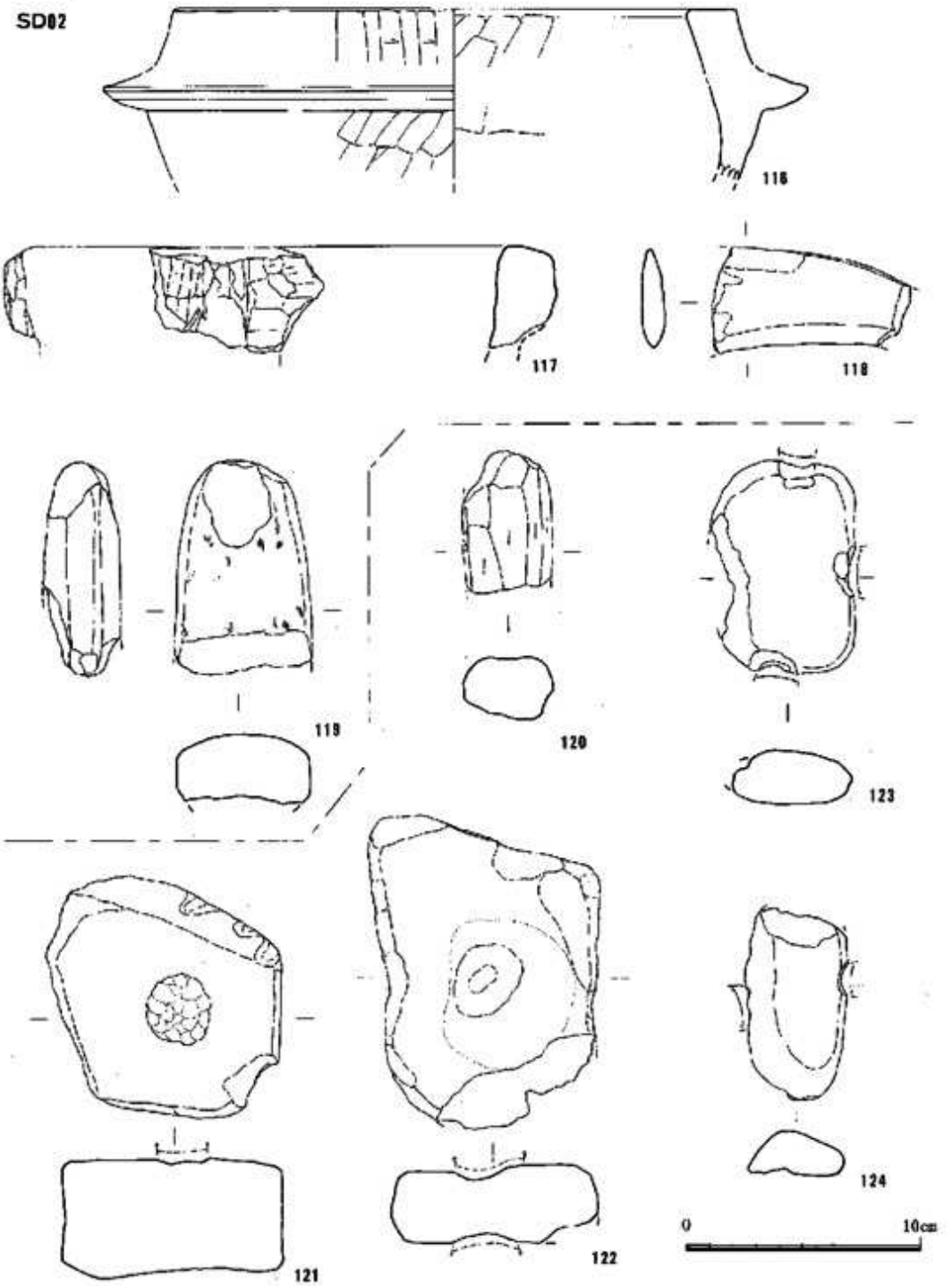


Fig. 28　各溝出土遺物２ (1/3)

る。埋土中礫は見られたが、まとまった礫群はなかった。

出土遺物 (Fig.27・28、PL.21・22)　遺物は土層状況から上・中・下3層に大別して取り上げた。弥生土器・古墳時代の土師器・須恵器・中世の土師器・土師質土器・陶器・瓦器・瓦質土器・白磁・青磁などが出土しているが実測図化出来るものはそれ程多くない。

100～103は白磁。100～102はいずれも椀で、玉縁の口縁部を持つもの。口径は100が復元で16.2cm、101が18.2cm、102が16.6cmを測る。いずれも小片で口径の復元はやや難がある。100は器表に細かい氷裂が入る。101は焼きがややあまく、102は釉の発色が悪い。色調はいずれも灰白色又は白色を呈す。103は平底の皿2/3片で、復元底径5.8cmを測る。淡青白色の釉がかかるが底部は削りで露胎。器表に細かい氷裂が入るが、釉の発色は悪い。104・105は青磁の鏑蓮弁椀である。104は1/8片で、復元口径16.2cmを測る。厚手の雑な蓮弁である。内外淡青色の釉が厚目にかかる。南方産であろうか。105は口縁部細片で復元しえない。106は李朝の青磁椀底部片で、高台径4.7cmを測る。目痕が4ヶ所あり、内外面施釉される。107は鏑蓮弁椀底部で、底径5.4cmを測る。高台畳付から外底は露胎であるが、部分的に釉がかかる。108は無釉陶器の盤1/10片。細片で口径はやや不正確。口縁部内面に軽い段が2段付く。色調は灰色を呈し、胎土は精良。109は陶器の擂鉢底部片で復元底径16.6cmを測る。内面には12条の条線が巡り、水引きの段が明瞭に入る。外底部は砂粒が付着する。色調は灰色を呈する。110は瓦質土器のこね鉢1/10片。内外面細かい刷毛目が入る。色調は明灰色を呈す。111・112は瓦器椀。111は底部1/2片で、復元高台径6.4cmを測る。112は底部1/2片で、復元高台径6.7cmを測る。器壁はいずれも磨滅するが、外面色調は111が淡灰色、112が灰黒色を呈し、112は胎土に石英微粒子を多く含む。113は瓦質の足鍋口縁部細片。色調は淡桃色を呈す。

116・117は滑石製石鍋の口縁部片。いずれも小片で、口径はさだかでない。116のノミ幅は1.5cm前後を測る。117はノミで削った後、丁寧な研磨を加える。118は石鏃片。現存長10.5cm、厚さ1.0cmを測る。磨製の内湾刃である。石質は粘板岩で、やや風化する。119は石斧の基部片。刃部は蛤刃を呈すと思われる。残存長9.1cmを測る。石質は滑石片岩である。

100・103・110・111・116・118は上層、112・104～106・108・109・112・113・117・119は中層、107は下層出土である。

SD03 (Fig.26、PL.12・13)

調査区北西隅で検出したSD02と並走する溝。確認規模は長さ7m、幅2.2m以上、深さ1.3mを測る。溝底の深さはSD02より20cm程低くなる。SD02との間隔は2.6～3.0mを測り、東に向かって幅がやや広くなるが、溝レベルは西に向かって少し低くなる。溝断面形はU字形を呈す。埋土はSD02と同様に褐色土又は暗褐色土・黄褐色地山ローム土を主体とするが、底層は粘性の強い砂質シルト及び粘土になる。溝は灰白色の八女粘土層迄掘り切っており、やや湧水があった。

出土遺物 (Fig.27・28、PL.21・22)　上中下の3層に分けて遺物を取り上げた。弥生土器や

1．第125次調査

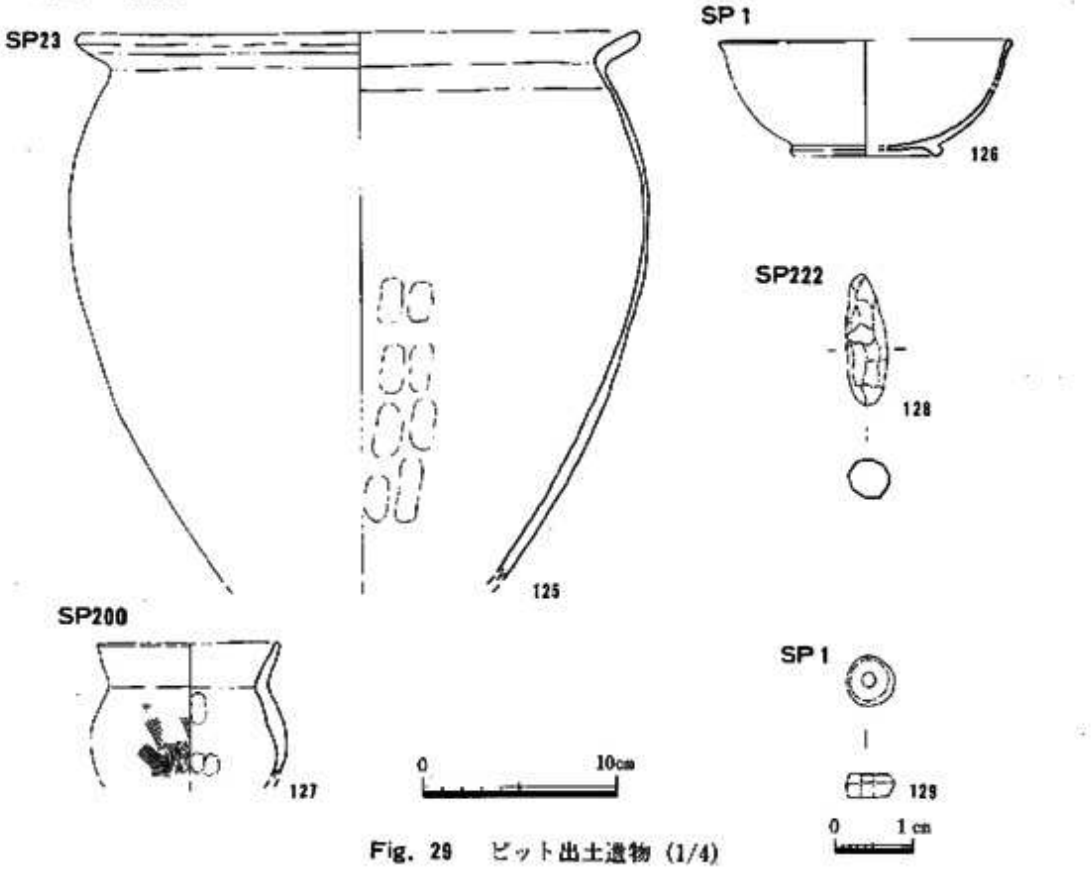


Fig. 29　ピット出土遺物（1/4）

土師器・須恵器・瓦器・染付・白磁・瓦・石鍋・鉄滓・黒曜石剥片などがあるが量は少ない。

114は白磁椀底部1/3片で復元高台径7.0cmを測る。玉縁口縁を持つ椀の底部片。高台は露胎で削りを加え、畳付は又擦っている。わずかに緑がかった透明釉がかかる。120は砥石片。中粒の目の砂岩を用いている。各面を砥面として使用する。残存長6.1cm、最大幅3.9cmを測る。黄灰色を呈す。121・122は凹石である。121は砂岩製で、表面は平坦であるが中央は使用により窪む。周辺は擦り及び敲打調整を行う。長さ10.5cm、幅10cm、厚さ5.1cmを測る。122は滑石片岩を用い、平坦な表裏両面の中央に窪みがある。窪みのまわりには使用による敲打痕が残る。現存長13.5cm、最大幅9.8cmを測る。123・124はいずれも扁平な楕円形状の玄武岩の転石を用いた打ち欠石錘である。123は各周縁中央に1ヶ所ずつ紐をかけるための欠き込みをしている。長さ9.2cm最存幅6.1cm、重さ192gを測る。124は上端を欠損するが、左右側辺中央に欠き込みがある。残存長7.3cm、最大幅4.4cm、重さ94gを測る。

120は上層、121・122は下・中層、123は下層出土である。

SD04・05（Fig.13）

南西隅で検出した南東から北西に延びる溝で、確認長7m、幅1.2m前後、深さ10～20cmを測り浅いが、東側が一段深くなる。埋土は暗褐色粘質土又は、褐色粘質土である。SD05は暗褐色

粘質土で、SD04を切るものであるが、上層を見る限り明確な溝とはいえず、堆積状況の違いであるかも知れない。小溝SD08～13とほぼ並行しており、農道又は畑の区画のようなものかも知れない。

出土遺物　弥生土器・土師器・須恵器・青磁・白磁・染付・剥片・鉄滓などが出土しているが、量はそれ程でない。

SD08～18（Fig.27）

弥生時代から近代・近世迄の各種遺物・黒曜石剥片・鉄製品・鉄滓などを含む。

115は染付椀1/3片で、復元高台径4.2cmを測る。施釉で内外面呉須で文様がかかれる。くらわんか手の肥前磁器であろうか。

SD19

北東隅で検出した溝と思われる断落ちである。立上り部のみで、完全に溝とは確認出来なかった。遺物の出土はなかった。

SD20

調査区西境界地で検出した円弧状に巡る幅10～15cm、深さ8cmの浅い小溝で、埋土は黒褐色粘質土である。円形住居址の周壁溝の可能性がある。遺物の出土はなかった。

ピット及びその他の遺構遺物

SX02

南西境界隅で検出したSD04・05に切られSC07を切る、平面が不定形状を呈して浅く窪む土坑状の遺構。確認規模は長径5m、短径で3m以上を測る。床面の深さは10～20cmで凹凸が激しい。埋土は暗褐色粘質土を主体とするが、下層は黄褐色地山ロームブロックが多くなる。

出土遺物　弥生時代から中世迄の遺物を含む。弥生土器や土師器・白磁・青磁の細片や黒曜石剥片が少量ずつ出土しているが、図示しうるものはない。

ピット出土遺物（Fig.29、PL.22）

ピットは北東側を中心に多数検出している。埋土としては大別すると黒褐色・黒色土系と暗褐色・褐色土系の2種類になる。一般的に前者は大きくかつ深く、後者は小さく浅かった。

125はP23出土の弥生土器の甕1/4片。破片2点より合成。復元口径28.8cmを測る。口縁部はく字状を呈し、胴部上半の器壁は薄い。器壁の調整は磨滅がひどく不明だが、胴内面は指おさえ痕が残る。外面色調は淡褐灰黄色を呈し、胎土に石英粒を多量に含む。126はSP1出土のうち黒土器1/6片。復元口径15.0cm、復元底径7.8cmを測る。破片2点より復元。内面はヘラナデか磨くが、外面は磨滅する。色調は内面が黒色、外面は褐色を呈し、胎土は精良、金雲母細片を含む。127はSP200出土の小形丸底壺1/4片。復元口径9.2cmを測る。器壁は磨滅が著しいが、外面は刷毛、内面は指おさえ痕が残る。外面色調は桃色を呈し、胎土は石英粒を若干含む。128はSP222出土の土錘状の土製品。全長5cm、直径1.5cmを測る。断面は円形で、全面指おさえ仕上げで

ある。色調は黒灰色を呈すが、良く焼けしまっている。胎土は精良で、質量感がある。129はSP1出土の滑石製臼玉。直径6.2㎜、厚さ3㎜、孔径1.5㎜。丁寧な研磨で断面算盤形を呈す。

3）小結

当調査区で検出された遺構の時期は大きく4時期、Ⅰ期、弥生時代、Ⅱ期、古墳時代、Ⅲ期、中世、Ⅳ期、近世に分かれる。

Ⅰ期の弥生時代については住居址SC09、土坑SK01・04、貯蔵穴SU01・02が相当する。ただいずれも遺物の出土がほとんどなく、時期を特定しかねるが、周辺の第16次・35次・36次・64次・86次調査区などで板付Ⅱ式段階の貯蔵穴や土坑などが検出されている事から、ほぼその時期に該当するものと考える。

Ⅱ期は古墳時代前期から中期迄の時期で、住居址C01～08などである。SC01以外時期を決定する遺物に欠けるが、形態や主軸方向の在り方から考えると、SC03は両側にベッド状遺構を持つ2本主柱のもので古墳時代前期の布留式併行期のもの。SC01は方形に近くなり4本主柱のものであるから5世紀代となる。その他の住居SC02・04・05～07については、SC02は主軸方向がSC01にほぼ同じであるから。それに近い時期、SC06・07はSC01に切られる。いずれも南壁中央に出入口と思われる屋内土坑を持つが、それを挟んで、周壁を全周するベッド状遺構を持つ形態から布留式併行土器の新段階の住居と考える。SC08は削平されてはいるがSC06とほぼ並行しており、SC06と同時期、同形態のものと考える。SC04は方形の住居であるが、明確な主柱を持たない。周壁沿いに小ピットを巡らす形態である。南壁中央の屋内土坑と考えられる方形土坑から、土師器の鉢が出土しており、古墳時代と考える。掘立柱建物についてはSB02・05はSC01とほぼ同一方向を取り、またSB02の東側桁柱列とSB04の梁行柱列が一列に並ぶ事からSB02・04は同時期でSC01とも同時期と考える。SB03はSC03に切られ、古墳時代前期。SB01・05・はSC03を切り、掘方に格子目叩きを含む須恵器片の出土や、柱穴の形態・埋土の色から他の建物より新しくなる。SC01については再度考察を加えるが、火災にあった家屋であり、大量の建物がほぼ原位置を保って出土した。それらは先学達の福岡地域の古式土師器の編年に照らせば、那珂川町の今光遺跡の編年ですればⅤ期、福岡大学の竹末氏の早良平野の編年による有山Ⅱ期、糸島平野の御床松原の編年による[注1]Ⅴ期であり、時期的にはおおよそ5世紀前半が考えられる[注2]。遺物8・80は当初陶質土器とも考え[注3]たが、胎土は余り精良でなく陶邑産の須恵器の可能性が強い。

Ⅲ期は中世の時期である。調査区周辺では[注4]第35次・64次・86次調査区等で12世紀から16世紀にかけての溝状遺構が検出されている。今回検出された溝SD02・03は基本的には前述の各区で検出されている遺構とほぼ同一方向上にあるもので、SD02中層出土の李朝青磁101や明代の青磁105・107などから埋没時期が16世紀と考える。

Ⅳ期は近世以降、SD01やSD04～18で、区画整理以前の農道や畑の区割り・畝跡であろう。近世小田部村の景観復元の為の貴重な資料である。

次に以下2点について若干考察を加える。①、SC01・07・08の検討、②、有田遺跡群における弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居址の平面形態の変遷について述べる。

①について（Fig.6参照のこと）

SC01はSC06・07を切り、長辺7.46m、短辺6.57mを測るやや長方形を呈す竪穴住居址である。この住居址の主柱は4本柱でありP1－P4が相当する。各柱穴間の距離はP1－P2が3.90m、P2－P3が4.65m、P3－P4が4.15m、P4－P1が4.50mを測り、いずれも壁から1.3m程離れた所にある。南壁中央には出入口と思われる方形土坑SK13がある。また炉と考える焼土面は住居址のほぼ中央にあった。床面は黄褐色地山ロームブロックで厚目に貼床されており、それを撤去し、ロームの地山面迄掘り下げると床面下のピット群を検出した。そして、前述の4本柱の内側にP5－P8の4本柱を検出した。前述の4本主柱に比べて柱筋はかなりゆがむ。柱穴掘方は長径で30～40cm、深さ60cm前後を測り、底面に一段テラスを持つ事が特長である。各柱穴間距離はP5－P6が2.60m、P6－P7が2.25m、P7－P8が2.60m、P8－P9が2.40m、を測り、P6－P7間が狭い。床面からかなり貼床されている事や、南壁と東壁に見られた開化切溝が重複している状況などから、SC01は1回は建て替えがなされた考える。又SP203で62が、SP228で66が完形で出土しているが、いずれも住居址に伴うものである。SP203は上面で、SP228は地山面で検出した。SP228は出産・葬送などの生活習俗に伴うものであろうか。またSP203のものは中に落ち込んだ状況を示しており、貯蔵穴のようなものかも知れない。

SC06については主柱はSC01に切られる為現地では確認出来なかった。しかしSC01床面南側で検出した小ピットのP9・P10を、住居址の壁からと土坑の位置的関係から見て主柱穴と考える。P9・P10間距離は3.50mを測る。いずれもSC01の地山床面から5～10cmと浅く直径も20～30cmと小さいが、柱痕跡の部分のみが残ったものであろう。SC07の主柱も2本柱と考える。1本についてはSP8（P11）、もう1本についてはSC01内のP12を考えるが、P12の深さがP11に比べ30cm程も深く、SC06の片方の柱穴はSC01に切られ消滅している可能性もある。一応P11・P12とするが、両柱穴間距離は3.50mを測る。

②について（Fig.30）

弥生時代の竪穴住居址は、前期初め夜臼・板付Ⅰ式共伴期では台地中央に径300×200mの楕円形状の環濠が検出されているのみで、それに伴う竪穴住居址はまだ確認されていない。しかし、後半の板付Ⅱ式期になると、台地の各地点で分散して検出される。検出されている竪穴住居址は少ないが、代表的なものとして第100次調査区の第3号住居がある。これは円形住居址でいわゆる松菊里型住居といわれるものである。この形態は中期前半頃の第48次調査区の8号住居、第138次調査区のSC01、第152次調査区のSC06などまで確実に存在し、当遺跡群内では円形住居

址としては一般的な形態となる。この形態の下限は、中期後半以降の円形住居址の良好な検出例がないので不明確であるが、第３次調査区で中期後半から後期初めの円形住居址が８棟確認されているが、その中に中央部にピットを持ち、その長軸上に小ピットを２個配列するものがあるので、その頃迄存続するのかも知れない。方形の竪穴式住居については第48次調査区で小形の方形住居址が５棟検出されている。報告では遺物は少ないものの、中期前半の円形住居址に切られている事や、形態が野黒坂遺跡での前期の方形住居址と類似する事から前期の住居址としている。中期では後半代に第145次調査区で１例隅丸長方形のものが検出されている。有田遺跡群では円形住居址は後期初め第51次調査区１号住居址で終わるが、それ以降遺跡の規模が縮小するせいか後期の住居址の検出例は今の所ない。しかし終末から古墳時代初頭にかけて再び集落が拡大し始め、竪穴住居址の検出例が多くなる。この時期から住居形態は長方形で２本主柱、床面にベッド状遺構を持ち、壁中央に出入口部を持つ形態が基本となる。終末から初頭にかけての代表的なものとして、第149次調査区のSC05や第64次調査区の第18号住居などがある。古墳時代前期の布留式併行期の古段階は前代と住居形態は余り変わらない。ベッド状遺構の形態はバラエティーに富むが、やや時代が下がり、中段階になると、ベッド状遺構が出入口の土坑を挟んで全周する形態が一般的となる。第114次調査区のSC01などがある。中期の５世紀代になると平面形態は方形の４本主柱でベッド状遺構を持たない形態に変化する。この形態が後期の竈付きの方形竪穴住居址へと続いて行く。北部九州では竈付き住居は５世紀前半代に出現するが、当遺跡群ではまだ見つかっていない。５世紀前半代（布留式併行新段階）としては第125次調査区のSC01・第152次地点のSC05などがあり、５世紀の中頃としては第111次調査区の１号住居址がある。いずれも間仕り切溝がある。後期の６世紀代になると方形の４本主柱の竈付き竪穴住居址が一般的になる。この時期の住居は遺跡全域で見いだされる。竈付き住居の出現は現在のところ須恵器の小山氏編年によるIIb期（６世紀中頃）から確認されⅣ期（７世紀初め）迄継続する。規模も一辺が４～５m前後に画一化されてくるが、まれに第116次調査区のSC01のように一辺が６m近い大型のものもある。竈の形態は壁中央に粘土を貼り付けるものが主流であるが、中には第114次地点SC02のように、壁中央をコ字状に掘り込みその中に竈を造り出すもの、第52次調査区１号住居址のように隅に竈を造り出すもの、第31次調査区のSC01などのように竈本体を住居外に造り出すものなどもある。当遺跡群では７世紀以降竪穴住居址は検出されていない。奈良時代に方形の小型竪穴に竈を造り付けたもの（第88次調査区）は若干検出されるが、基本的には竪穴住居から平地式・高床式の建物・移動式の竈へと推移していったものと考える。

(注１)「今光遺跡・地余遺跡」東急不動産株式会社　1980
(注２)竹永純一「福岡県・早良平野の古式土師器」　古文化談叢第５集　1978
(注３)志摩町教育委員会「御床松原遺跡」志摩町文化財調査報告書第３集　1983
(注４)須恵器研究家の中村勝氏の御教示による

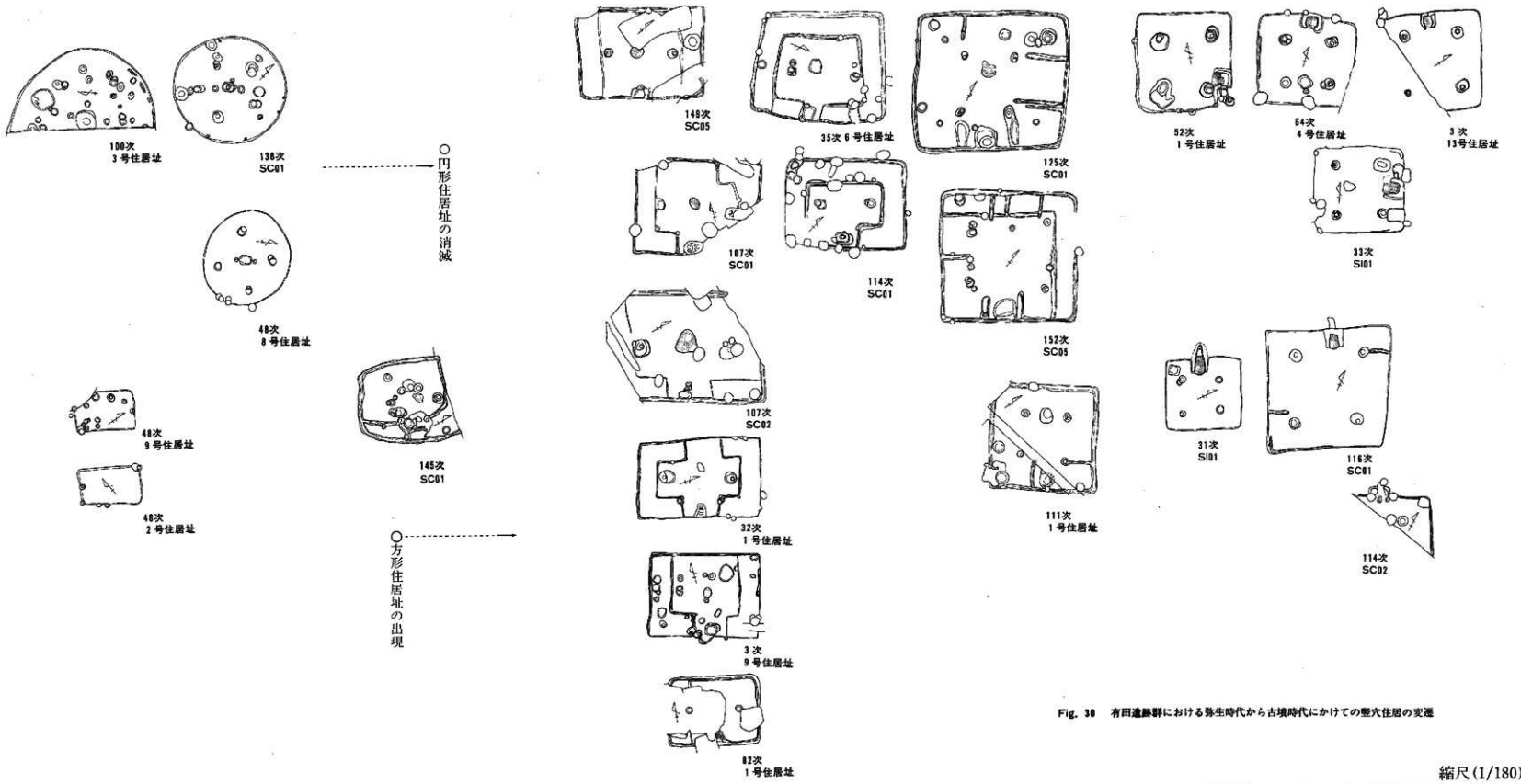


Fig. 38　有田遺跡群における弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居の変遷

縮尺(1/180)

2．第135次調査（調査番号8754）

1）　調査区の地形と概要

申請地は早良区小田部1丁目361に所在し、北に八手状に拡がる小田部台地の中央部台地の中央部に立地する。現地の標高は約8.5mを測り、調査前の現況は宅地であった。調査は個人専用住宅建設の為に行った。申請地一帯は余り調査が行われていない地域で、実体は余り判っていない。

発掘調査は昭和63年3月7日から3月24日迄行い、調査面積は申請面積293㎡中145㎡である。

調査区の遺構面は鳥栖ローム土で、表土下約15～30cmで検出した。削平を受けており遺物包含層はない。主な検出遺構は、溝1条・土坑1基・掘立柱建物4棟であり、削平のひどい東側は遺構は少ない。出土遺物は少なくコンテナ1箱であるが、弥生時代から奈良時代頃迄の土師器・須恵器の細片と鉄滓を含む。

2）　遺構と遺物

掘立柱建物

SB01（Fig.32、PL.23）

調査区西側で検出した主軸方向N－75°－Eに取る2×2間の側柱建物である。平面形はかなりゆがむ。規模は東西4.44～5.20m、南北4.44～4.64m、床面積は21.88㎡を測る。柱穴掘方は円形で、直径35～45cm、深さは15～43cmを測り、隅柱が比較的深い。柱径は痕跡から12～18cm位であろう。掘方埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物　弥生土器らしき細片を少量含む。

SB02（Fig.32、PL.23）

SB04に切られ、南壁調査区にかかる主軸方位をN－15°－Wに取る南北方向の1×2間の建物である。規模は南北5.70m、東西3.10mを測る。柱穴掘方は円形又は楕円形で、直径32～42cm、深さは15～20cmで、深さは比較的揃う。柱径は痕跡から12～15cm位である。埋土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物　弥生土器の細片を1点含む。

SB03（Fig.32、PL.24）

SB01を切り、主軸方位をN－74°－Eに取る1×1間の東西方向に長い建物である。規模は東西3.10m、南北1.95m、床面積6.05㎡を測る。柱穴掘方は円形で、直径は33～45cm、深さは25～40cmで、柱径は痕跡から12～15cmを測る。埋土は黒褐色又は灰褐色土を主体とする。

出土遺物　遺物の出土はなかった。

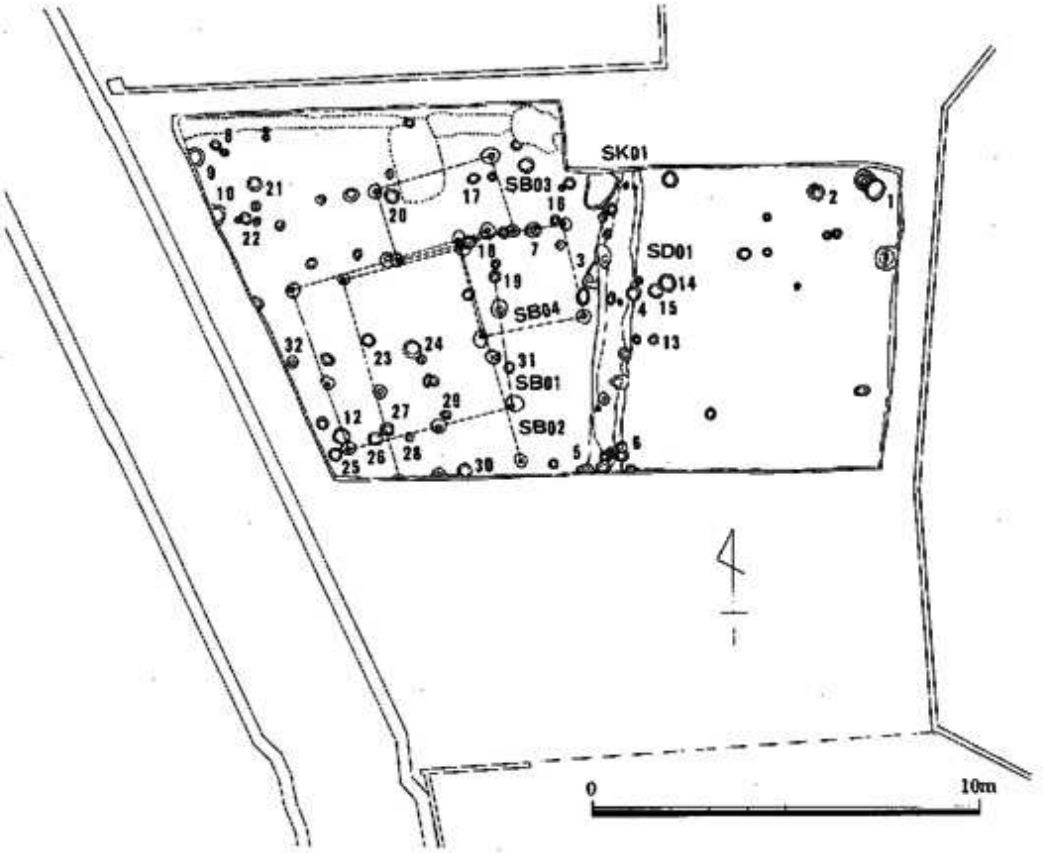


Fig. 31　第135次調査区遺構配置図（1/200）

SB04 (Fig.32、PL.24)

調査区中央で検出した主軸方位をN－81°－Eに取る東西方向にやや長い1×1間の建物である。規模は東西2.68～2.73m、南北2.44～2.55m、床面積6.75㎡を測る。柱穴掘方は円形又は楕円形で、規模は35～45cm、深さは17～25cmを測る。柱径は痕跡から15cm前後である。掘方埋土は黒褐色又は灰褐色土である。

出土遺物　遺物の出土はなかった。

土坑

SK01

調査区北壁中央で検出した、主軸を南北に取る、小土坑である。SD01と切り合う。平面形は長方形を呈し、規模は長さ1.06m以上、幅0.77m、深さ10cmを測る。埋土は暗褐色土で黄色ロームブロックを少量含む。

出土遺物　弥生土器や須恵器・鉄滓・玄武岩剥片を1～3個ずつ含む。

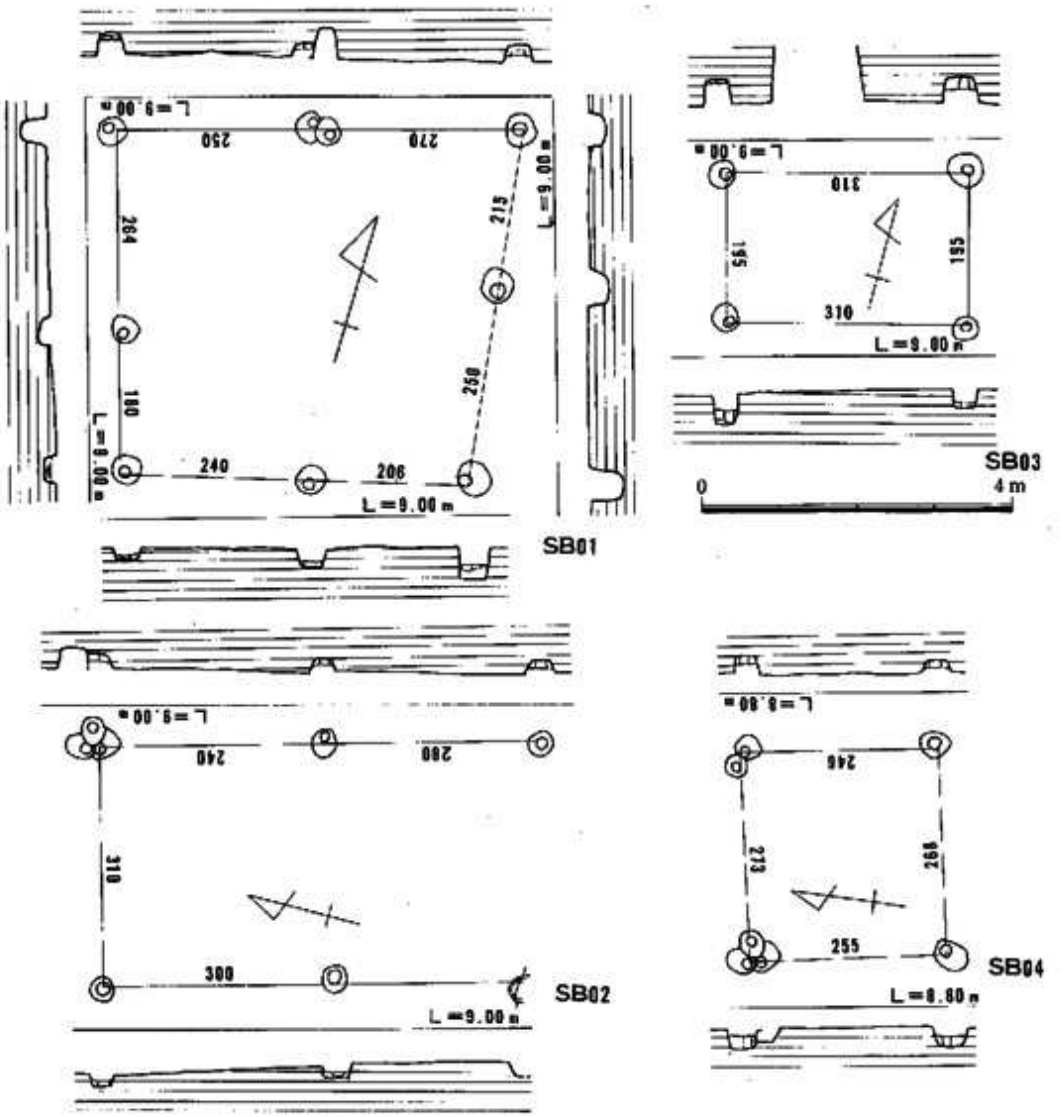


Fig. 32　SB01～04 (1/100)

溝

SD01 (PL.24)

調査区中央で南北方向に延びる溝である。

確認規模は長さ8m、幅0.75～1.05m、深さ20cmを測る。断面形は浅い逆台形を呈す。埋土は褐色土である。

出土遺物(Fig.33、PL.24)　出土量は少ないが、弥生土器・須恵器・土師器の細片や炭化物・鉄滓などである。

Fig. 33　各遺構出土遺物 (1/4)

1・2は須恵器の高台付杯底部片。1は1/4片で、高台端部を欠失する。外底は削りで、高台は貼り付け。色調は灰色を呈し、胎土に微砂粒を含む。焼成は良好。2も1/4片で、復元高台径9.2cmを測る。短い高台が付く。色調は淡灰色を呈し、胎土に粗砂粒を含む。焼成はやや甘い。3は土師器椀の1/4片で、高台が大きく開く器形。復元高台径6cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。色調は内面が淡黄橙色、外面は暗灰色を呈し、胎土は1～2mmの砂粒を含む。焼成は普通。

ピット・遺構面出土遺物 (Fig.33、PL.24)

ピット埋土は黒褐色・灰褐色・褐色・地山ローム土の4種類に大別出来る。遺物を含むピットは少ない。

4はSP10出土。須恵器の杯蓋1/5片。復元口径12.3cm、器高3.5cmを測る。天井部2/3はヘラ削りで、その他はナデ。ロクロ回転は時計回り。天井部にヘラ記号がある。色調は内外灰色、胎土は2～3mmの砂粒を多く含む。焼成は良好。III b期である。

5は遺構面出土。弥生土器の甕口縁1/8片。口径は復元で約21cmである。口縁部は逆L字形を呈し、中期後半のもの。器表は磨滅が著しく調整は不明。色調は赤橙色、胎土は1～2mmの砂粒を多く含む。焼成は普通。

3）　小結

以上調査の概要について述べたが、整理すると次のようになる。遺構の時期は溝SD01については、遺物は少ないものの出土須恵器から奈良時代頃のものと考える。掘立柱建物は4棟確認したが、切り合いはあるものの主軸方位などから見て近い時期のものであろう。掘方埋土が黒褐色土系である事から中世以前の可能性がある。主軸方位としては第79次・第26次・第138次調査区の建物に近い主軸方向の建物がある。第26次では奈良時代前後、第79次では古墳時代から中世以前、第138次では古墳時代後期以降であり、当地点の他遺構出土遺物と勘案して奈良時代前後と推定する。

3．第145次調査（調査番号8851）

1）　調査区の地形と概要

申請地は早良区小田部２丁目90に所在し、八手状に開析された有田台地の中央支丘と東支丘に挟まれた狭小な小支丘の中央部に位置する。標高は10.1mである。申請地周囲は昭和41年の区画整理で南以外の三方を大きく削り込まれており、比高１～2.5.m程の台状になっている。旧状は畑地である。

周辺では支丘基部付近で３ａ次・51次・154次調査が実施されており、それぞれ弥生時代貯蔵穴３・竪穴住居９・井戸２・古墳時代竪穴住居８・掘立柱建物９・平安時代土壙・溝、弥生時代竪穴住居２・古墳時代竪穴住居１・井戸１・掘立柱建物３、古墳時代竪穴住居１・土壙１・溝１・平安時代井戸１・掘立柱建物４・鎌倉時代木棺墓１を検出しており、弥生中期以降連綿と集落を形成している。

申請地も当初より遺跡の存在が予見され、昭和62年２月専用住宅建築のため本課に事前審査の申請がなされたのを契機に63年７月試掘調査を実施し、遺跡の存在が確認された。

本調査は平成元年１月19日～同年３月31日まで実施された。調査面積は682㎡である。表土下20－30cmで鳥栖ロームの基盤層に達し遺構検出面となる。遺構の残りは悪く竪穴住居址で深さ２～５cm程が残存する状況である。

検出された遺構は弥生時代竪穴住居址２・掘立柱建物１、弥生～古墳時代竪穴住居址２、古墳時代住居の可能性が考える建物３、平安時代土壙１、古墳～中世掘立柱建物３である。遺物は旧石器時代の剥片石器～近代陶磁まで、弥生土器を中心としてコンテナ１箱分である。

2）　遺構と遺物

住居址SC01（Fig.35、PL.26）

調査区北西隅で検出された隅丸方形の竪穴住居で北辺が削平されている。一度建替が実施されており、上下２面の床面が検出されている。

上面は東西4.07m南北4.75mで方位をＮ－25°－Ｅにとる。北辺が欠落しているため不明であるが他の三方に幅20cm深さ10cmの浅い壁溝を巡らし、東壁の中央にこれに接して160×120cm深さ50cmの屋内土壙を設けている。さらにこの土壙の西側と西・南壁の壁溝に接続して東西2.75m南北3.75mの方形に溝を巡らした小区画を設けている。この中央に130×95cmの範囲で焼土が広がっており、炉址と考えられる。主柱穴は明確でないが、この炉の周囲の数本が主柱と考えられる。柱痕跡は径22～26cm・深さ55～63cmを測る。下面は上面の床面下８cmの鳥栖ロームを基盤としており東西4.35m南北4.65mの、上面と同様の隅丸方形で東西が30cm程広く南北が若干

狭い。東・南壁に溝が巡り北東側に溝状の土壙が２基有る。東壁溝と上面東壁溝に囲まれた部分が10cm程高いベッド状になっている。東側中央部に屋内土壙が有り、上面の屋内土壙はこれをこのまま踏襲している。主柱穴は中央に円形に巡るものの数本が考えられる。

遺物は上面の覆土中を中心に散布しており、屋内土壙から砥石を(Fig.37・13・14)北側のピットの南側で高坏の坏部（Fig.36・10）が検出されている。

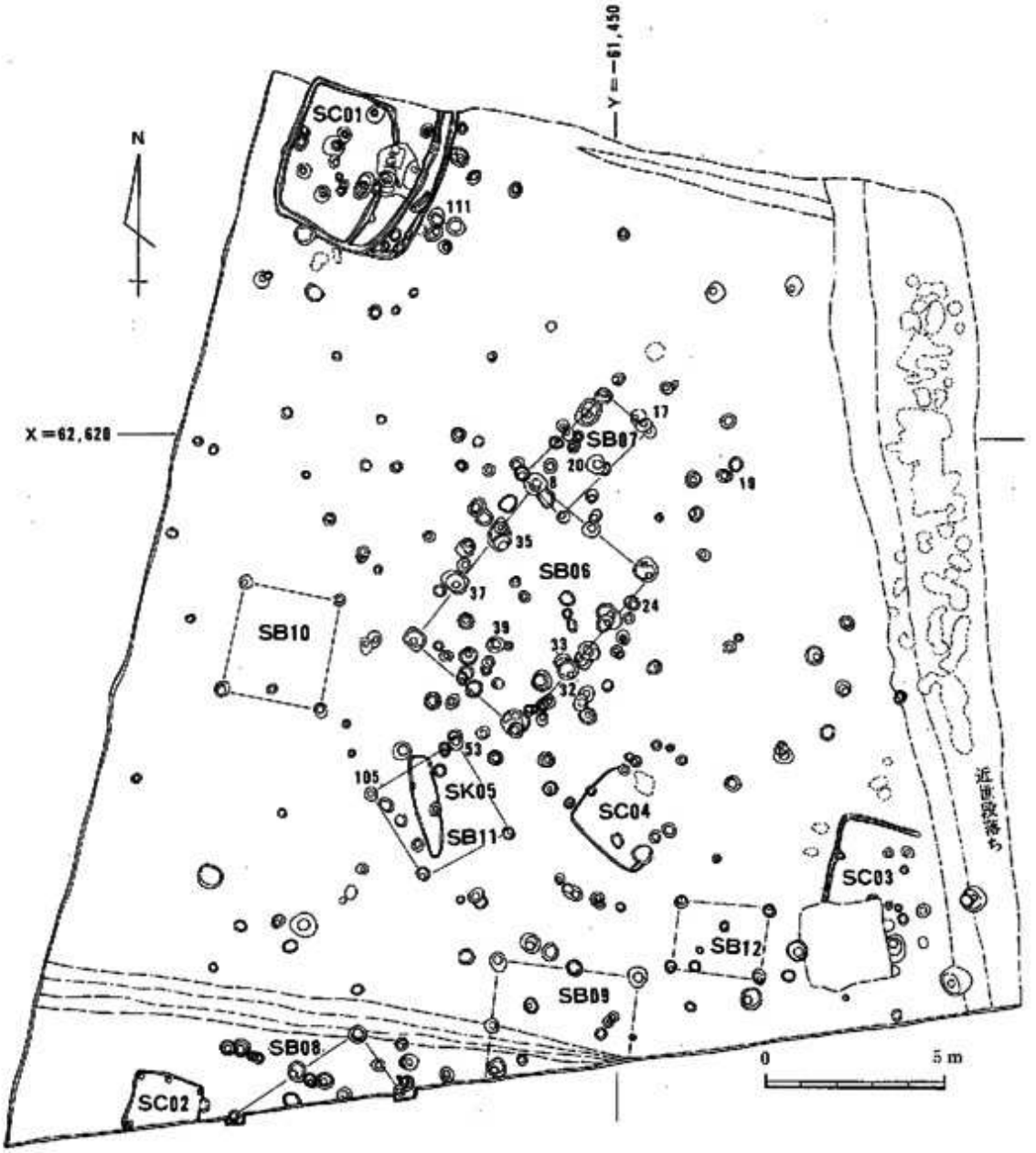


Fig. 34　第145次調査区遺構配置図（1/200）

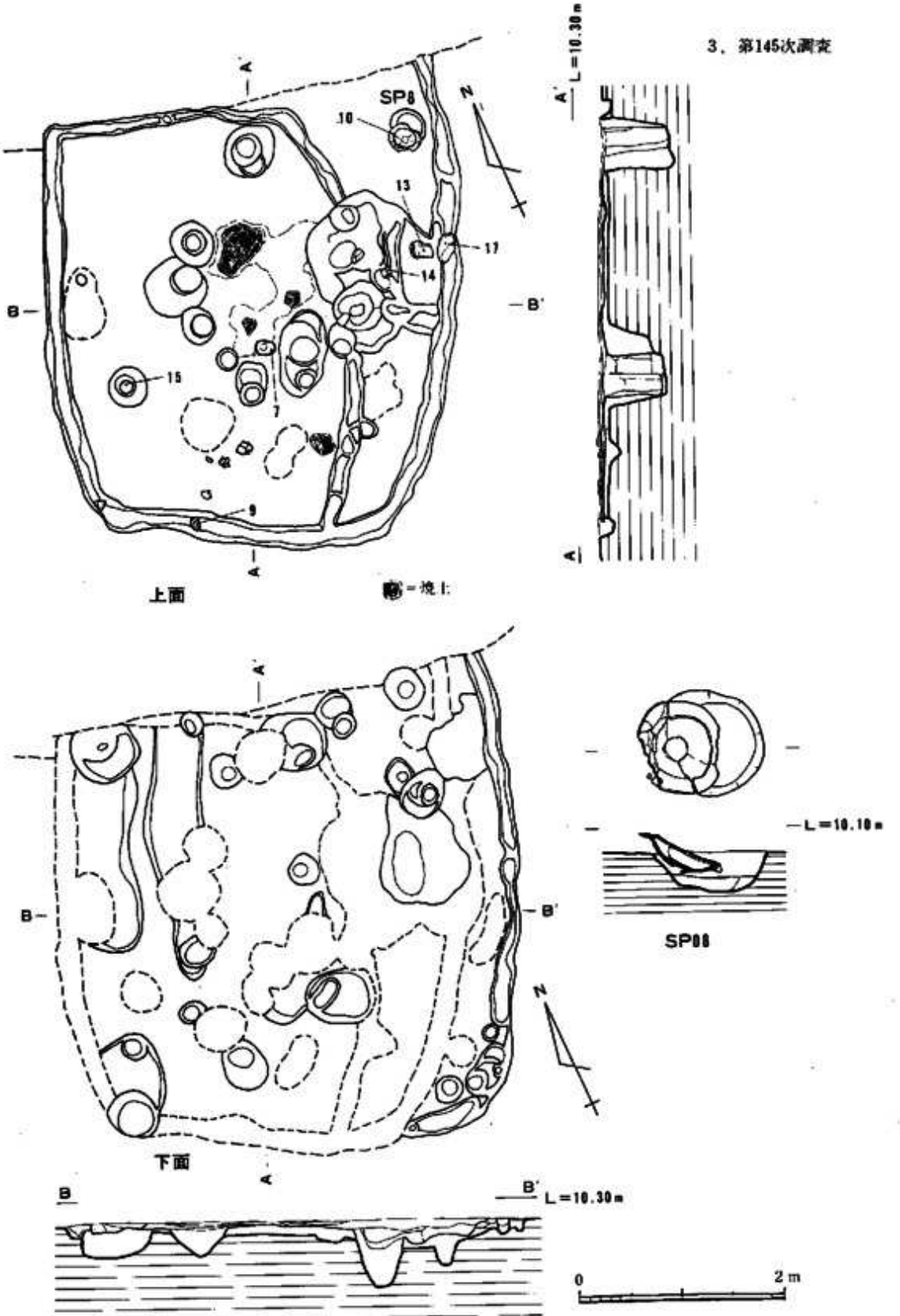


Fig. 35　SC01 (1/60・1/20)

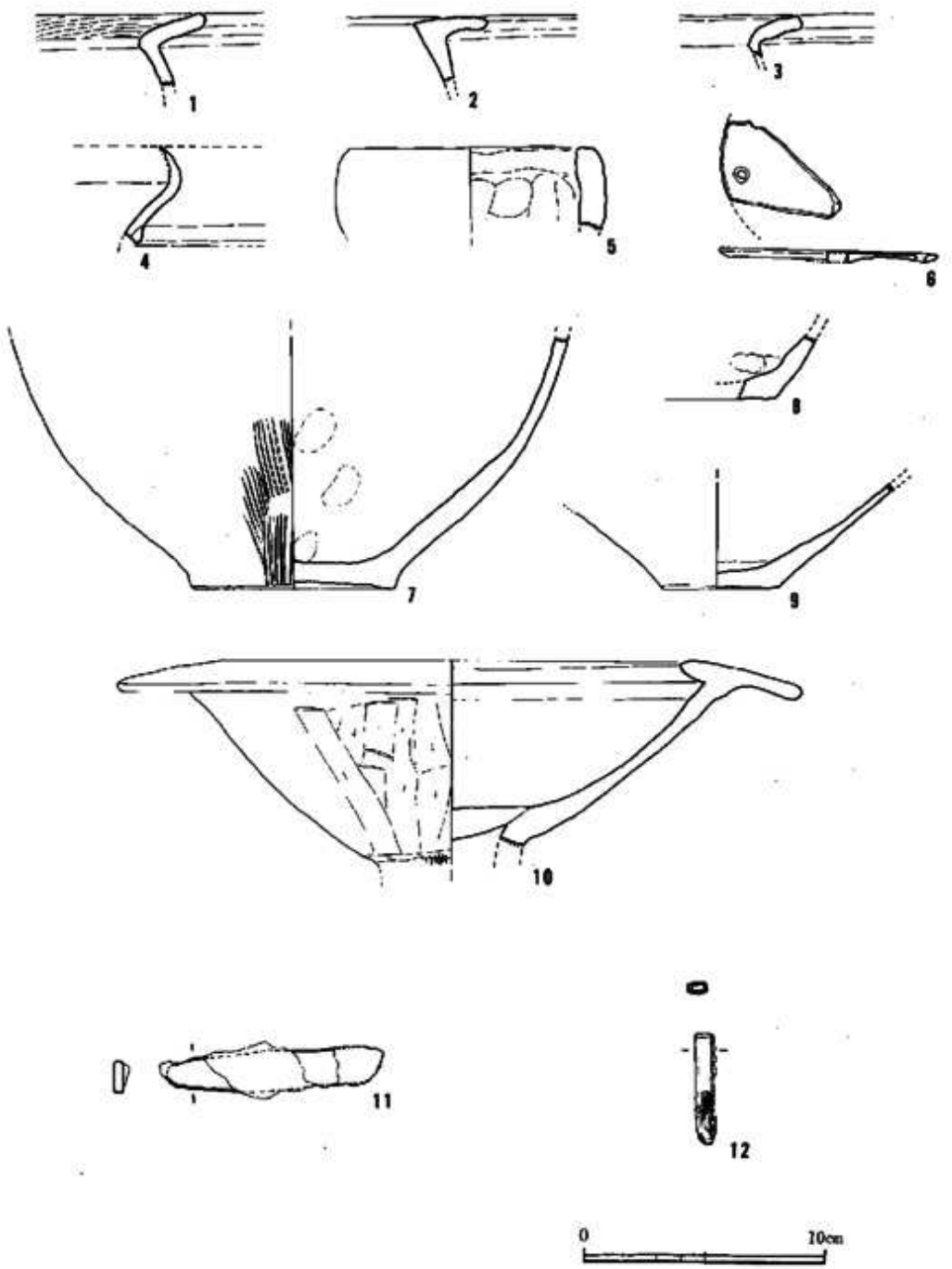


Fig. 36　SC01出土遺物1 (1/3・1/2)

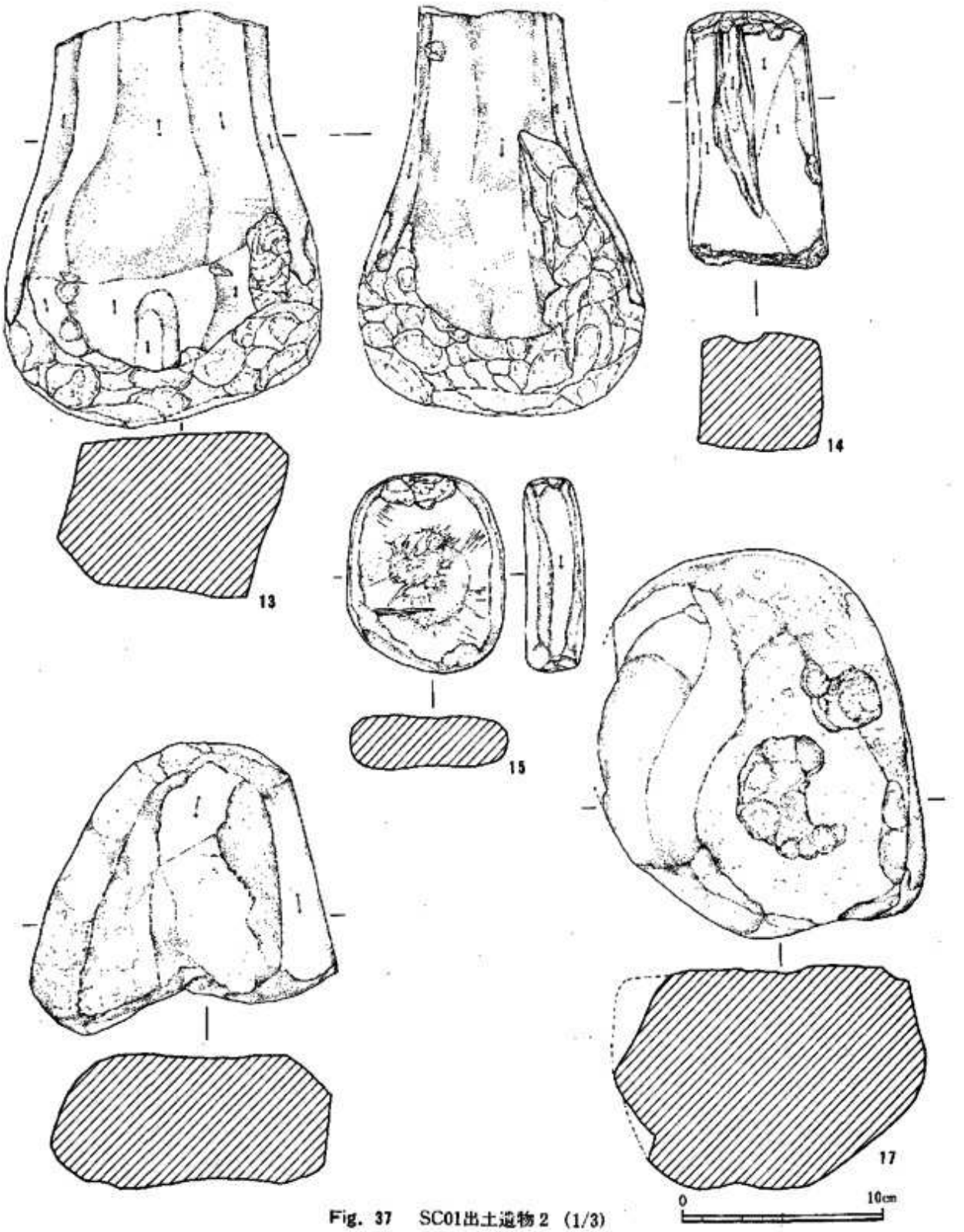


Fig. 37　SC01出土遺物2 (1/3)

出土遺物（Fig.36・37、PL.31）

出土した遺物は若干古墳時代の土師器が混じる（Fig.36－3・6）が他は弥生中期後半～後期初頭の遺物である。1は甕の口縁部小片で頸部内面がゆるい稜線になっている。口縁内面はナデられナナメハケ調整が若干残る。2も甕口縁部小片で内面が稜線化している。調整は不明。3は混入と思われ、古墳時代前期の土師器甕の口縁小片。口唇内側が凹線気味になり頸部下はケズリ調整である。4は袋状口縁壺の口縁小片で外径9～11cm程。口縁下に断面三角形の貼付突帯を施す。器面が剥離しているが丹塗りと思われる。土壙内出土。5は鉢の口縁部で器壁が厚く、内面に指圧痕が多く残る。6は土師器の蓋と思われ上面は平坦で焼成前の穿孔が有る。内面は花弁状のケズリが施される。径19cm。7は壺の下半部で底径8.6cm。外面に粗目のタテハケ調整、内面は指圧痕が若干残りケンマが施される。8は下面出土の甕底部で外面は調整不明、内面に指圧痕が残る。9は壺の底部で底径4.7cm。器壁は薄い。器面が剥落しているが丹塗りと思われる。10はピット内出土の高坏坏部で完形。口外径で28.5cm。鋤先口縁でかえりが大きい。外面に縦方向のケズリ様の板ナデ痕が有り粗いケンマがなされる。頸部下にタテハケが若干残る。11は壁溝出土の鉄器で木質が錆着しており木柄が着装された刀子の中茎部分と思われる。残存長6.2cm・幅2.5cm。12も同じく鉄器で鏃の中茎と思われる。残存長3.1cm・幅4.5×2㎜を測る。13は土壙内出土の砥石の半折品で黄灰色の砂岩製。先端部は叩打で乳棒状に仕上げており側面6面全てが縦方向に砥がれ、縦横ともに凹面状に著しく砥ぎ減りしている。先端部で幅19.2～21.4cm・中央部で9.6～14.4cmを測る。14も同じく土壙内出土の方柱状の小振りな砥石で全長17.6cm幅8.0cm。13より粒子の細かい砂岩製。上下両端を叩打でゆるい凸面状に仕上げる。側面4面全てを縦方向に砥いでおり三面が凸面に一面が凹面となっている。凸面の一面に溝状の砥ぎ減りが有り、内部に4条の条線が残る。15は叩石で玄武岩製。全長13.2厚み3.8cmの隅丸方形を呈しており全面が磨滅している。側面の上下両端に大きな、平坦両面の中央に細かな円形の叩打痕が残る。16は暗黄褐色を呈する粗粒の砂岩製の砥石の半折品である。断面が幅20.6厚み9.3cmの長方形に近い多面体でいずれも縦方向の砥ぎがなされ、殊に平坦両面の中央部は凹面状に砥ぎ減りしている。17も16と同種の砂岩製の砥石で長さ26.3幅20厚さ15.6cmの塊状のもので上の平坦面と長辺の側面を使用している。また上面は台石も兼ねていたと思われ、中央部に粗い叩打による窪みが観察される。

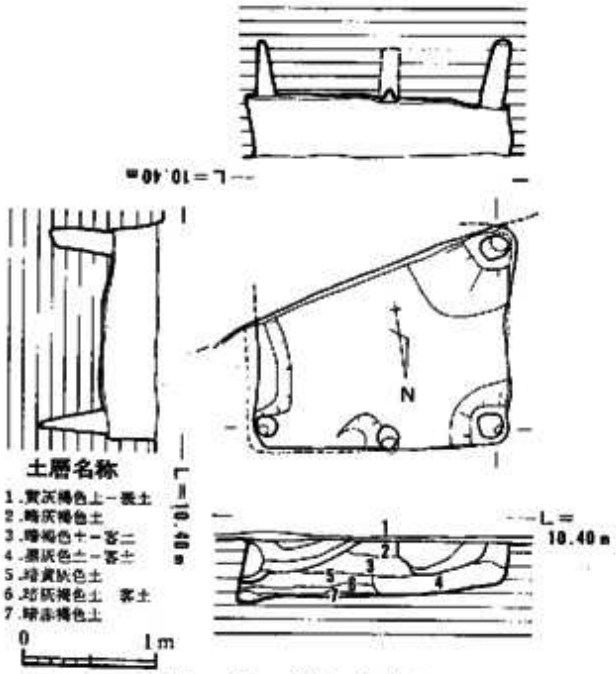


Fig. 38　SC02 (1/60)

SC02 (Fig.38、PL.27)

調査区南西側で検出された方形の竪穴住居址で南半部が調査区外で全容が明かでないが、東西1.7m南北の残存長で1.9m深さ45cmを測る小型のものである。方位をN－17°－Eにとる。土層は最下層に7cm程の厚みでローム混じりの暗灰褐色土で貼床がなされ、この上に10cm程の自然堆積層が観察される。さらにローム混じりの暗褐色土で埋土がなされ灰褐色土がレンズ状に自然堆積する。柱穴は壁に接して四隅とその中間に設けられ、径16～20cm深さ40～50cmと深い。先端が鋭がり住居中央から外方に放射状に広がる傾向が有り、杭の様に上方から打ち込まれた可能性がある。出土遺物は少量で図化不能であるが、前期末～中期初頭にかけての壺の小片を検出している。

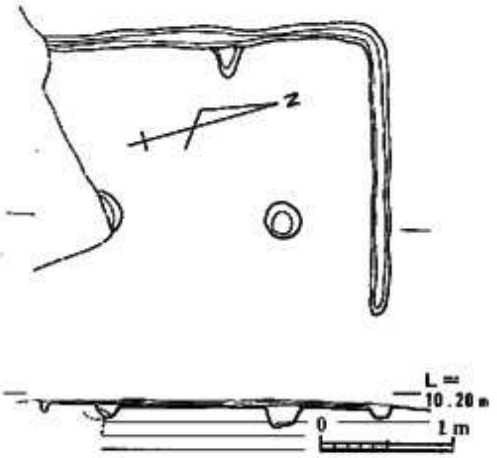


Fig. 39　SC03 (1/60)

SC03 (Fig.39、PL.27)

調査区南東部で検出された方形の竪穴住居址で、著しい削平と攪乱のため東部と南部を欠失する。方位はN－14°－Eにとる。東西2.26m南北の残存長で2.58mを測る。深さは4cm前後。西壁と北壁に沿って幅12cm深さ6cmの壁溝を巡らしている。東・南壁部は不明である。主柱穴が明確でないが中央付近の2穴の可能性が考えられる。径27～34深さ12～16cmで浅い。覆土は黒褐色土にロームを半量含む。出土遺物は図化不能な弥生土器片数片のみである。

SC04 (Fig.40、PL.27)

調査区中央よりやや南東側、SC01・02間に位置する。これも著しい削平を受けており北東南東側が明かでない。方形の竪穴住居址で方位はN－52°－Wにとる。残存長で2.4×1.98m深さ2cm程で南東壁の一部に壁溝らしきものが残る。主柱穴が判然としないが壁付近の4穴に可能性が考えられる。SC02同様浅く16～25cm径23～46cm程である。覆土は黒褐色土にロームを半量近く含むもので、遺物の検出はない。

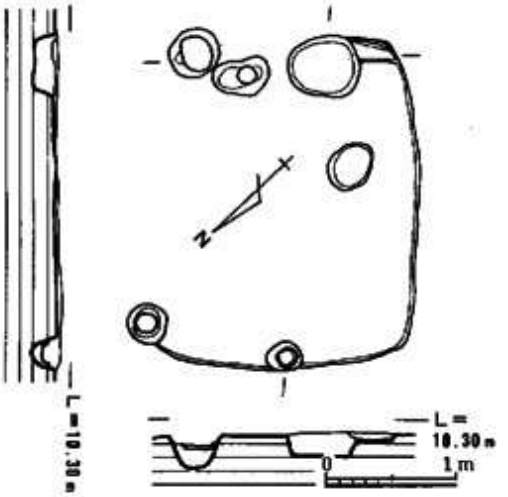


Fig. 40　SC04 (1/60)

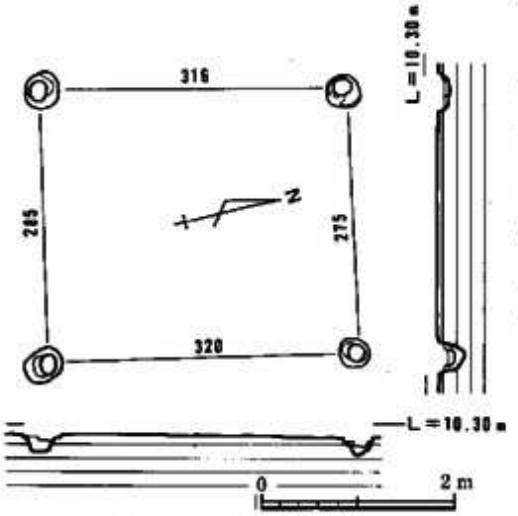


Fig. 41　SB10 (1/80)

掘立柱建物　SB10 (Fig.41、PL.28)

調査区中央西寄りで検出された1×1間の建物で以下のSB11・12も同様の建物で、竪穴住居址の主柱穴の残存の可能性も考えられるものである。方位はN－11～12°－Eにとる。東西の柱間で2.75～2.85m南北の柱間で3.16～3.2mを測る。柱穴掘方は径30～34cmの円形で深さ15～18cm。埋土は灰褐色土にロームブロックを半量以上含むものである。柱痕跡は18～20cm。覆土は黒褐色土である。

遺物は各柱穴から丹塗磨研壺等の弥生土器小片が検出されている。

SB11 (Fig.42、PL.28)

調査区中央南寄りで検出され、SB10・12の間に位置する。方位はN－31～33°－Wにとる。柱間は東西で2.75～2.86m南北で2.75～2.90mを測りSB10と同規模。柱穴掘方は径28～40cm深さ14－42cm。埋土は黒褐色－灰褐色土にロームブロックを半量以上含むもので、柱痕跡は径16～18cm、覆土は黒褐色土である。

出土遺物 (Fig.43)

小さな柱穴内からの出土のため検出した遺物は少なくほとんどが図化不能な小片である。弥生土器が多数であるが古墳時代土師器を少量含む。18は器台口縁部の小片で、外面はタテハケ後ヨコナデ、内面はナナメハケ後ケンマ様のヨコナデ。一部に指頭圧痕が残る。口唇は凹線気味に仕上げる。19は甕底部で底は薄く広めにつくられている。調整は磨滅のため不明。

SB12 (Fig.44、PL.28)

調査区南西側で検出された1×1間のもので方位をN－7～8°－Eにとる。柱間は東西2.52～2.58m南北1.92～2.04mで、SB10・11に比べ南北方向が短い。掘方・柱痕跡は同規模で掘方は径30～40cm深さ28～34cm、埋土は灰褐色土に地山ロームのブロックを2/3以上含む。柱痕跡は径12～14cmで覆土は灰褐色土。

出土遺物は弥生土器片が多いが古墳時代土師器壺の頸部破片を一点検出している。

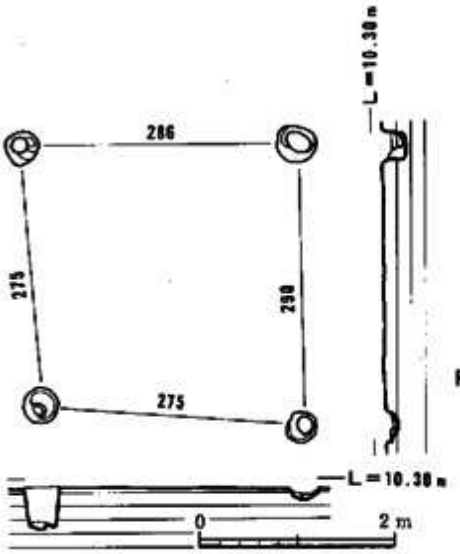


Fig. 42　SB11 (1/80)

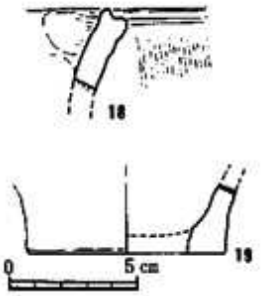


Fig. 43　SB11出土遺物 (1/3)

SB06 (Fig.45、PL.29)

調査区中央部で検出した2×3間の掘立柱建物で方位をN－37～38°－Eにとりこれは丘陵稜線に並行している。梁間で3.85～4.1m、桁行で5.70～5.80m、柱間はそれぞれ1.75～2.1・1.6～2.0mを測りほぼ同間隔である。大部分の柱穴が切り合っており一度建て替えが行われた様である。当初の建物は梁間の中柱掘方は円形で、これ以外は幅60～70cmの隅丸方形の掘方である。深さは梁間の中柱のみが浅く4～8cm。他は30～45cmを測る。埋土は黒褐色土に地山ロームのブロックを半量以上含むものである。柱痕跡は径18～22cm程で掘方に対し細目である。覆土は黒褐色土。建て替えの建物は桁側の掘方も径28～45cmの円形の一回り小さなものにかわっている。柱痕跡は当初のものと同程度である。

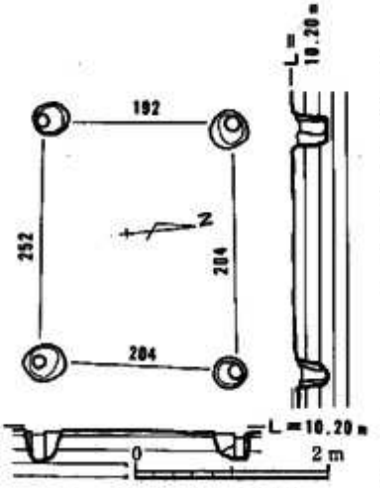


Fig. 44　SB12 (1/80)

出土遺物 (Fig.46、PL.32)

検出した遺物は全て弥生土器で24以外は小片である。

21は小形の甕の口縁部で断面が鋤形を成す。器壁はほとんど磨滅しているが丹塗が若干残る。22は丹塗磨研の広口壺の口縁小片で口脣部が凹線気味になる。器壁はほとんど剝落している。胎土は精良で明黄褐色を呈する。23は甕の口縁で断面が鋤先形を成す。器壁は磨滅しており調整不明。胎土に2.5mm前後までの石英粒を多く含む。24は小形の甕口縁部で断面逆L字形の口縁部をもつ。器壁がほとんど磨滅しているが丹塗りである。25は底の薄い甕底部で1/3弱の残存。復原底径約7cm。内面に炭化物が付着する。器面調整は不明。胎土に3mm前後までの石英粒を多量に含む。26は器台で口縁部の2/3を欠くがほぼ完形である。復原口縁径11.3cm器高16.5cmを測る。上下両端部は丸く仕上げられ、外面は縦方向のハケ調整、上下端部近くはヨコナデ。内面は上下端部が指頭圧で、下半部はヨコヘラケズリ後縦方向のケンマ様のヘラナデ、上半は同様のヨコナデ調整を施す。器壁は薄目でくびれは中央より上位にある。胎土は2mmまでの石英粒を多量に含む。

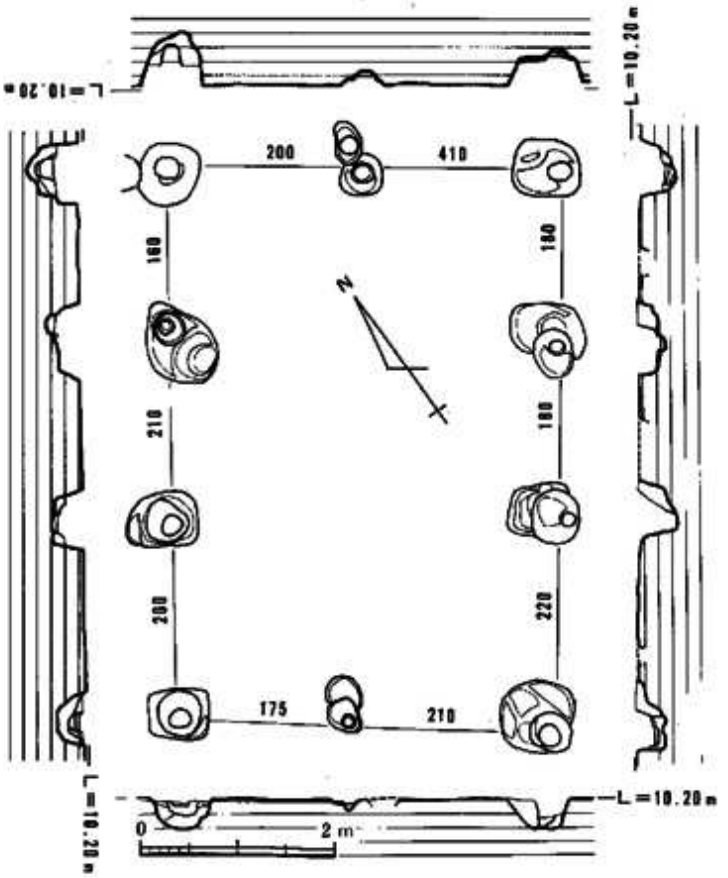


Fig. 45　SB06 (1/80)

SB07 (Fig.47、PL.29)

SB06の北側に接して検出された1×2間の掘立柱建物で、SB06を切っている。方位はSB06に近くN－45～46°－Eにとる。これは1×1間で一直線上に配置されたSB10～12と直交する位置関係にある。梁間は1.58～1.6m桁行は3.25～3.45mと他と比べ狭く、倉庫と思われる。掘方は径30～50cm程の円形で深さ6～20cmを測る。埋土は黒褐～灰褐色土に地山ブロックを半量以上含むものである。柱痕跡は径16～25cm程で覆土は黒褐色土。出土遺物は図化不能な小片ばかりで少量の弥生土器片と若干の古墳時代土師器小片を検出している。

SB08 (Fig.48、PL.30)

調査区南端部で検出された。2間以上×1間以上の掘立柱建物で大半が調査区外にかかっており全容は明かでない。方位はN－36°－Eにとる。柱間は2.0～2.2m程。掘方は径30～54cm深さ16～25cm。埋土は灰褐色土に地山ロームのブロックを2/3以上含む。柱痕跡は径20～22cmで覆土は灰褐色土である。

出土遺物は図化不能な弥生土器小片のみである。

SB09 (Fig.49、PL.30)

調査区南端部中央で検出された2間×2間以上の掘立柱建物で南側が調査区外に延びており全容は明かでない。方位はN－5～8°－Eにとる。東西方向4mで柱間は1.7～2.2mを測る。掘方は径15～52cmで深さ6～26cmと浅く著しい削平を示している。埋土は灰褐色土に地山ロームのブロックを半量以上混じたものである。柱痕跡は径16～24cm程で覆土はほとんどが灰褐色土である。

出土遺物は図化不能な弥生土器小片のみである。

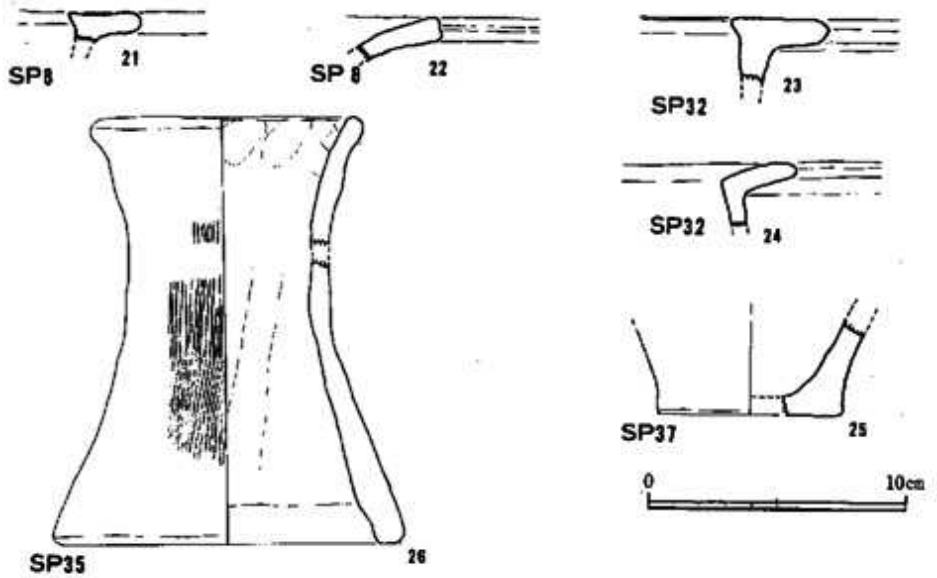


Fig. 46　SB06出土遺物 (1/3)

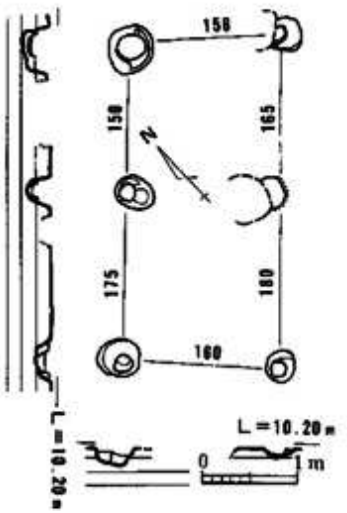


Fig. 47　SB07 (1/80)

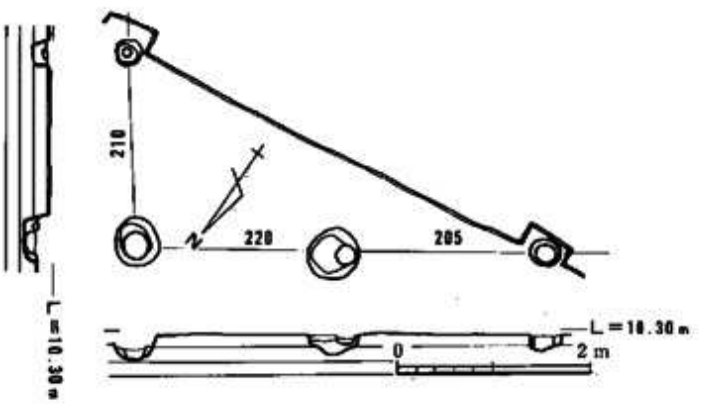


Fig. 48　SB08 (1/80)

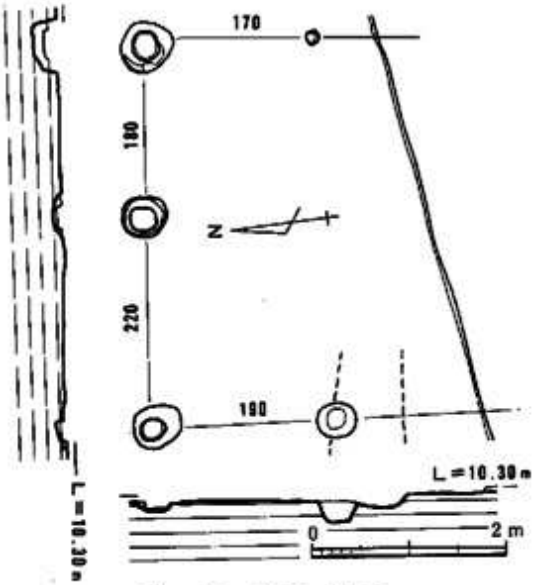


Fig. 49　SB09 (1/80)

土壙SK05 (Fig.50、PL.30)

掘立柱建物SB11と重複して検出されたもので、長さ2.86m幅74cm深さ6cmの浅い溝状を呈するものである。方位をN－8°－Wにとる。埋土は灰褐色土に地山ロームを半量程含んだものである。遺物は土壙北半部の西側壁寄りで土師器皿2点と鉄製鎹の残欠を1点検出した。

出土遺物 (Fig.51、PL.32)

27・28は土師器坏で27は口縁全周の1/2が残存するもので復原口径12.6・器高4.3cmを測る。外底はヘラ切り離し後板圧痕が残る。口縁は外反し直線的に延びる。胎土は3mmまでの石英粒を若干含む。28は27と同様の器形であるがこれより少々大きく、口径15.5・器高3.5cmを測る。口縁の1/3を欠く完

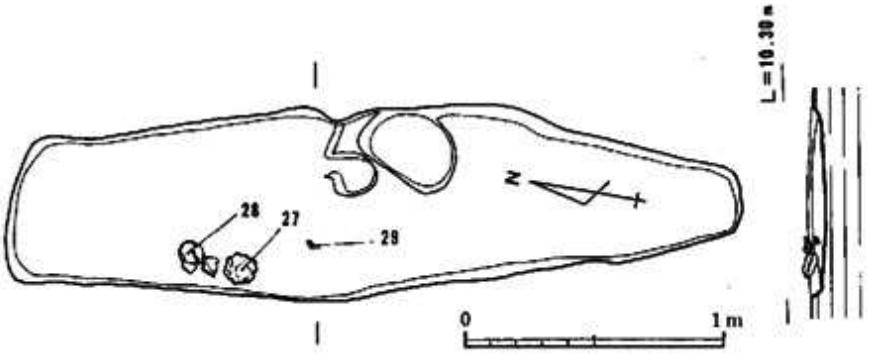


Fig. 50　SK05 (1/30)

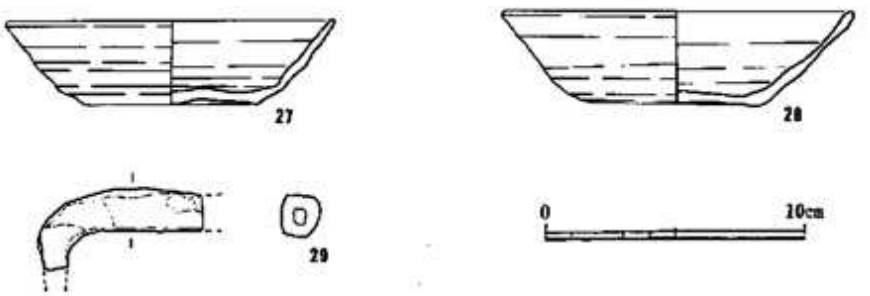


Fig. 51　SK05出土遺物 (1/3・1/2)

形に近いものであるがひずみが目立つ。胎土は1.5㎜までの石英粒を若干含むのみで良好である。29は鉄製鎌の欠損品で先端部と半分を欠失する。厚み10㎜の断面は正方形に近く残存長で45cmを測る。

その他の遺物 (Fig.52、PL.32)　30～37は柱穴内より検出した遺物である。30は断面逆Ｌ字形の弥生土器甕の口縁部小片で外面に二次焼成を受けた痕跡が有る。調整は不明。胎土に２㎜までの石英粒を多量に含む。31は鋤形口縁の壺で口縁内側に粘土帯を貼付し口縁を肥厚させている。石英粒は少量含む。32は甕の口縁部で断面は逆Ｌ字形で内面が不明瞭な稜を成す。外面はやや粗いタテハケ後粗いケンマ様のヨコナデが施される。内面はタテ板ナデ後粗いケンマを施す。胎土は１㎜前後の石英粒をやや多く含む。33は断面三角形の甕口縁部で調整不明。34は甕底部で径8.0cm。薄い底部で胴部はゆるく外反する。35は支脚の口縁部で径11～11.5cm。磨滅が著しいが内外面ともケズリ様の板ナデかヘラナデと思われる。器壁が厚く、上端部が黒変する。胎土は石英粒を少量含む。36は滑石製の有溝石錘で全長3.8・幅1.2cmを測る。全面を刃器によるケズリで成形されており、溝も刃器で削り込んでいる。37はサヌカイト製の剥片石器で全長2.9・幅1.3cmの縦長剥片の片側に主要剥離面側から２次調整がなされている。旧石器時代の所産と考えられ、他に該期と思われる黒曜石剥片が２点有る。

38～40は遺構検出面からの出土。38は弥生土器高坏で全周の1/4程が残存。復原口径26.4cm。器壁は磨滅し調整不明。体下部に焼成後になされた穿孔が有る。39は玄武岩製の磨石で平坦面に擦痕が有り、溝状の擦痕が４条有る。側縁は全周に叩痕が有る。長軸の両端に縄掛け状の打ち欠きが見受けられ、沈子の可能性も考えられる。40は玄武岩製の石杵で高さ12.4・幅7.5cmの方柱状を呈している。上端に強い敲打による階段状剥離が両面に有り、下端は叩打と磨りで平坦面となっており周縁に小さな打ち欠けがある。重量1,070ｇ。41・42は調査区東側の近世・近代の段落ちからの検出で、41は陶器のひょうそく脚部で径９cm。内面に暗褐色の不透明釉をかける。露胎部は暗赤褐色を呈する。外底は糸切り。42は青磁香炉で復原口径９cm。淡オリーブの透明釉で大きな氷裂が入り、胎土は明灰色。口縁は外側に折り返して肥厚させており、中位に円形の窓があいている。43は外套姿の冬期武装の旧日本陸軍兵士を形どった土製人形で型成形でバリが明瞭に残る。全高3.7cm。胎土は精良で淡赤褐色を呈する。内部に芯棒の痕が残る。彩色は不明。

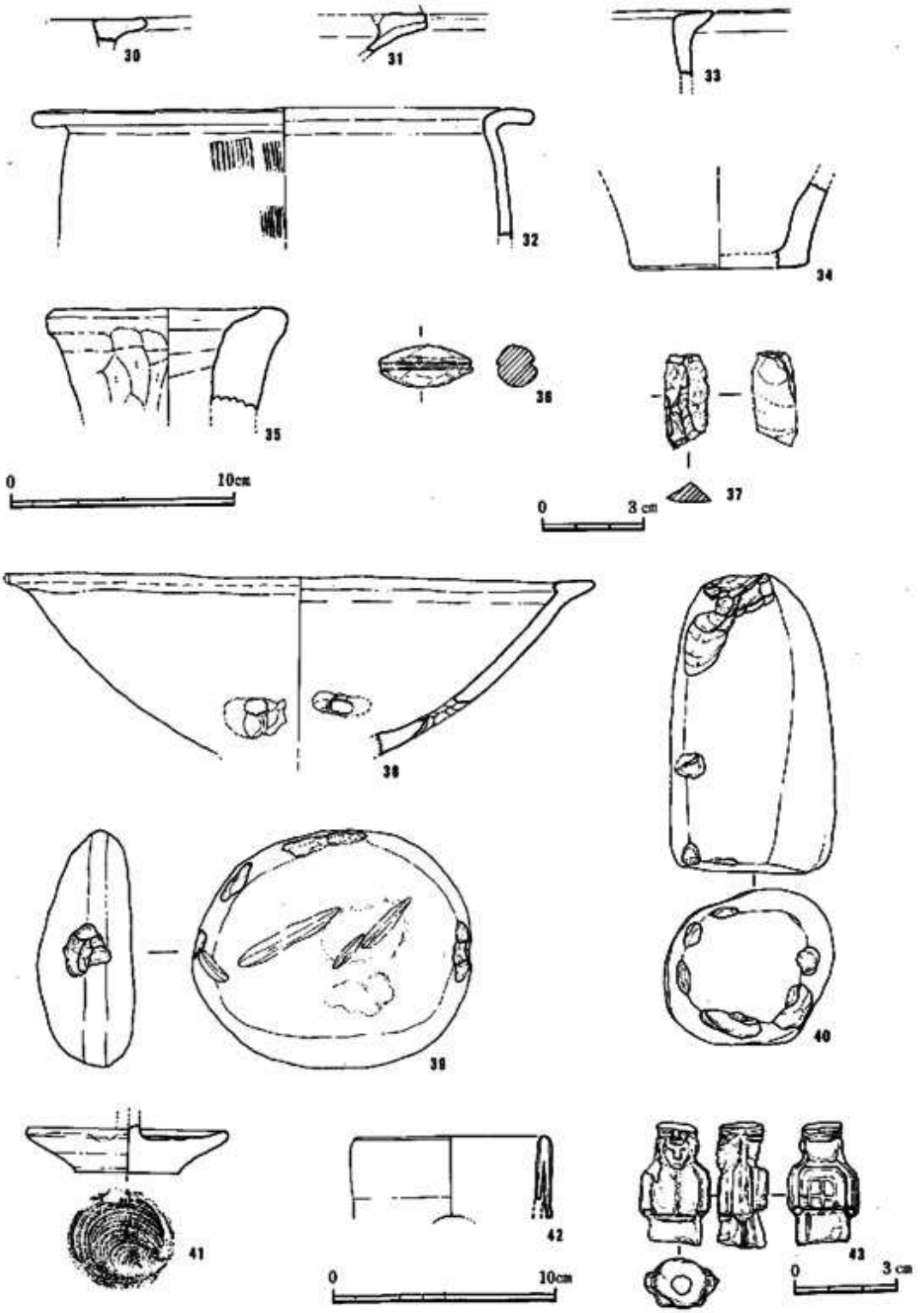


Fig. 52　その他の出土遺物（1/2・1/3）

4）　小結

(1)　遺構の検出はないが旧石器時代のサヌカイト製剥片石器と黒曜石剥片を検出した。第6次・77次・107次調査等の南側台地の最高所を中心にポイント・ナイフ形石器等が検出され、同支丘基部の3ａ次でもローム層より同期の黒曜石片を多数検出しており、これが丘陵中央部まで広がっている事が確認された。

(2)　竪穴住居址を4棟検出した。SC02は弥生前期末～中期初頭と考えられ、1.7×1.9mの長方形で極めて小型であり貯蔵穴の可能性も考えられる。第3ａ次調査では長辺2.3～2.7mの長方形の弥生前期貯蔵穴が検出されているが柱穴はない。SC01は弥生中期後半の住居址で隅丸方形の平面プランを呈し、中央部に炉と、壁際に屋内土壙を1基もうけ、さらに幅50cm程のベット状の段をもうけている。内部より鉄製の刀子と鏃の中茎様の鉄器を各1点検出している。付近では同丘陵基部の第51次調査1号住居（後期初頭）より刀子1点・鏃1点・小片4点が出土している。

(3)　掘立柱建物を7棟検出した。SB06は2×3間の側柱建物で隅丸方形のやや大振りな掘り方を有する。柱穴内部からは弥生土器のみの検出で、器台はほぼ完形であり、多くが弥生中期後半の時期を示す。掘方の形状等同じく第51次調査で検出された3×4間の1号掘立柱建物（弥生中期後半～後期初頭の遺物を検出）の様相がこれに近い。竪穴住居の可能性が考えられる1×1間の建物SB10・11・12は丘陵稜線と直交する線上に分布しており、1×2間の倉庫と思われるSB07は此等より丘陵先端方向に直交する方向で位置している。SB11・12・07から古墳時代後期の土師器片を検出しており、該期の可能性が高い。SB08・09の2棟は柱痕跡の覆土が灰褐色土であり、周辺の例からして中世以降の可能性が高い。

(4)　9世紀代の土壙を1基検出した。土師器坏2点と鉄製鎌1点を供料している。第3ａ次調査で同期の溝と土壙・谷をはさんだ西側丘陵の第52次調査区で奈良～平安時代末の火葬墓の可能性を示す土壙2基が検出されており、律令期の遺構が比較的集中している地域である。

—有田地区の調査—

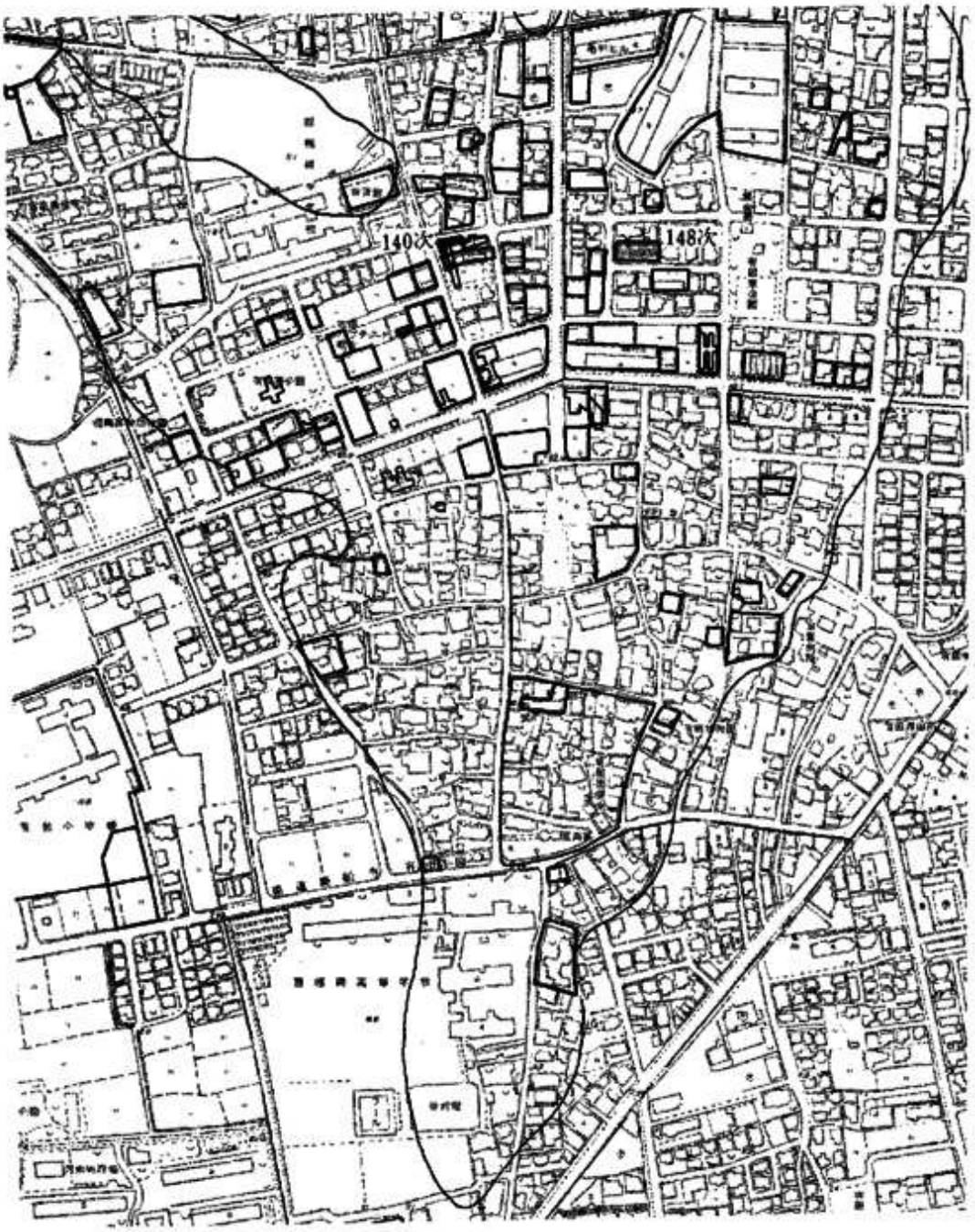


Fig. 53　有田地区調査地点位置図（1/5,000）

4．第140次調査（調査番号8815）

1）　調査区の地形と概要

申請地は早良区有田１丁目29－10に所在する。申請地は有田台地高所部のやや西側、北西から開析する谷を望む斜面上に立地し、標高は約12mを測る。調査前の現況は畑地であった。申請地に個人専用住宅が建てられる為、調査を行った。

申請地周辺は有田遺跡群内で最も調査が行われており、南側は第32次地点、道路を挟んで北側の第72次地点で調査が行われ、南北方向の大溝を検出しており、申請地内を通るものと推定出来た。

発掘調査は平成元年５月28日から６月16日迄行った。調査面積は申請面積155㎡中136㎡である。

遺構面は明橙色の鳥栖ローム土で、表土下15～20cmで検出した。検出した主な遺構は溝２条・土坑１基・井戸１基・ピット群などである。北側で掘立柱建物らしきピットのまとまりがあったが、はっきり確認しえなかった。出土遺物は少なく、コンテナ１箱程である。

2）　遺構と遺物

土坑

SK01（Fig.54）

調査区北西境界地で検出した、東西方向に主軸を取る平面楕円形状の土坑。削平で残りは悪い。規模は長さ1.8m、幅1.4m、深さ14cmを測る。南東側にテラスを持ち、西側は直径30cmのピットが切り込む。埋土は黒褐色土である。

出土遺物　土師器の高杯や壺・甕の細片が34点出土した。

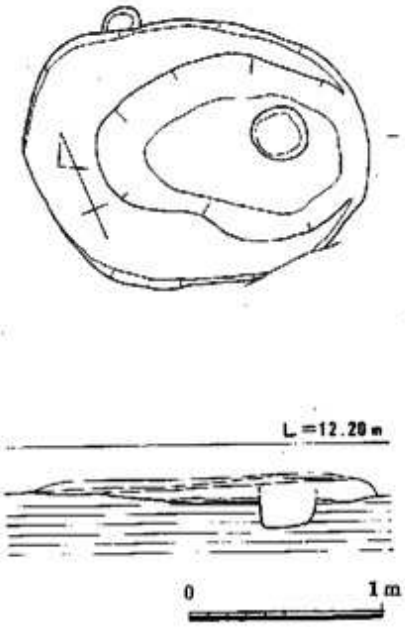


Fig. 54　SK01（1/40）

井戸

SE01（Fig.55、PL.34）

調査区西側で検出した、上面のプランが略円形を呈す井戸。規模は直径1.2～1.3m、深さ1.7mを測り、井戸としてはそれ程深くない。壁面は崩落によるものか、内側に抉れ、袋状

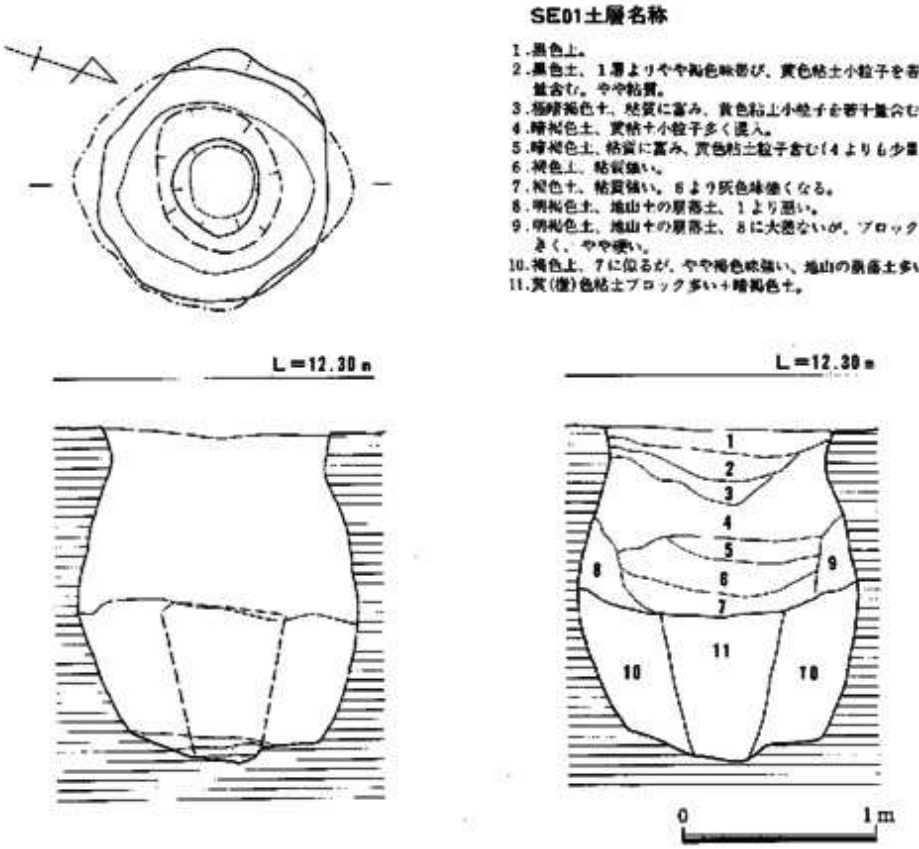


Fig. 55　SE01 (1/40)

を呈している。埋土は上層が黒褐色土から暗褐色土、下の方が褐色土に近くなり、下程粘性が強くなり、地山ロームブロックを含む。また深さ1m程の面で、井筒を抜き取ったような状況が確認出来た。埋土は黄褐色地山ローム土と暗褐色土の混合土で、周囲の褐色土と明確に異なっていた。底面は井筒の痕跡と思われる落ち窪みが認められた。

出土遺物　遺物の出土はなかった。

溝状遺構

SD01 (Fig.57、PL.33・34)

調査区中央で検出した南北方向に延びる断面V字形を呈す溝である。南側の第32次調査区、道路を挟んで北側の第72次調査区に繋がり、規模は幅3.4～4.0m、深さ1.4m前後を測る。溝の埋土は暗褐色土を主体とするが、下の方は地山ロームブロックの混りが多くなり、転礫を含み、粘性が強くなる。

出土遺物 (Fig.57、PL.34)　土師器・須恵器・瓦質土器・青磁・白磁・瓦・陶器片などを含むが、大半が細片で、数も少ない。

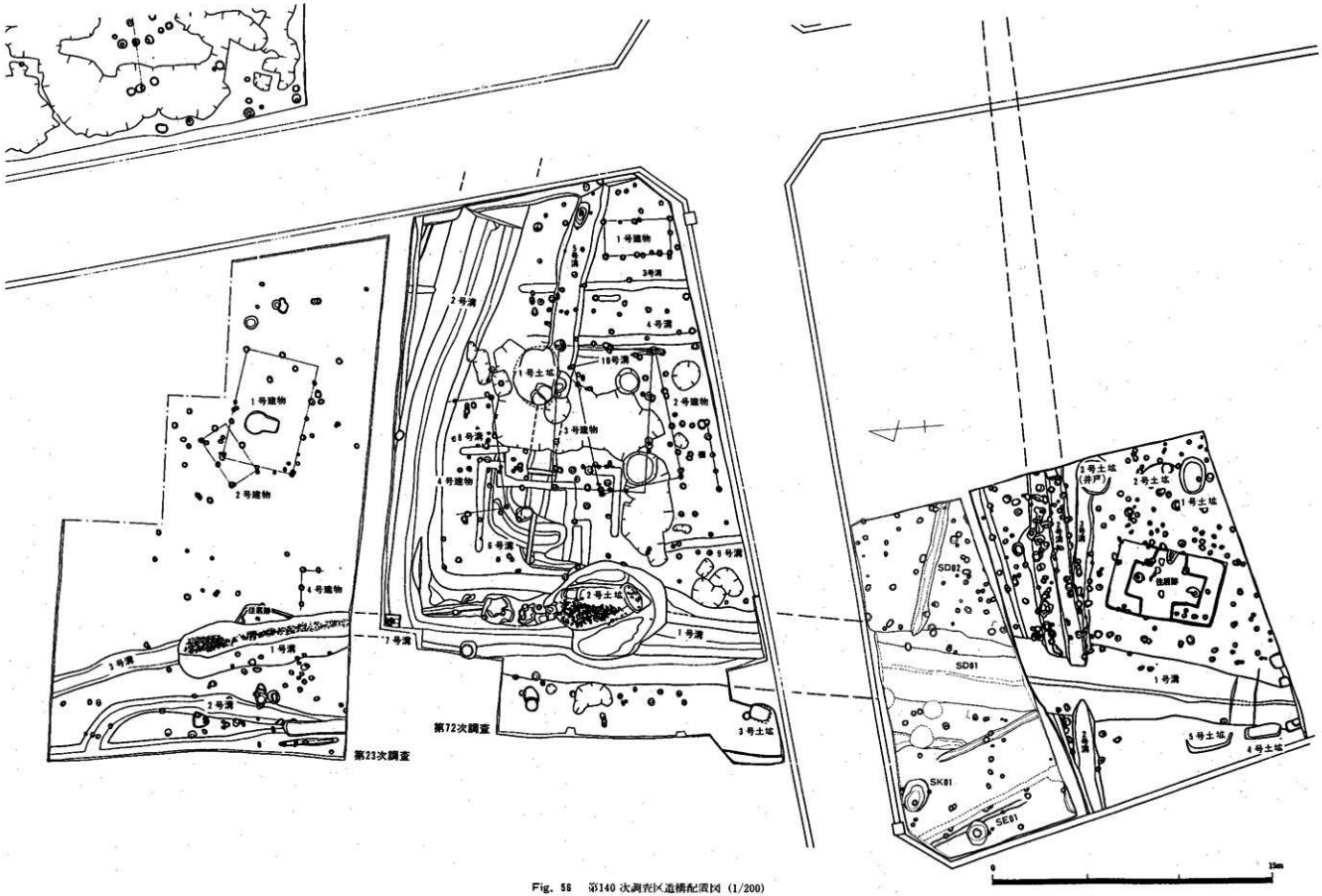
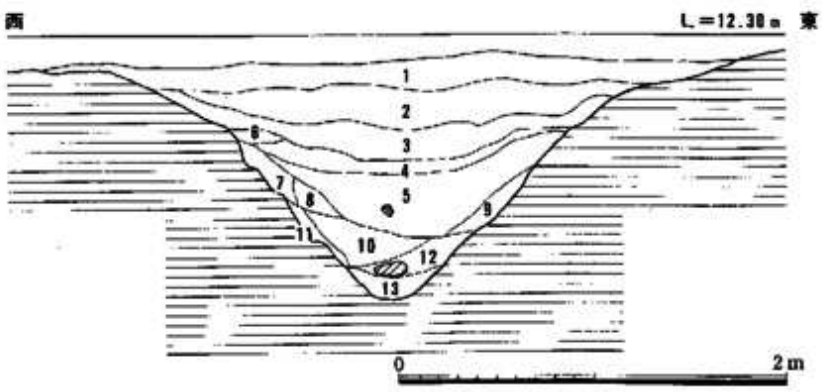


Fig. 58　第140次調査区遺構配置図 (1/200)



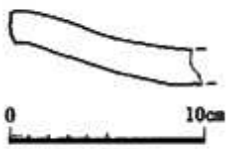
SD01土層名称

1.暗褐色土,黄褐色粘土粒子少量含む。
2.褐色土に黄粘土粒子まく含む。
3.明黄褐色粘土小ブロック＋灰褐色土。
4.明褐色土黄色粘土,小粒子若干量含む。
5.褐色土，2に似るが,粘土粒子含まず。
6.褐色土＋黒色土。
7.黄褐(黒)色粘土ブロック層。
8.暗褐色土＋黄粘土小粒子(まく含む)。
9.明褐色土，地山土の崩壊＋灰褐色土。
10.にぶい黄褐色土(やや粘質)。
11.明褐色土，9とほぼ同一層であるが,粘土分多く，褐色が強い。
12.にぶい黄褐色土,混砂層,10に似る。
13.褐色土，やや粘質で混砂層，12より灰褐色味強い。

Fig. 57　SD01土層断面図及び出土遺物（1/40・1/4）

1は平瓦の小片である。磨滅がいちじるしいが、各面削りを加える。色調は灰色～黒灰色、胎土は1～2㎜の石英粒を少量含み、焼成は良好。

SD02



調査区北側、東西方向にSD01東端近廷びる小溝である。確認長は7.5m、幅0.5～0.8m、深さ6～13cmを測る。

出土遺物（Fig.58、PL.34）　中世から近世の土師器・青磁・白磁・陶器・瓦器・瓦質土器・須恵器・染付磁器・瓦などの細片が少量出土している。

2は染付磁器椀底部1/5片。復元底径約7.8cmを測る。内底見込みと外面に呉須による文様が描かれる。畳付き以外は施釉。3・4は青磁。3は同安窯系の皿。底部1/3片で復元底径4cmを測る。外底は内窪み、削りを加える。4は口縁部細片で、口縁部の玉縁は丸味を呈す。明代のものであろう。釉の色調は緑灰色を帯びる。5は滑石製石鍋の底部1/10片で、復元底径21.8cmを測る。外面は工具による削り仕上げで、煤が付着し、内面は研磨で仕上げる。

ピット出土遺物（Fig.59、PL.34）

ピット個数は75個。内遺物が出土したのは8個である。古墳時代から中世迄の遺物を含み、土師器・陶器・瓦器などの細片が大半で、図化出来るものは少ない。

6はSD07出土の白磁椀底部小片で、復元底径4.8cmを測る。高台部は削り出す。内底は蛇の目状に釉をかき取り、外底と高台部は露胎である。

3）　小結

調査区が狭く、かつ遺構の残りが余り良くなかった為、検出した遺構は少なかった。時期的には中世から近世にかけての遺構が多かった。SD01は周辺の調査区から予想されたもので、中世末16世紀代のもので、小田部城に関連する濠か。SD02については国産の染付片などから近世の時期。畑の区割などの溝か。SE01については埋土などから中世以降か。ただ遺物がまったく含まない事から、比較的短い時間で廃絶されたと考えられる。SK01は当調査区では古い時期の遺構。時期を決定しうる遺物はないが、埋土の色などから古代以前と考える。

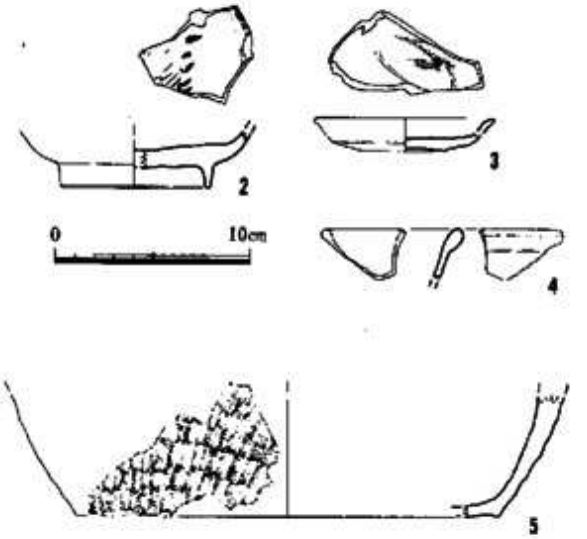


Fig. 58　SD02出土遺物（1/4）

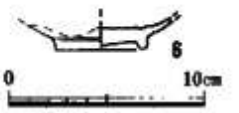


Fig. 59　ピット出土遺物（1/4）

5．第148次調査（調査番号8861）

1）　調査区の地形と概要

本調査区は早良区有田一丁目18－4に所在し、八手状に開析された有田台地の東端、北に細長く延びる小支丘の西側谷部の谷頭付近に位置する。昭和41年の区画整理以前の旧地形図では谷頭部の溜池の西側に位置している。標高は11mである。旧状は畑地である。

周辺では第61・70・83・149・165次調査が行われており、中世の溝・道路状遺構・井戸・土壙等が検出されており、ここから第77次等の有田台地の最高所部にかけて方形区画の溝等16世紀代の遺構が集中する箇所である。

申請地も当初より遺跡の存在が予見され、昭和63年2月専用住宅建築のため本課に事前審査の申請がなされたのを契機に63年7月試掘調査を実施し、遺跡の存在が確認された。

本調査は平成元年2月22日～同年3月31日まで実施された。調査面積は414㎡である。調査区北半部は水田耕作のため地下げがなされており、北半で近世～現代の耕土下70～100cmで、南半部で20～50cmで遺構面に達する。基盤層は北半で黄白～桃灰色の八女粘土、南半で鳥栖ロームとの間の明黄褐色シルト質土である。

検出された遺構は古墳時代～古代の土壙2基・16世紀代の溝7条・井戸2基・土壙4基・水溜遺構1・近世の溝2条と水田耕作のための地業面である。

遺物は少く、コンテナボックス5箱程で16世紀代を中心に中国産陶磁器・李朝陶磁器・土師器・瓦質土器・瓦等を検出している。

2）遺構と遺物

井戸　SE06（Fig.62、PL.37）

調査区中央北側に位置する。掘方は径1.3×1.2mの楕円形。この西側に接して幅30cm深さ5cm程の溝が北に延びており、排水溝と考えられる。掘方内部は上面から20cm程の位置と60cm以下に多量の捨石がなされて井戸を埋め込んでいる。上面より130cmまでは除去したが湧水が著しく壁の崩落が始まったため検出をこの段階で断念した。井側が石組であるかどうか確証はないが捨石が掘方壁近くまで広がっているため石組の上半を井筒内に落とし込みこの部分に捨石をなした可能性が高い。溝SD04の中間に位置するが周囲が削平されているため前後関係は不明。

出土遺物（Fig.63、PL.40）

遺物は埋土の灰褐色土と捨石中から検出された。1は李朝青磁碗の底部で底径4.2cm。削り出しの底部から体部は直線的に鋭く外反する。胎土は淡褐色で黒色の微砂粒を若干含む。これに乳白色の化粧土掛けがなされ、淡灰緑色の透明釉が全面に施釉される。内底と高台畳付にそれ

ぞれ4ケ所の胎土目痕が残る。2は唐津焼の高台付輪花皿で復原口径14.4cm。口唇部を1cm幅で抉り輪花を表現しておりこれに沿って口縁内側に3本単位の施文具で波状文を刻んでいる。さらに底面とこの間に同施文具で波文を4ケ所施すと思われる。釉は乳灰色の不透明の草木釉で内面から外面高台脇まで掛けられる。露胎部は淡赤褐色で胎土は精良である。3は瓦質足釜の脚で内側は火熱のため淡灰色に変色している。4は軒瓦の小片で上面は縄目叩き痕が残りナデられる。下面及び側面はケズリ後ナデ調整。5は丸瓦で筒部に焼成前に穿孔された径1.6cmの留釘穴がある。筒部の復原幅12.6cmで背面に縄目叩痕が残りヨコナデが施される。谷部には布目痕と籠状の組織痕が残る。縁部はヘラケズリ後丁寧なナデ。6は平瓦で厚さ2.2cm。背・谷部両面に一部ハケ目が残る。谷部はタテケズリ後ナデ、背部はヘラナデが施される。側面はヘラケズリ後ナデ。背・谷両面に3mmまでの砂

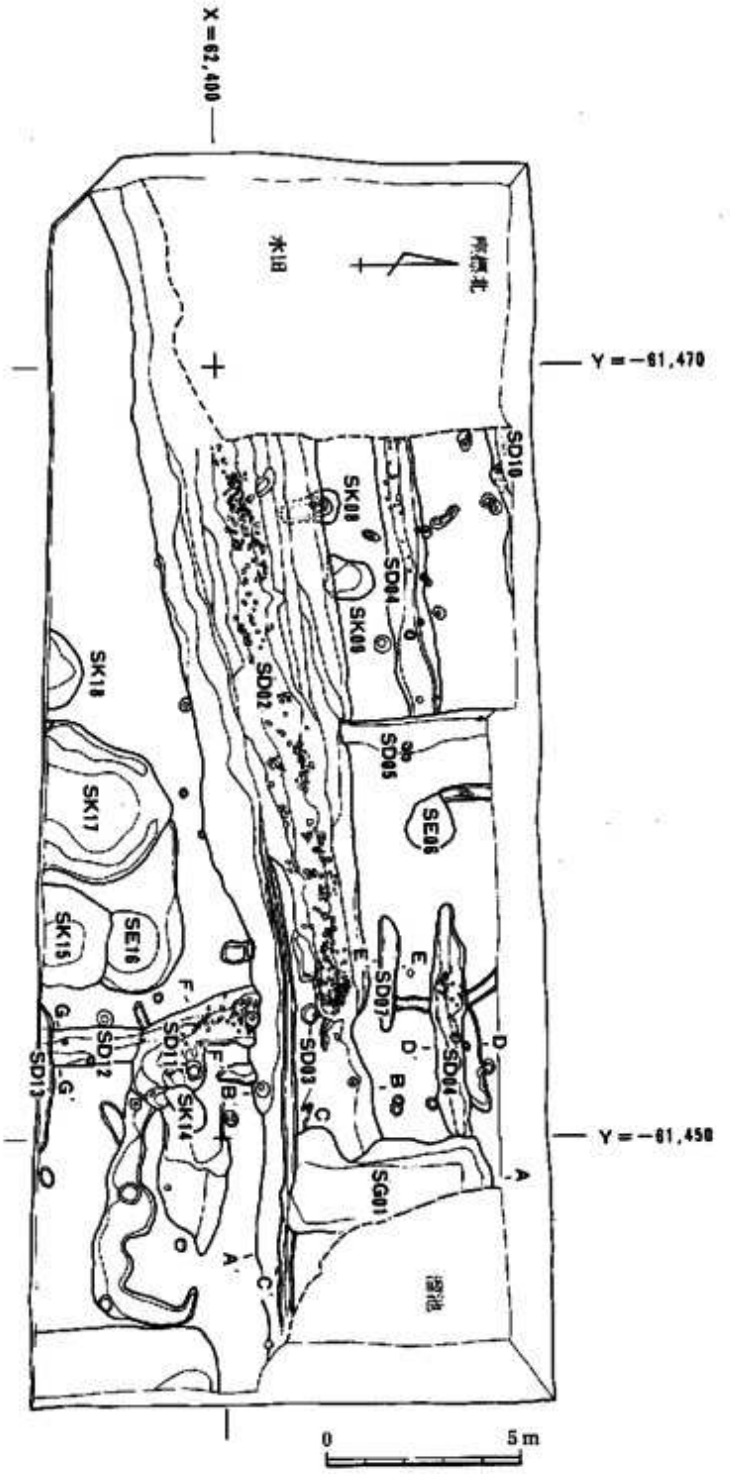


Fig. 60　第148次調査区遺構配置図（1/200）

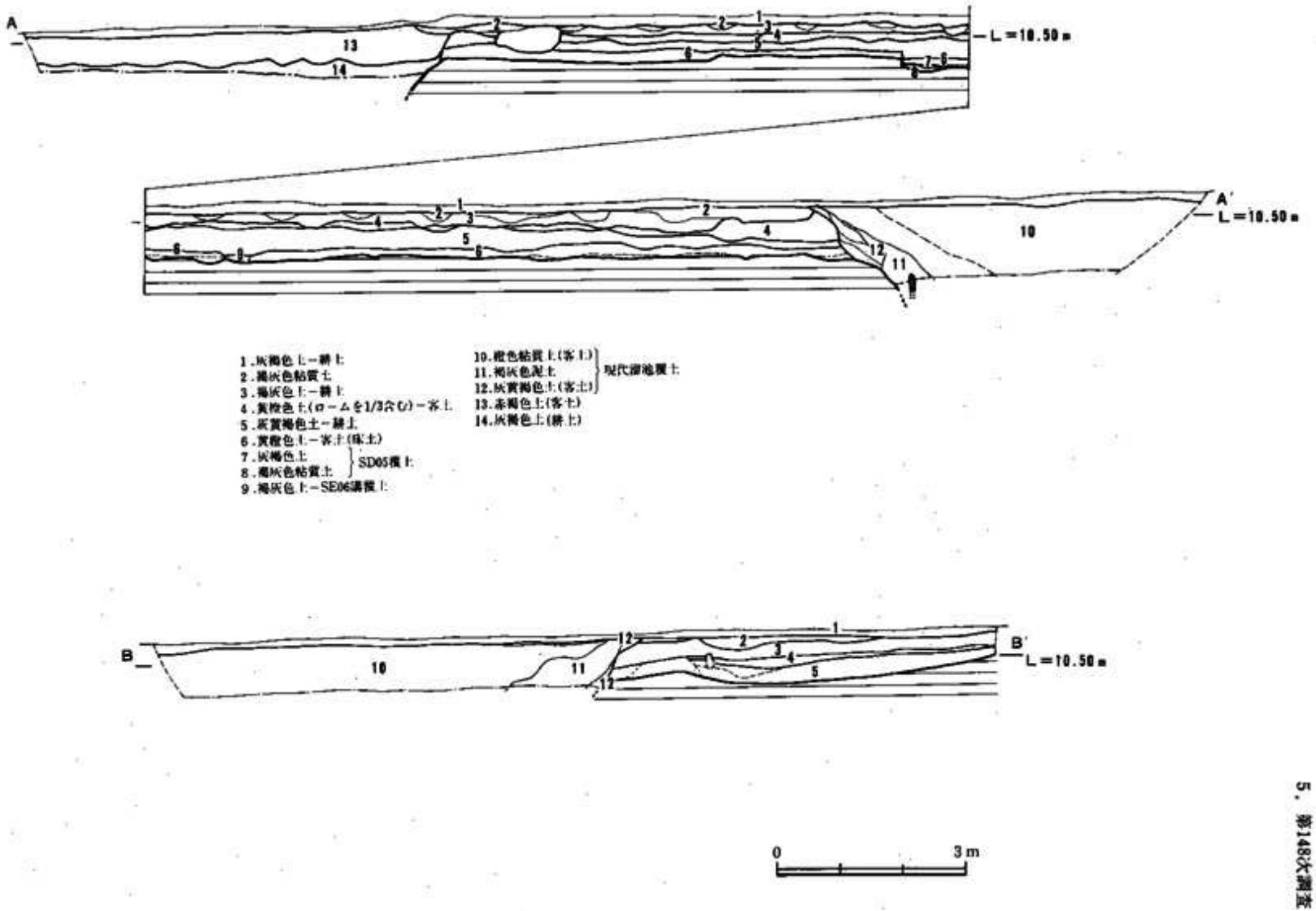


Fig. 61　調査区北壁・東壁土層断面図 (1/100)

粒が多量に付着する。7は20.5cm四方の塼で厚さ3.5cm。
側面はヘラケズリ後ナデ調整、一部に籠状の圧痕が残る。断面は台形に仕上げられる。上下両面はナデ調整で1.5mmまでの砂粒が多量に付着する。8は平瓦で6より厚く厚み3.8cmを測る。谷部はタテヘラケズリ、背部は縄目叩後ナデ調整。9は粗粒の砂岩製の砥石の折損品で幅10.8cmを測る。両側面と上面2面が砥ぎ面となっている。

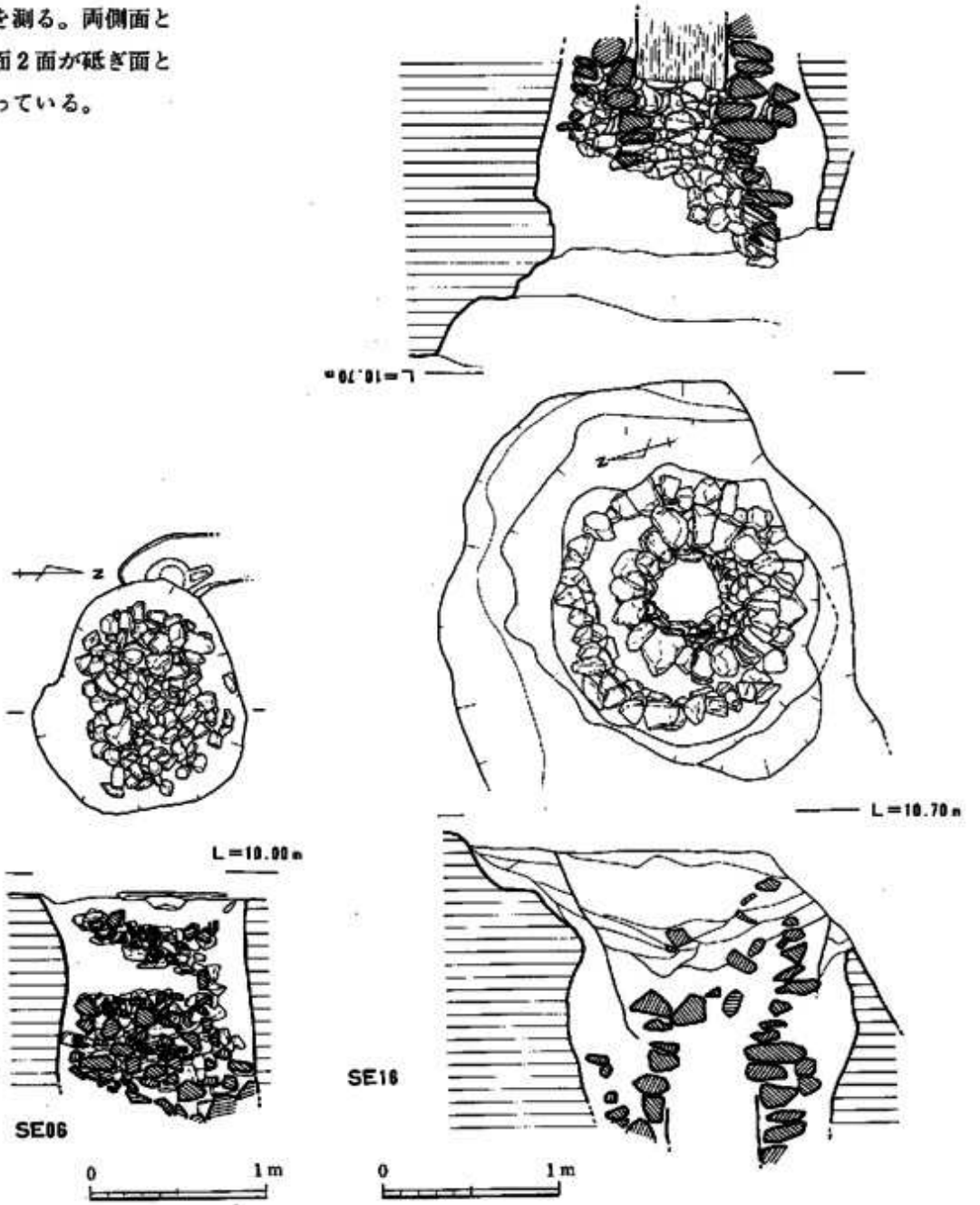


Fig. 52　SE06・16 (1/40)

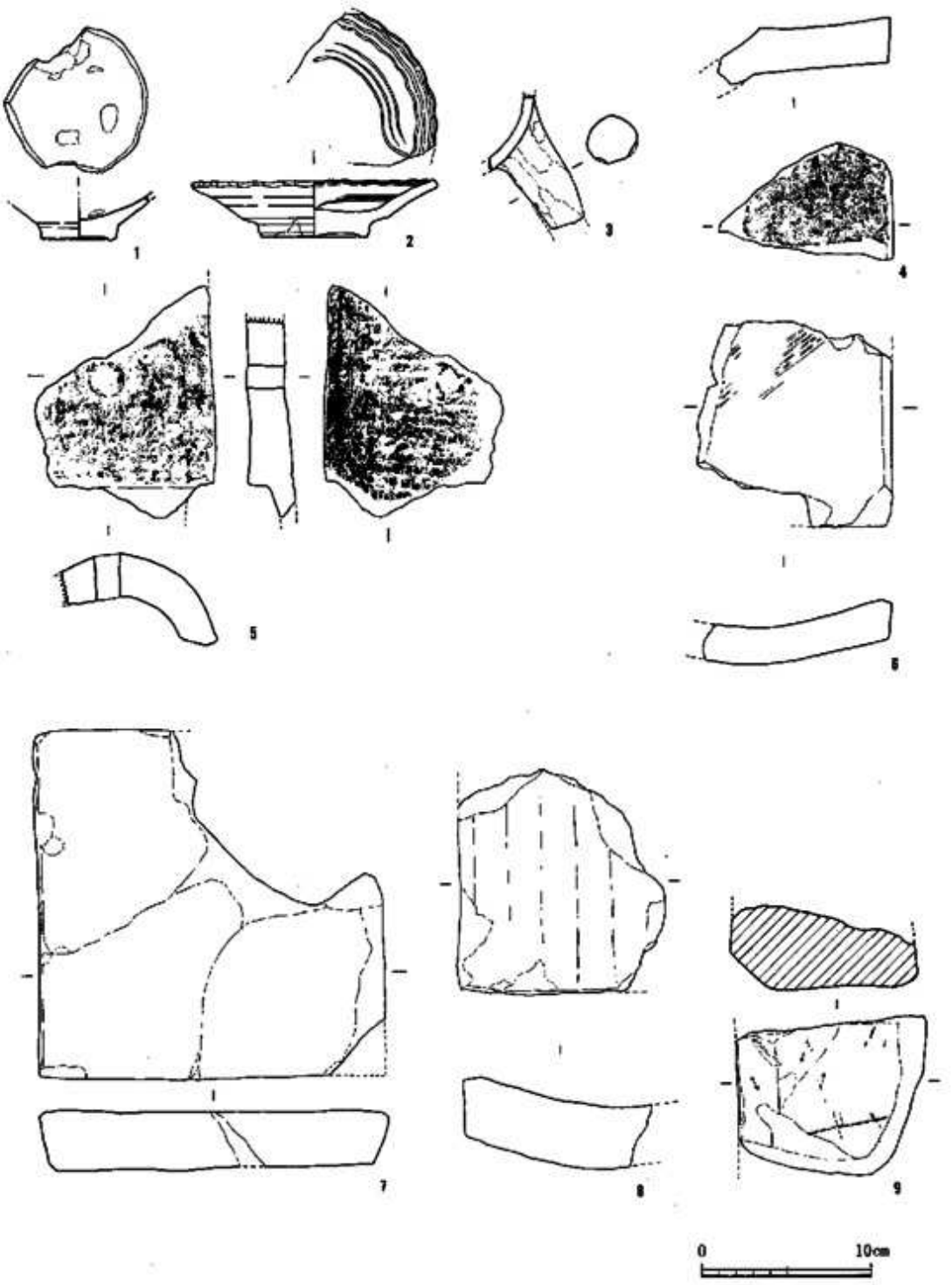


Fig. 63　SE06出土遺物（1/4）

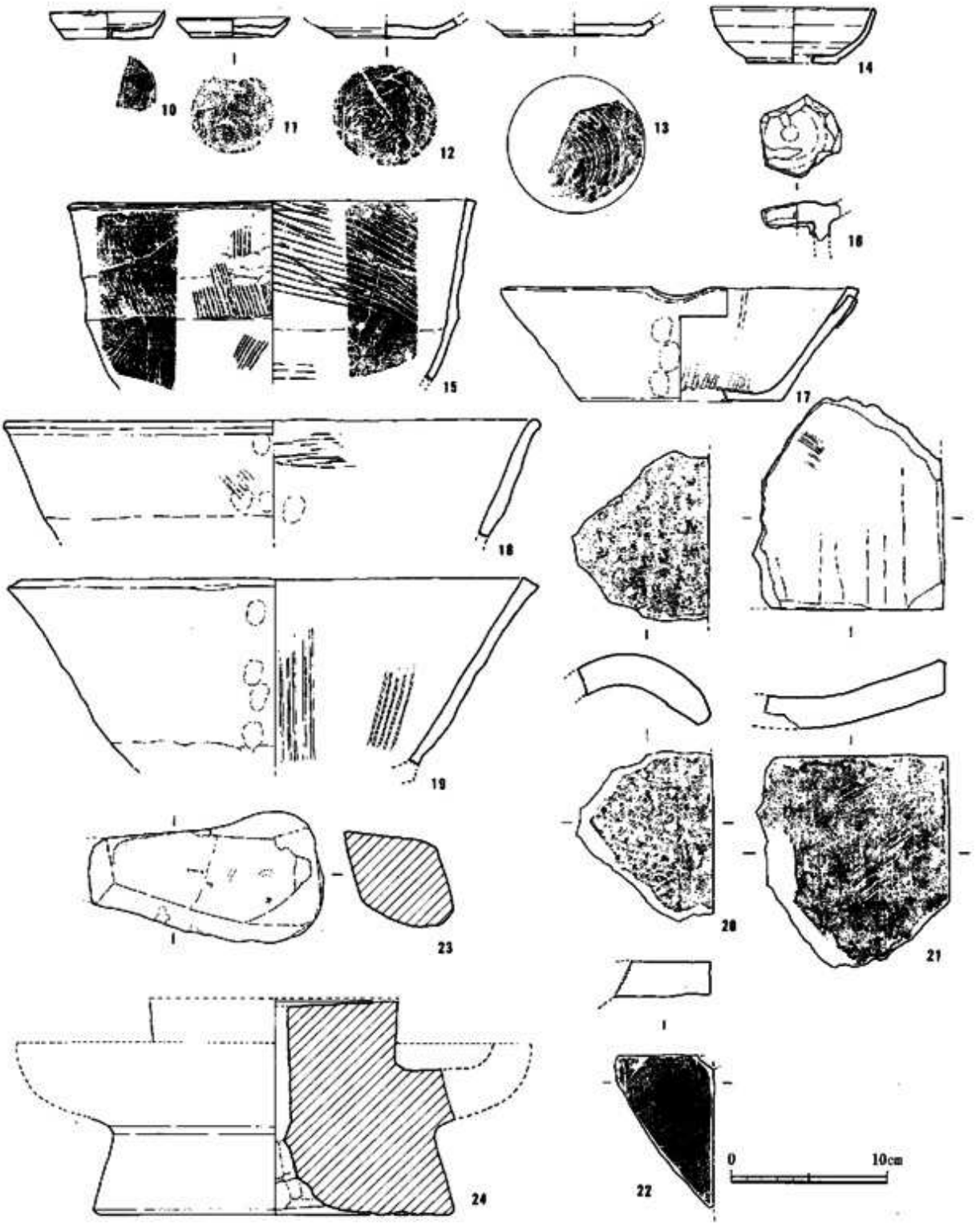


Fig. 64　SE16出土遺物 (1/4)

SE16（Fig.62、PL.37）

調査区上段のほぼ中央部に位置し、SK15・17に切られる。4.5×3.5m以上の隅丸方形の掘方の北東側にさらに径1.9mの不整円形の掘方をもうけている。上面より50cmの位置で内径50cm程の石組の井側が検出され、北半部は壊され井側内に落とし込み、廃棄、埋め込んだ状態である。上面より1.6mの石組井側の内側で桶の井筒を検出した。内径で50cmを測る。井筒外側の石組井側の内径が55cm、井筒上面以上の井側の内径が45cmと井筒上部の石組がこれに覆いかぶさっており、井筒を据え石組の井側を構築した事がうかがえる。上面から1.3mの石組井側のさらに外側に内径1mの石組の井側が検出され、上面から1.7mの位置まで確認された。当初は径1m前後の石組の井側であったものを後に一回り小さく積み替えたものと考えられる。

出土遺物（Fig.64、PL.40）

遺物はほとんどが井側内より検出された。10・11は土師器の皿で10は口径7.2器高1.7cm、口縁の一部を打ち欠き灯明の芯を受ける様に細工している。11は口径7.2器高1.2cmを測る。12～14は土師器坏で12は底径6.3cm、13は底径9cm、14は復原口径10.4器高3.5cmを測る。全て外底は糸切りである。15は土師質土鍋で復原口径26cm。外面はタテハケ後ヨコナデ、内面上半は粗いナナメハケ、下半はヘラナデ調整。直口口縁で器壁は薄目である。16は須恵器高坏の脚部破片を円盤状に打ち欠き打面を磨ったもので径5cm。遊具と思われる。17は土師質擂鉢で復原口径23cm。器高7.4cm。内面は内底際から口唇端まで粗い擂目を刻むが中位は磨滅している。18は土師質の土鍋で復原口径34cm。口縁上半が肥厚し口唇はコ字状に仕上げる。外面はナナメハケ後ヨコナデ。煤が付着する。内面はヨコハケ後ヨコナデを施す。内外に指頭圧痕が残る。19は土師質の擂鉢。復原口径34器高13cmを測り17に比べ体部が深い。直交口縁で口唇が肥厚する。内面はヨコハケ後粗い5本単位の擂目を刻む。使用による磨滅が著しい。20は丸瓦で背部は縄目叩後ナデ、谷部は籠目状の組織痕と布目が残る。厚さ2.1cm。21は平瓦の先端部で谷部は粗いナナメハケ後タテケズリ、背部はナナメハケ調整が残る。側面はヘラナデ調整。厚さ2cm。22は軒瓦で谷部はタテ板ナデ後指ナデ、背部は縄目叩後ナデ。側面ヘラナデ。厚さ2.2cm。23は方柱状の砂岩製砥石の折損品で側面全面が縦方向の砥面となっており中央部が著しく砥ぎ減っている。24は井側に転用された石臼の下臼で上端復原径16cmを測る。暗灰色の砂岩製で上面は砥石に転用され擂目は磨滅している。芯受部は底面から径6～1.8cmの漏斗状にタガネで打ち欠き粗く磨いている。中位がくびれる。Fig.65は掘方出土遺物で25は龍泉窯系青磁碗の小片。26は土師器小皿で復原口径7器高1.3cm。27は土師質土鍋で外面はヨコナデ。煤が付着する。内面は細かなヨコハケ調整。

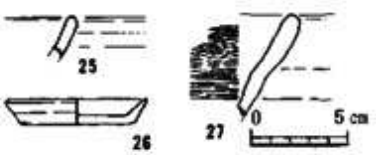


Fig. 65　SE16掘方出土遺物（1/4）

土壙　SK08（Fig.66、PL.38）

下段の西寄りで検出されたもので中世の溝SD02に切られる。全長1.55m幅86cm深さ35cmを測る不整楕円形で断面は舟底形を呈する。方位はN－9°－Wにとる。

出土遺物は図化不能な土師器の小片のみである。

SK09（Fig.66、PL.38）

下段でSK08の東隣で検出され、同じくSD02に切られる。全長1.3m幅1.27m深さ18cmの不整形土壙で方位をN－11°－Wにとる。覆土は灰黄褐～黄橙色でSK08同様他に比べ明色である。

出土遺物はない。

SK14（Fig.66、PL.38）

上段東部で検出され、16世紀代の溝SD11を切る。全長1.4m幅72cm深さ27cmを測る。断面は船底形。底面より5cm程浮いた状態で多量の礫が埋め込まれている。

出土遺物（Fig.67）

28は備前焼甕の底部で復原底径18cm。外面明灰色、内面明赤褐色を呈する。29は瓦質火舎の底部及び足で外面はナデ後ケンマ、内面は細かなナナメハケ調整を施す。30は須恵器系の大甕の胴部片で外面は木目直交の擬格子叩後ナデ調整。内面はゆるい平行弧の当て具痕が残る。

SK15（Fig.68、PL.38）

上段の南端中央部で検出され、南半部は調査区外に延びている。SE16を切っており、上端幅2.6m下端で1.13m、深さ93cmを測る断面逆台形の大型の土壙で、径1.15mの小振りの土壙が西側で上位から切り込んでおり、井側の可能性も考えられる。

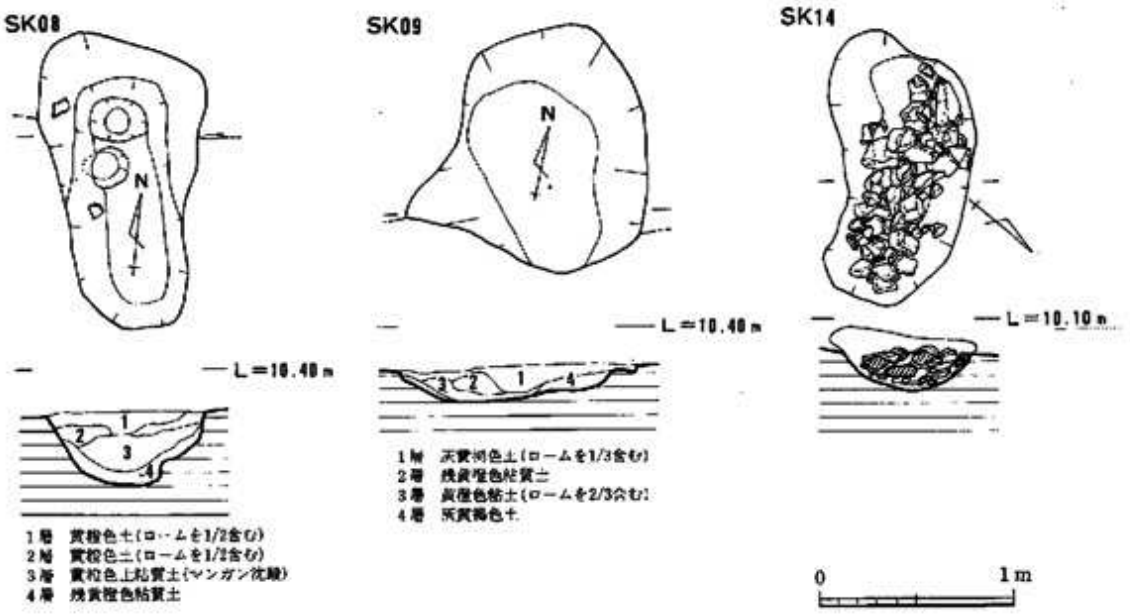


Fig. 66　SK08・09・14（1/40）

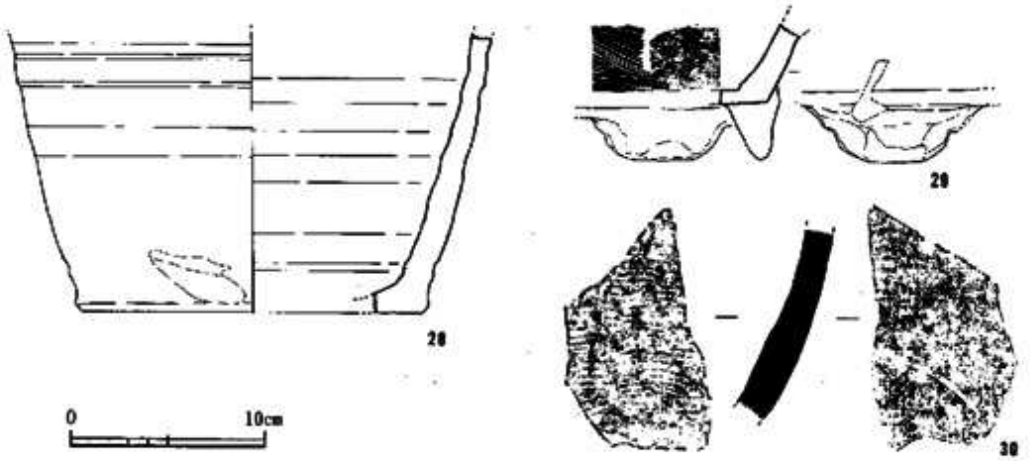


Fig. 67　SK14出土遺物（1/4）

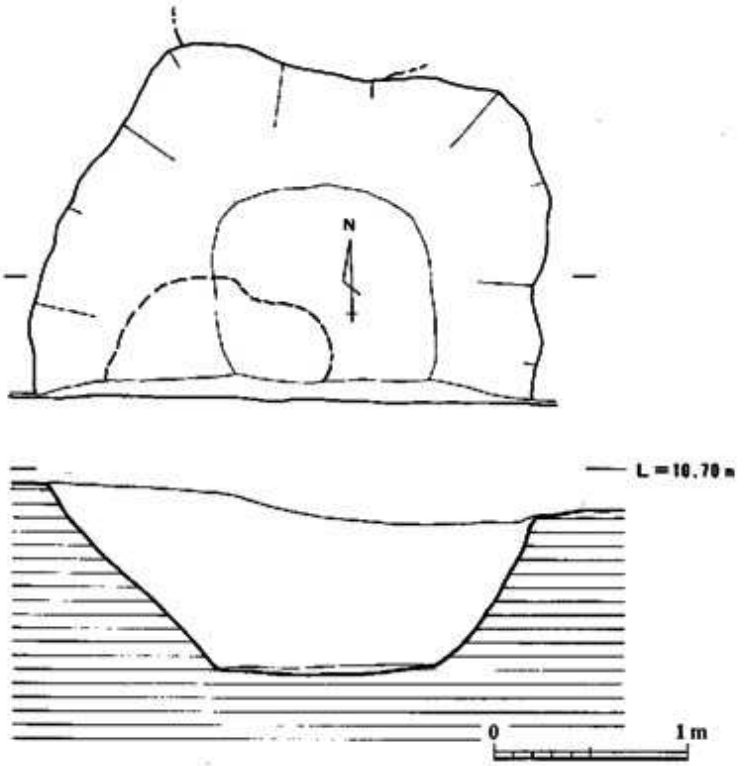
出土遺物はない。

SK17（Fig.69）

SK15の西隣りに位置し、SE16を切っている。同様に南端が調査区外に延びており幅4.3mの大形の土壙で深さ40cmの2段の掘り込みになっている。

出土遺物は須恵器甕・土師器・平瓦の小片が検出されている。

SK18（Fig.70）



調査区上段のSK17西隣りに位置し、南半部は調査区外に延びている。東西幅2.08m深さ10cmの円形の浅い土壙である。

出土遺物は土師器の小片が1点のみである。

Fig. 68　SK15（1/40）

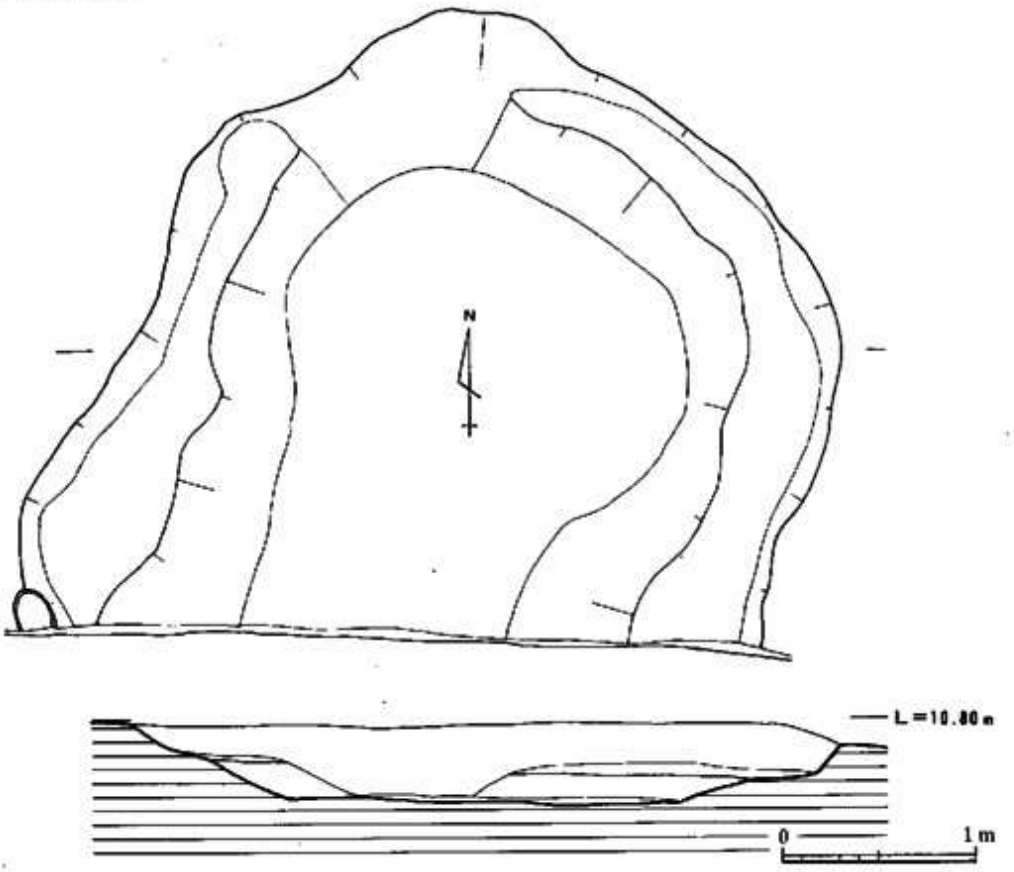


Fig. 69　SK17 (1/40)

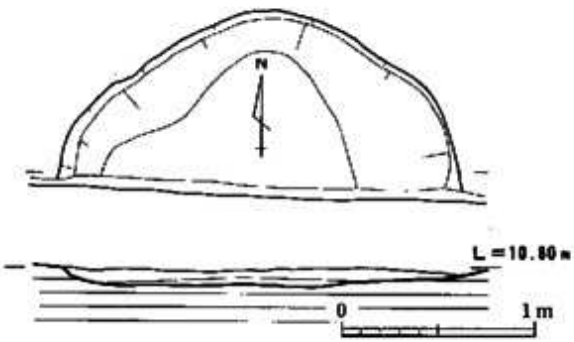


Fig. 70　SK18 (1/40)

溜池　SG01 (Fig.71、PL.39)

調査区東端部に位置し、大半を近・現代の溜池に切られている。方形の掘り方で南北幅5.5m深さ75cmを測る。土層断面を観察すると東西方向の溝SD02を切り、SD03に切られており、先後関係を示している。また縦断土層図の9・10層間に断絶が有り、埋没後幅を4.5mに狭ばめて改削がなされている。近・現代の溜池はSG01を踏襲している。溝はSD04がこれに接続している。

出土遺物 (Fig.72、PL.41)

31は龍泉窯系青磁碗。復原口径12cm。胎土は黄白色でやや粗く亀裂状の気泡が入る。釉は淡緑灰色の透明釉で細かな氷裂が入る。32は明青花碗の底部破片を円盤状に打ち欠いて成形した

もので復原径4㎝を測る。釉は青白色で高台畳付部をカキ取っている。胎土は白色で精良。見込に藍色の呉須で花弁文を描く。33は軒丸瓦の瓦当部で径10.7～11㎝と小振りである。内区に尾の接しない三巴文を、外区に楕円形の珠文を19配する。下端に方形の見当が有る。瓦当面には0.5㎜前後の砂粒が多数付着する。背部はヘラケズリ後ナデ、内部は指ナデが施される。34は軒瓦で厚さ2.3㎝。背部は縄目痕後ナデ、谷部はケズリ後粗いナデ調整で両面とも0.5㎜前後の砂粒が多数付着する。側面はヘラナデ。

溝SD02（Fig.71、PL.39）

調査区の上、下段の境をなしている東西方面の溝で、同方向のSD03と東端部のSG01に切られる。幅3m前後で深さ70㎝程で方位をN－79°－Eにとる。土層断面の観察から5度前後の改削がなされている。下段の近世水田耕作面はこの溝の北側を掘り下げ地業を行っている。

出土遺物（Fig.73・74、PL.41）

溝の5層までを上層、7層までを下層遺物として取り上げている。

35～42は上層出土の遺物。35は明青碗で小片で、釉青白色で半濁し呉須は暗藍色でくすんでいる。胎土は淡灰白色で精良。36は龍泉窯系青磁碗で底径7.4㎝。体部外面下部に4条の沈線、見込に印花文を施す。釉は緑灰色で半濁。内底以外は厚くかけ畳付はカキ取る。胎土は灰色で精良。37は白磁碗底部と円盤状に打ち欠いた遊具と思われるもので復原径9㎝。見込に釉の蛇ノ目カキ取りが有る。38は土師器坏で底部径8.4㎝。39は備前Ⅴ期の擂鉢で復原口径28㎝。40は瓦質足釜の脚でタテヘラナデ後指ナデ。41は土師の擂鉢か捏鉢で外面に縁下に2条の指頭による押し引きでナデくぼませ縦方向の粗目のハケ調整後ナデる。内面は口唇部に横ハケ調整が残るが以下は不明。復原口径31.6㎝で胎土に多量の石英粒を含む。42は丸瓦で径14.2㎝。背部は縄目叩きが残る。谷部は籠目と布圧痕が残る。両側縁部はヘラナデ。43～61は外層出土遺物で、43は龍泉窯系青磁碗。釉は淡緑灰色で半濁。胎土は明灰色。44は同じく小碗で釉は淡緑灰色で上半が厚い。胎土は明灰色で黒色微粒子が目立つ。45は備前Ⅳ期の擂鉢。色調は暗褐色で胎は暗灰色、石英粒を多く含む。46～48は土師器坏で外底は全て糸切り。46は口径12.2・器高2.9㎝を測る。色調は赤褐色を呈し、重ね焼きのためか口縁下1㎝程が黒褐色を呈する。47は口径10.6・器高は2.5㎝。胎土は精良。48は底径8.3㎝。明褐色を呈し石英粒を若干含む。49は土師器皿で底径4.4㎝。胎土は精良。50・51は土師器皿の底部を円盤状に打ち欠いた遊具と考えられるもので50で底径5.5㎝、51で5㎝。52は土師質足釜の胴部で外面突帯下に煤が多量に付着する。53は土師質土鍋で口径26㎝。外面は縦ハケ後ナデ消し、煤が付着する。54は土師質足釜の下半で銅径25㎝。摩滅が著しいが縦ハケ後ゆるいナデ。銅以外にタール状の炭化物が付着する。55は瓦質の火舎。外面はヨコナデ後ケンマ。内面はヨコナデ。器表は黒灰色で胎土は灰褐色。石英粒を多く含む。56は瓦質の形象品で上面に半截竹管文、側面にヘラ沈線を5条施しケンマする。下面は摩滅する。57は鬼瓦の下端部と思われる。厚さ6.8㎝で裏面に砂が多量に付着する。

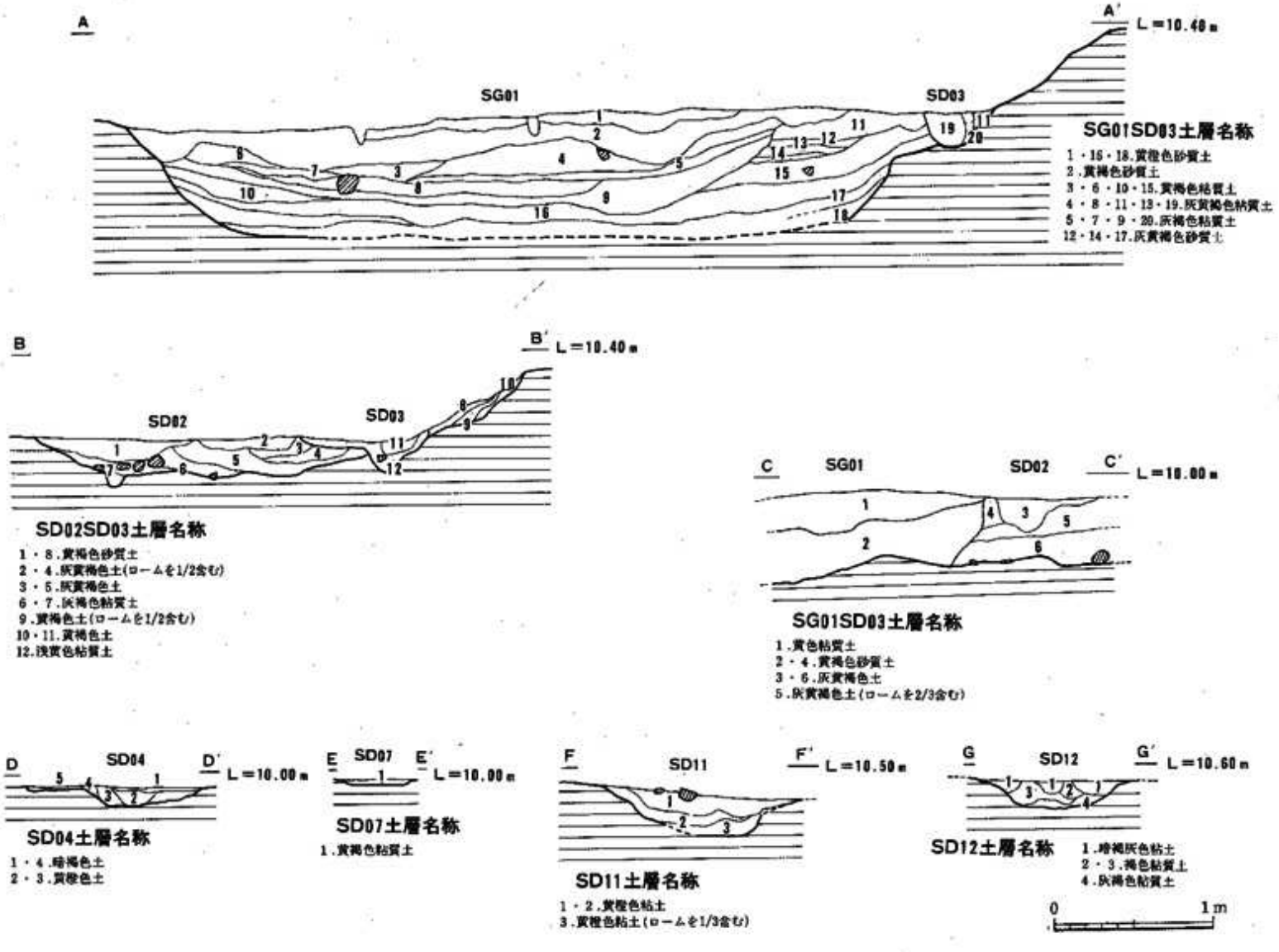


Fig. 71　SG・SD土層断面図 (1/40)

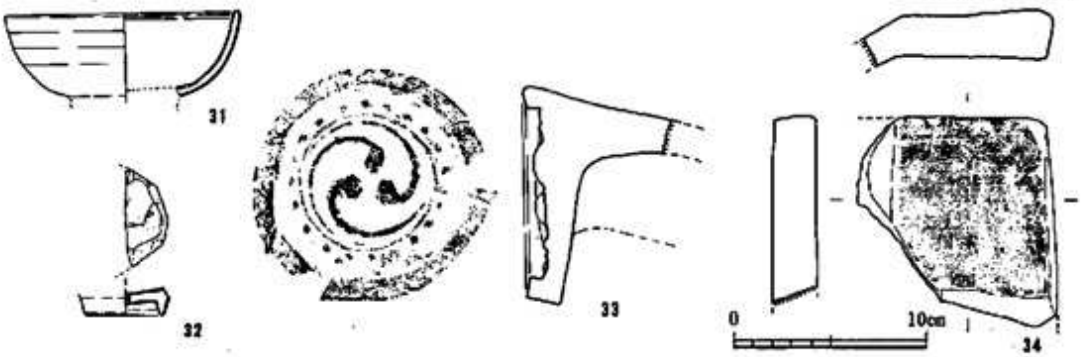


Fig. 72　SG01出土遺物（1/4）

58・59は丸瓦で58の背は縄目叩後ナデ。谷は縄目、布目圧痕が残る。59の両面はタテヘラケズリ後ナデ。60・61は石臼で60の上臼は径18.6cmで砂岩製。61は下臼の皿部で復原径36－40cm。阿蘇凝灰岩製で全面叩打ののち内面と外面口縁下をケンマする。

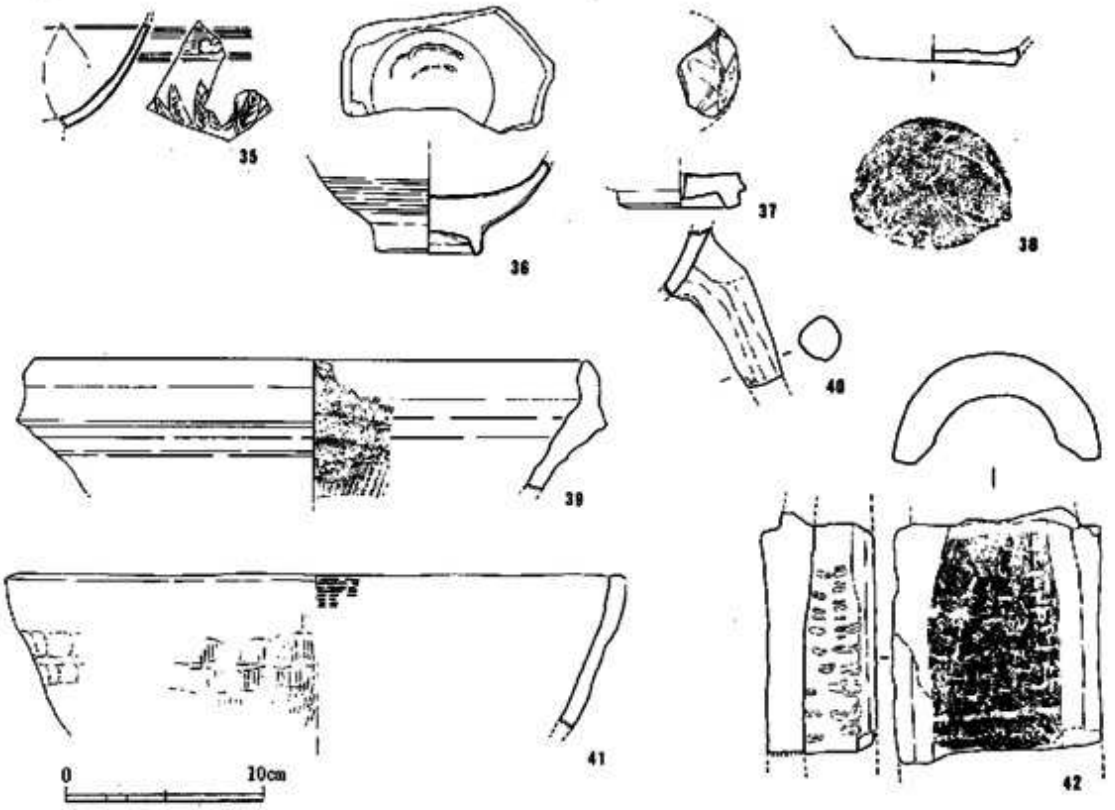


Fig. 73　SD02上層出土遺物（1/4）

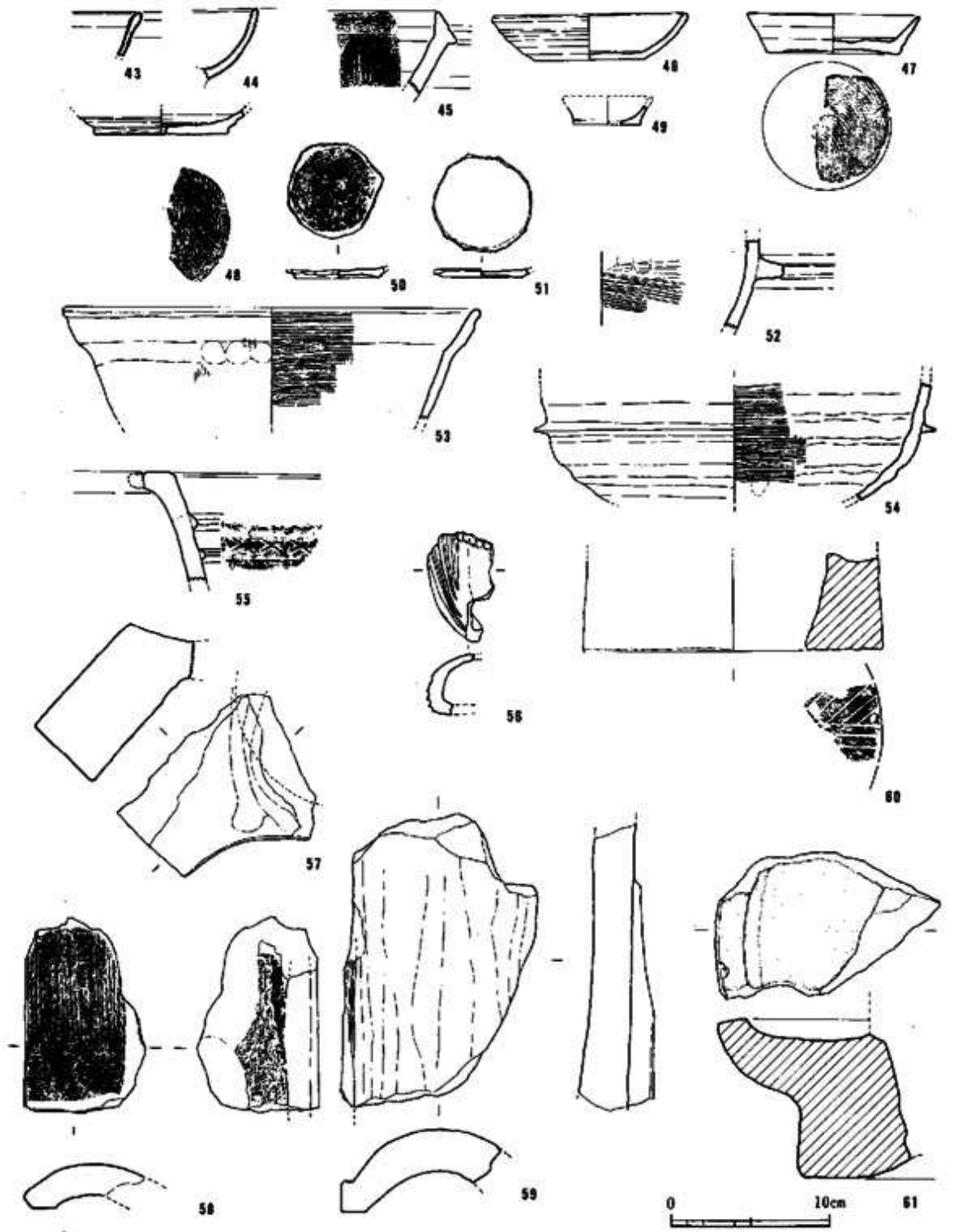


Fig. 74　SD02下層出土遺物 (1/4)

SD03（Fig.71、PL.39）

SD02の南側でこれに並行して検出された溝で、SD02・SG01埋没後に掘削されている。幅80cm、深さは20cmで浅く、上段の下端線が沿っており、SD05とともに水田の用排水路の可能性も考えられる。方位はN－87°－Eにとる。

出土遺物（Fig.75、PL.42）

62は龍泉窯系の青磁鎬蓮弁文碗で釉は淡オリーブ。胎土は明灰色で精良。混入品である。63は端反りの白磁高台付皿で口径12.8・器高2.3cm。釉は乳白色で全面に施釉し畳付と内側をカキ取る。胎土は白色で精良。64は明青花碗で釉は青味がかった乳白色で半濁。胎土は明灰白色で精良。65は李朝青磁碗の底部を円盤状に打ち欠いたもので底径6cm。釉は淡青灰色の透明釉で薄く全面に施釉される。見込みと畳付に5ヶ所胎土目痕が残る。胎土は灰色で黒色微粒子をやや多く含む。66は同じく青磁の皿で復原口径10.2cm。器高2.6cmを測る。釉は淡オリーブ色の透明釉で薄く全面に施す。見込みと畳付に砂目痕が残る。胎土は石英粒・黒色微粒子を多く含む。

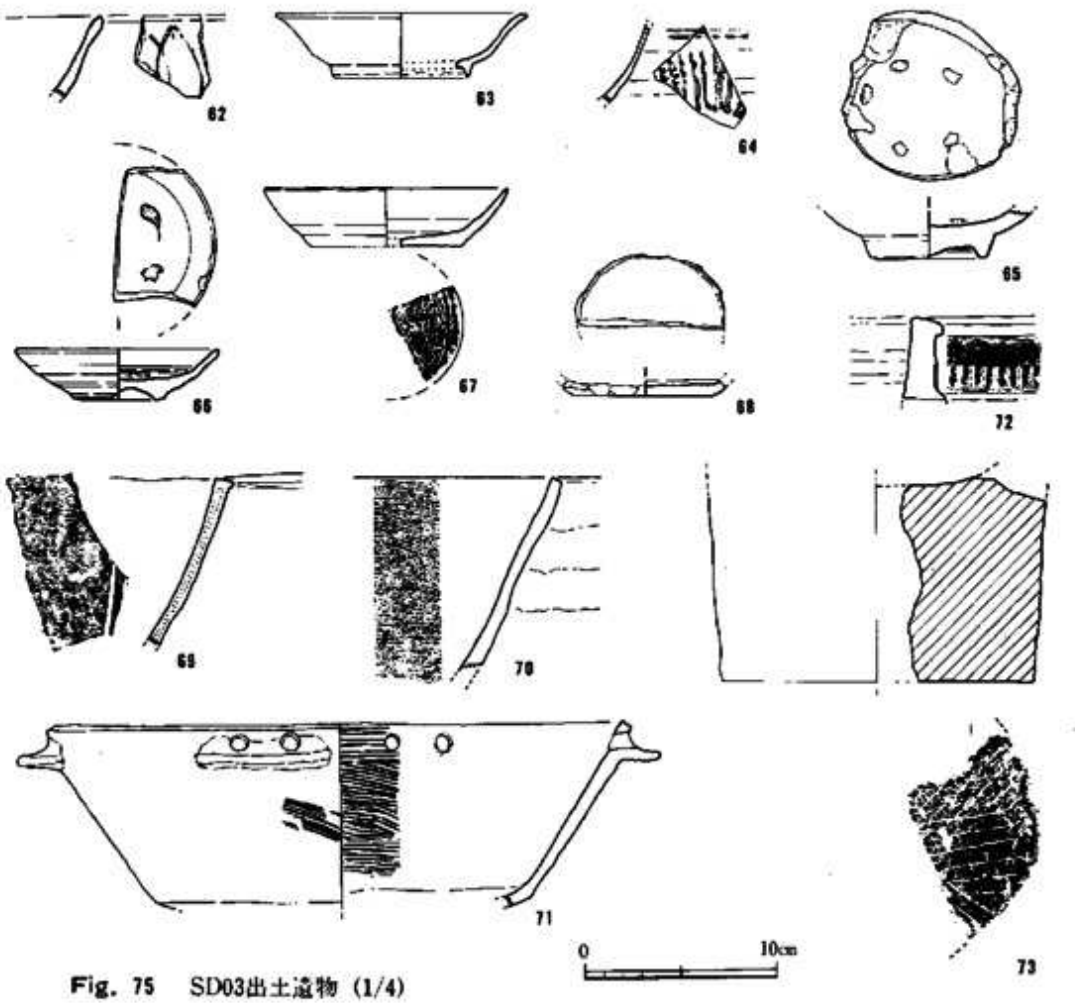


Fig. 75　SD03出土遺物（1/4）

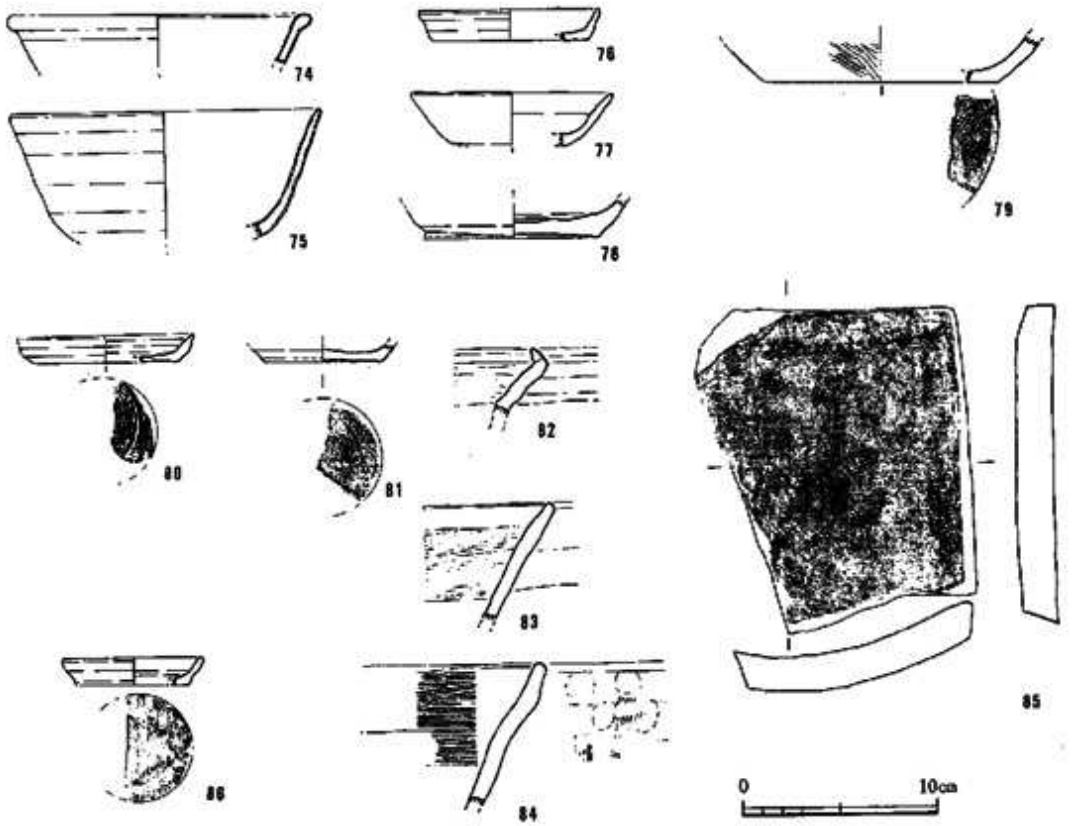


Fig. 76　SD04・11・12出土遺物（1/4）

口縁の一部に炭化物が付着しており灯明皿に用いられた可能性が有る。67は土師器坏で口径12.4・器高３cmで胎土は精良。68は土師器坏の底部を打ち欠いた再加工品で底径７cm。69は土師質擂鉢で器壁が薄い。外面は指頭圧後ナデ、内面上位はナナメ板ナデ、以下は縦ケズリ。擂目は粗い。70は土師質土鍋。外面は縦ハケ後ナデ。煤が付着する。内面は細かなヨコハケ調整。71は把手付の土師質土鍋で板状の把手の上位に焼成前穿孔の２孔が有る。外面は指頭圧後ナナメハケ、煤が厚く付着する。内面は粗いナナメハケ。第83次調査で同一品が検出されている。72は瓦質の火舎で口縁下に雷文と連子文の連続スタンプ文様が有る。73は細粒砂岩製の茶白の上臼で径15.9cm。

SD04（Fig.71、PL.39）

SD02の北側４m程の位置でこれに並行して検出された。幅1.1m、深さ10cm程で大きく削平を受けている。方位はN－85°－Eにとる。

出土遺物（Fig.76、PL.42）

74は龍泉窯系青磁の小碗、青緑色の釉で氷裂が入る。胎土は明灰白色で精良。復原口径15.6

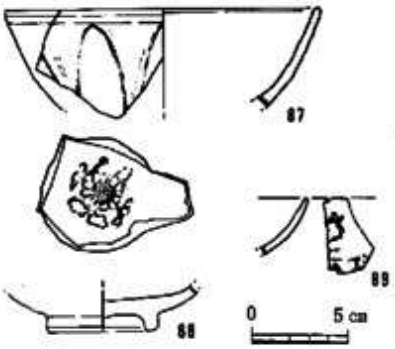


Fig. 77　下段出土遺物（1/4）

cm。75は李朝白磁碗で復原口径16cm。灰白の黒色微粒が目立つ生地に乳白色の化粧土をかけ薄い透明釉を施す。大きな氷裂が入る。焼成は軟質て器壁が厚い。76は土師器皿で口径9.2・器高1.5cm。77・78は土師器坏で77は口径10.4cm、78は底径9cm。79は瓦質の小鉢で底径12cm。全面にハケ調整を施す。

SD11・12（Fig.71）

下段の東西方向の溝に直交する上段の溝でSD11が12を切りこれをSK14が切っている。11は幅1.3m深さ20cm、12は幅95cmで深さ20cm。

出土遺物（Fig.76、PL.42）

80～85はSD11からの出土。80・81は土師器皿。80は口径9・器高1.3cm、81は底径6cm。82は瓦質の鍔の口縁部で外面は指頭圧後ヨコナデ、内面はヨコハケ後ナデ。器表は黒灰色で胎土は黄白色。83・84は土師質の土鍋で83は外面タテハケ後ヨコナデ、炭化物付着。内面はヨコハケ後ヨコナデ。84の外面は指頭圧、タテハケ後ナデ、内面は細かなヨコハケ。85は平瓦で淡灰色を呈し胎土に石英粒を少量含む。谷は縦方向の板ナデか指ナデで凹はナナメに削る。同部位と側面はケズリ後丁寧なナデを施す。背谷両面は多量の砂が付着する。

下段出土遺物（Fig.77）

SD02の北側を上段より20～40cm削平し東西に3面の水田を開いている。

87は龍泉窯系の片切彫りの青磁蓮弁文碗、復原口径16cmで釉は青緑色で半濁、88は同じく見込に菊花の印花文を施す。釉は緑灰色の透明釉で畳付と内底以外に施釉する。胎土は暗灰色。

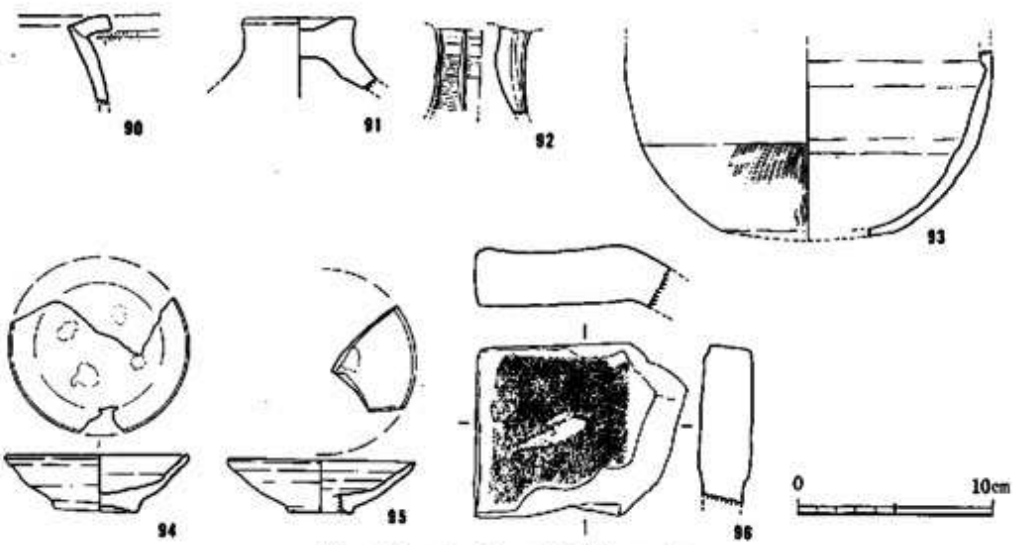


Fig. 78　その他の出土遺物（1/4）

89は肥前系染付碗で外面に草花文を呉須で描き釉は淡青白色。胎土は白色で精良。

その他の遺物（Fig.78、PL.42）

各遺構の混入遺物と遺構検出時の出土遺物である。90はSD02出土の弥生土器の甕で逆Ｌ字口縁の外面下にタテハケを施す。91はSK14出土で同じく甕蓋のつまみ部で径5.7cm。92は須恵器高坏の脚部で縦方向にヘラ刻みの条線を施す。SD03出土。93は土師器甕の底部で平底に近い丸底を呈する。胴径18.7cm。外面上位はヘラケズリ後ケンマ。下位はタテハケ調整で煤が付着する。上位は円形に大きく器壁が剝落している。内面は摩滅して不明。内面と外面上位は明桃色に発色する。胎土は石英粒を多く含み明黄灰色を呈する。94～96は検出面からの出土。94・95は李朝青磁皿で94は径9.4・器高2.9cm。95は口径9.5・器高2.7cmでともに暗緑灰色の透明釉を全面にかけ砂目痕が残る。胎土は灰色で石英粒を多く含む。96は軒瓦で背はケズリ様の板ナデで多量の砂粒が付着する。谷は縄目叩後ナデ。側面は板ナデ調整。

4）　小結

今回の調査で検出された遺構の９割以上が16世紀代のものであった。第77次調査等、有田台地の最高所を中心として、70～140m前後の方形区画の同期の溝等が多数検出されており、本調査区もこの一角をなすものである。第70・83・96・77・47・17・53・71次調査で検出された南北約130m・東西130mのほぼ正方形の大区画の中にあり、SD02・04はこの中を第96・61次を西辺とし70・83次を東辺とし、第61次からこれに至る北辺の溝として東西50m、南北70m程の方形の小区画を形づくっている。溝底の標高も9.6～9.8mで83次の１号溝、２号溝の9.1～9.8mと近い数値を示している。小田部城に伴う屋敷地と思われる。

出土遺物としては李朝の陶磁が目立つ。今回の調査では同期の中国製陶磁が７点に対し李朝陶磁は７点と同数である。同期の貿易陶磁の集散地である博多の調査で中世末には中心地からはずれた地点であるが地下鉄の調査[注]では中国製陶磁46点、高麗李朝陶磁25点と中国製陶磁が多いが、李朝陶磁の100㎡当たりの出土数は本調査が1.69、博多が高麗青磁を含むが2.32と大差なく、有田遺跡での李朝陶磁の集中度を示している。

（注）高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集　1984

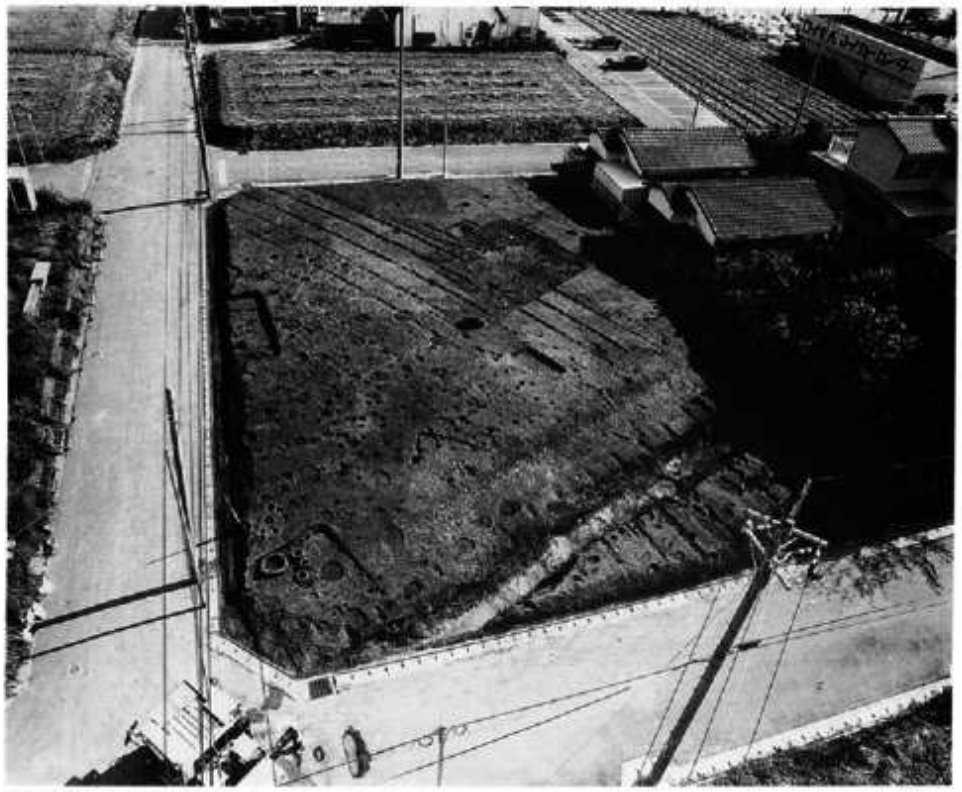
図　　版

第125次調査作業風景

有田遺跡群周辺航空写真（1961年撮影）

PL. 2

有田遺跡群周辺航空写真（1972年撮影）



(1)調査区全景（北から）

(2)調査区全景（東から）

PL. 4

(1)SC01竈上面（南から）

(2)SC01・06・07完掘状況（南から）

(1)SC06内土坑SK07（南から）

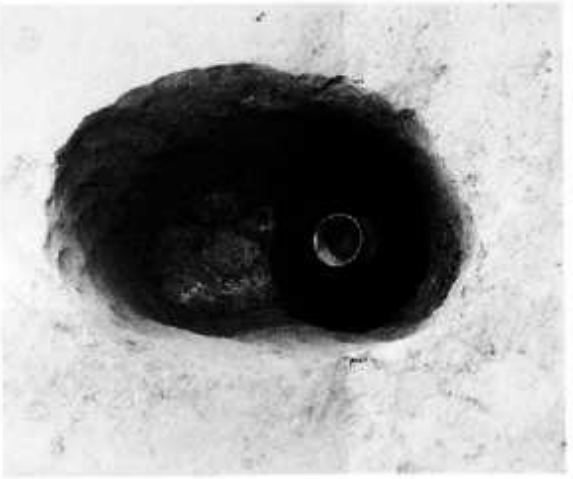
(2)SC07（南から）

PL. 6

(1)SC01遺物出土状況

(2)SC01遺物出土状況

(3)SP203遺物出土状況

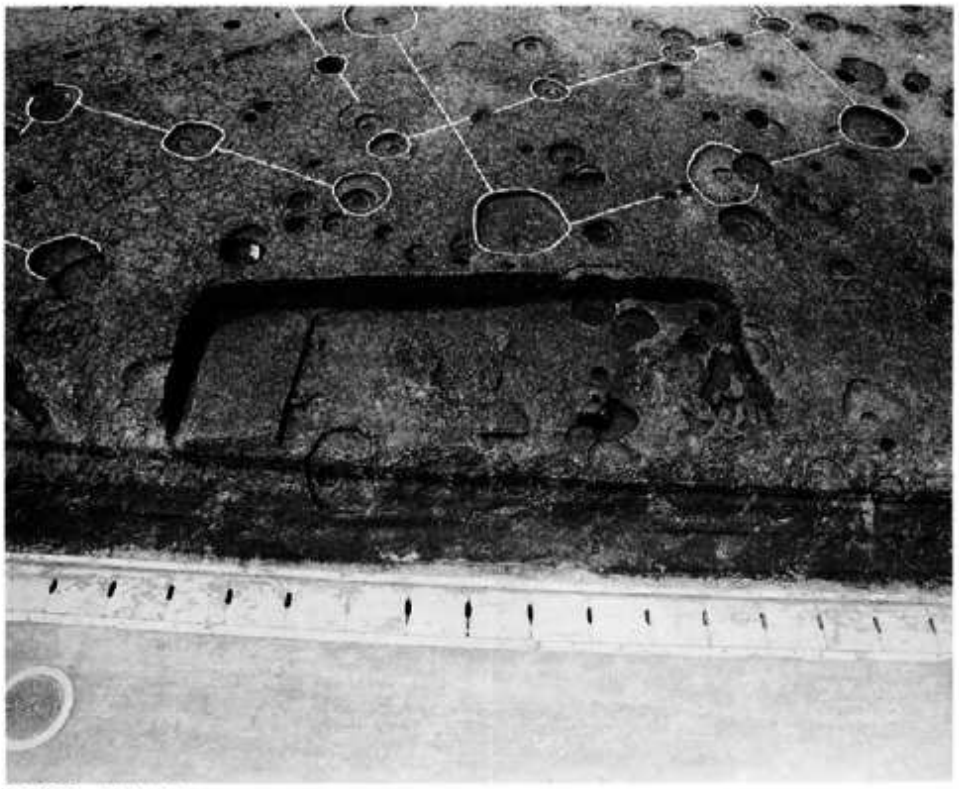


(4)SP238遺物出土状況

(5)SP228遺物出土状況

(6)SK13勾玉出土状況（西から）

(1)SC02（北西から）

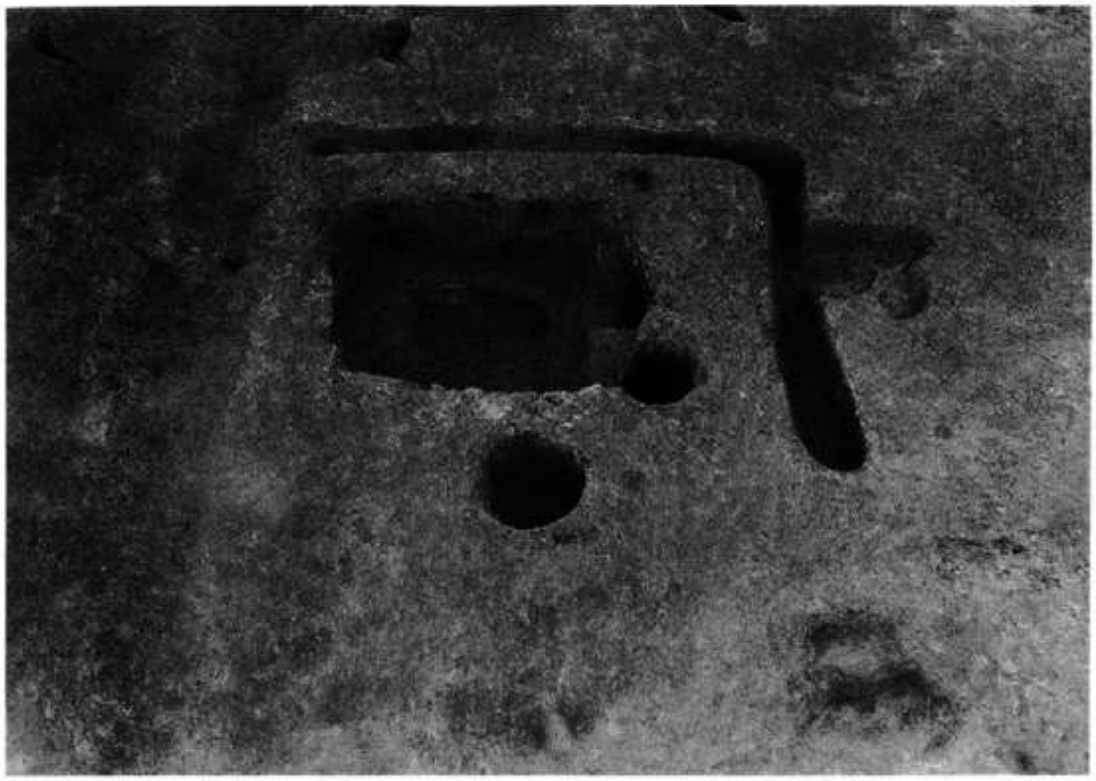


(2)SC03（東から）

PL. 8

(1)SC04（南西から）

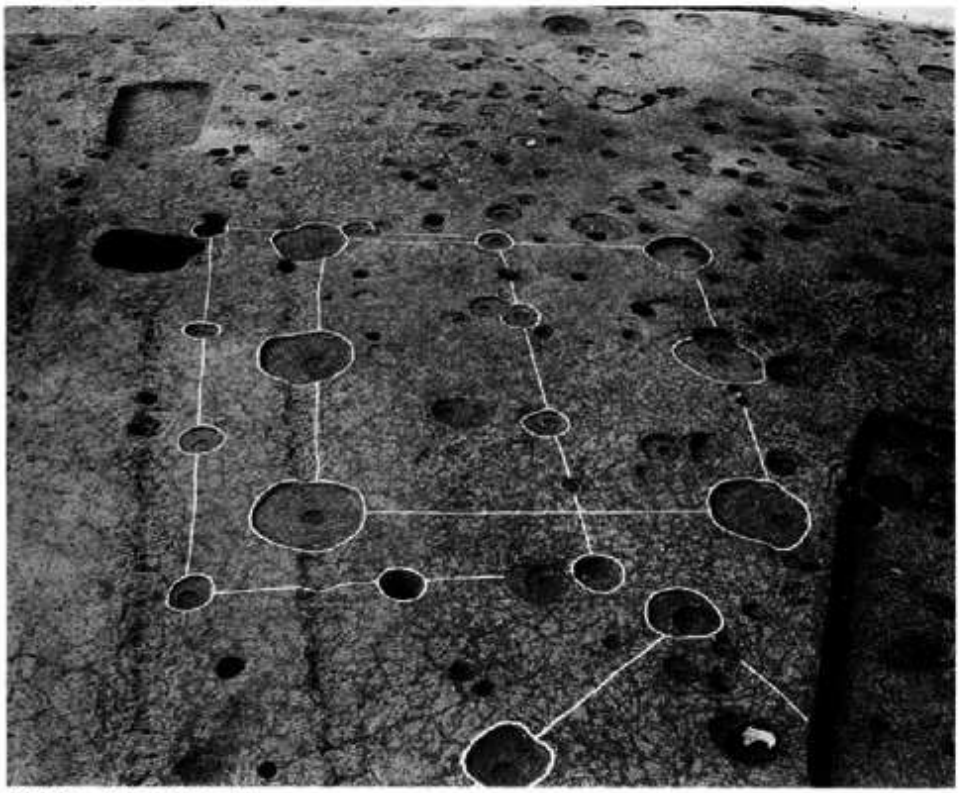
(2)SC05（北西から）



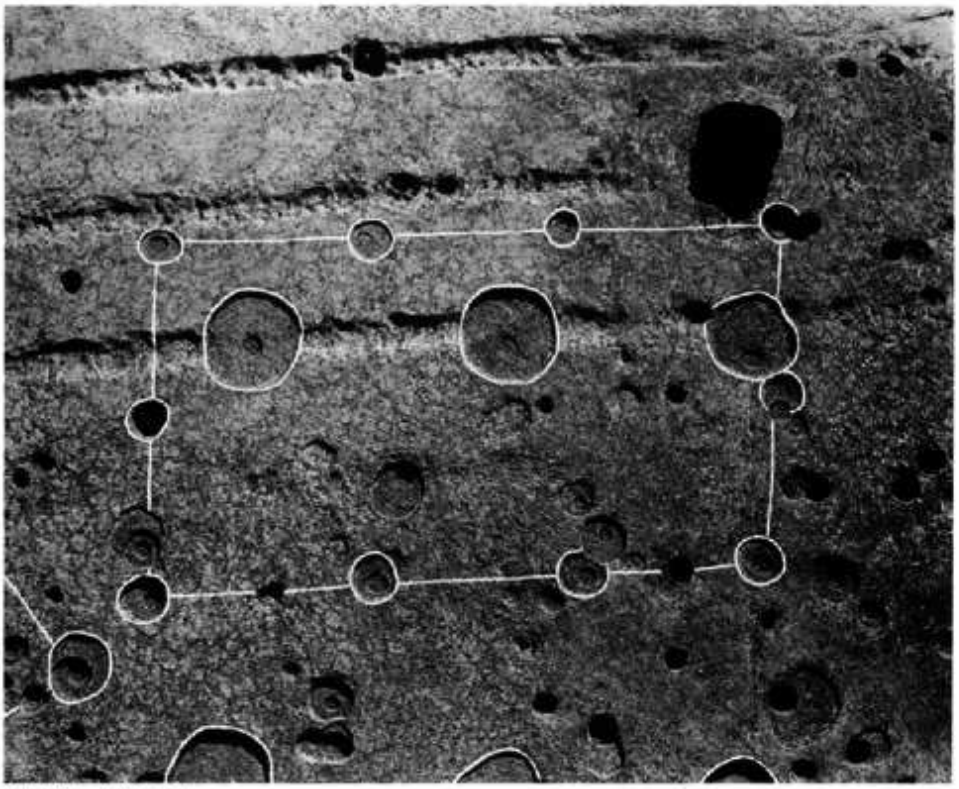
(1)SC08（北から）

(2)SC09（南東から）

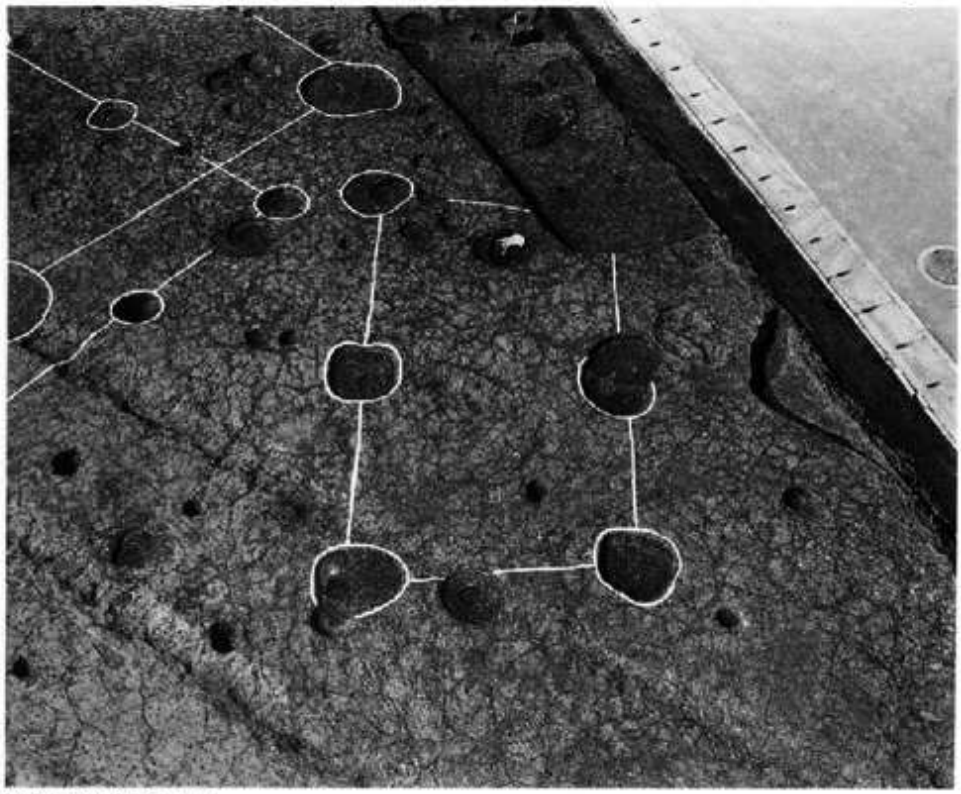
PL. 10



(1)SB01・02（南東から）



(2)SB01（東から）



(1)SB03（南西から）

(2)SB04（東から）

PL. 12

(1)SD01～03（北東から）

(2)SD03（北東から）

(1)SD04・05（南東から）

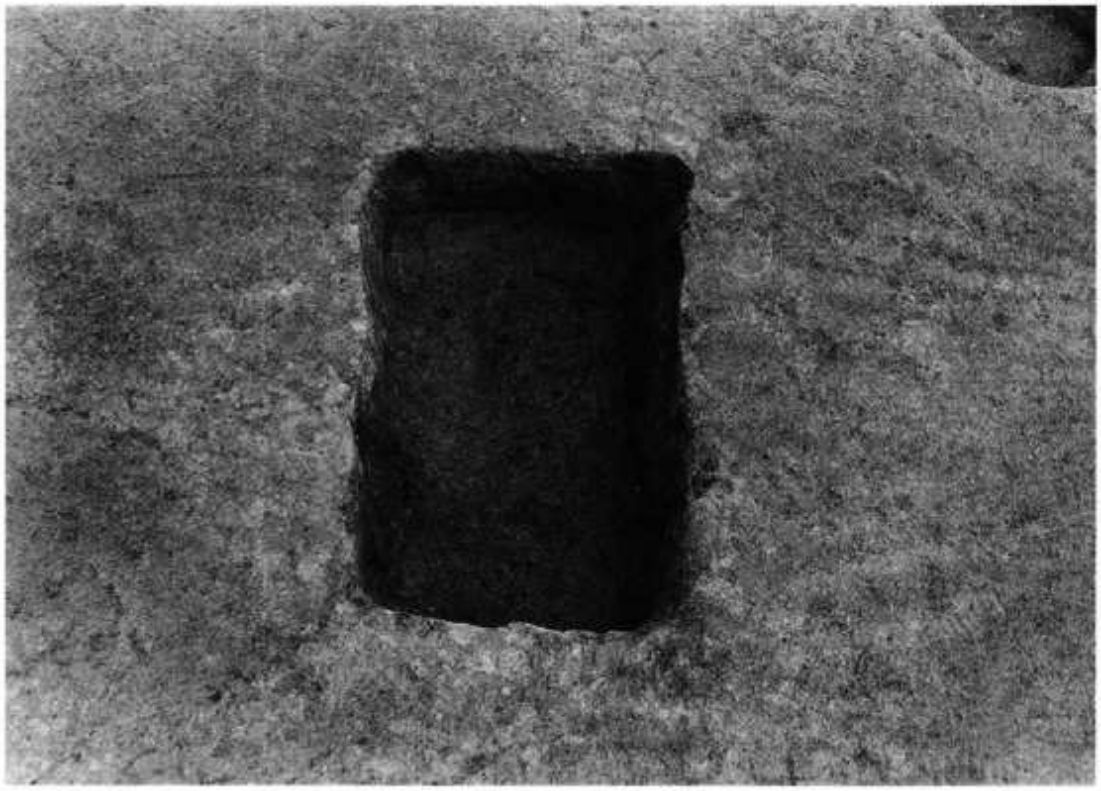
(2)SD02土層（東から）

(3)SD03土層（東から）

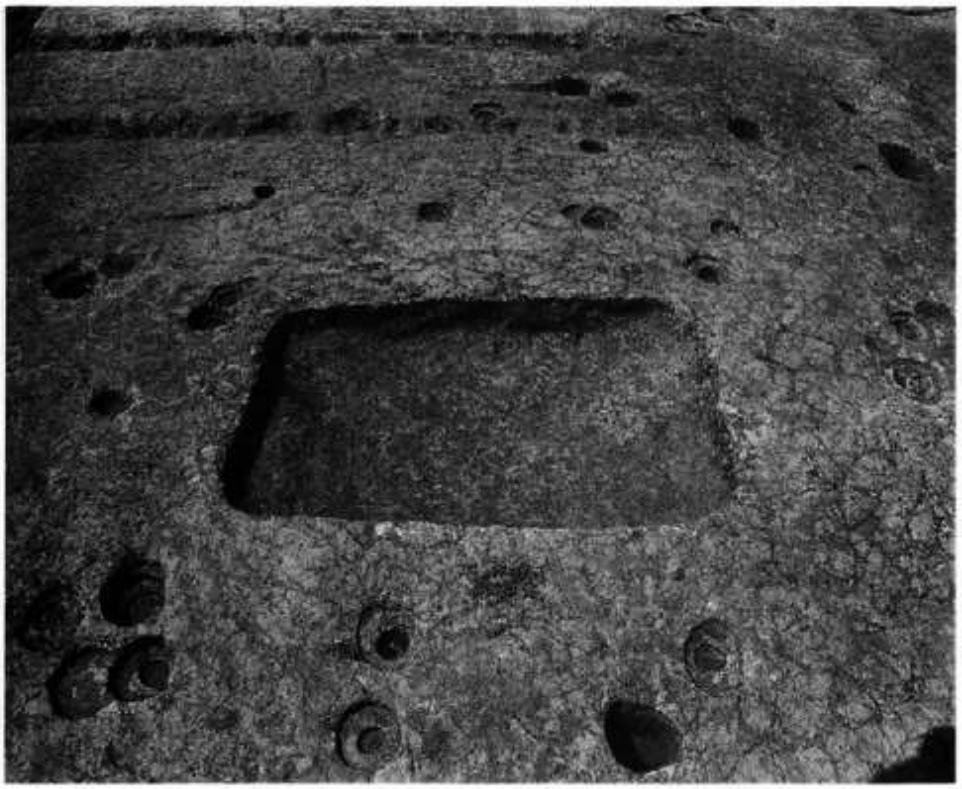
PL. 14

(1)SK01（北から）

(2)SK02（南から）

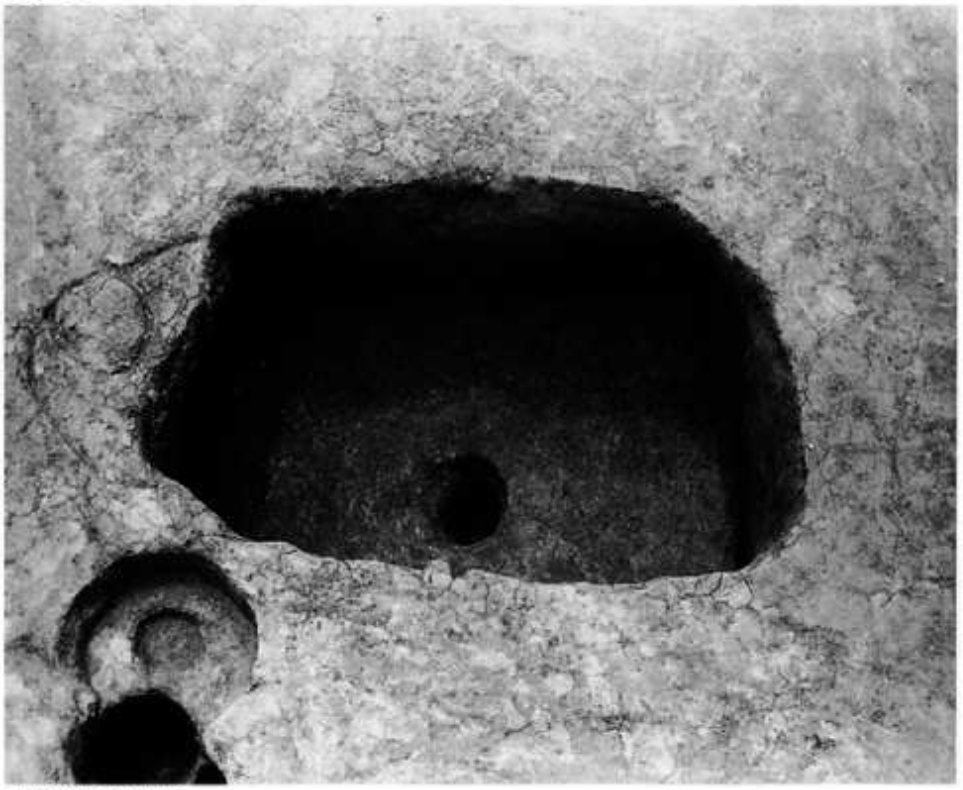


(1)SK03（東から）



(2)SK04（東から）

PL. 16



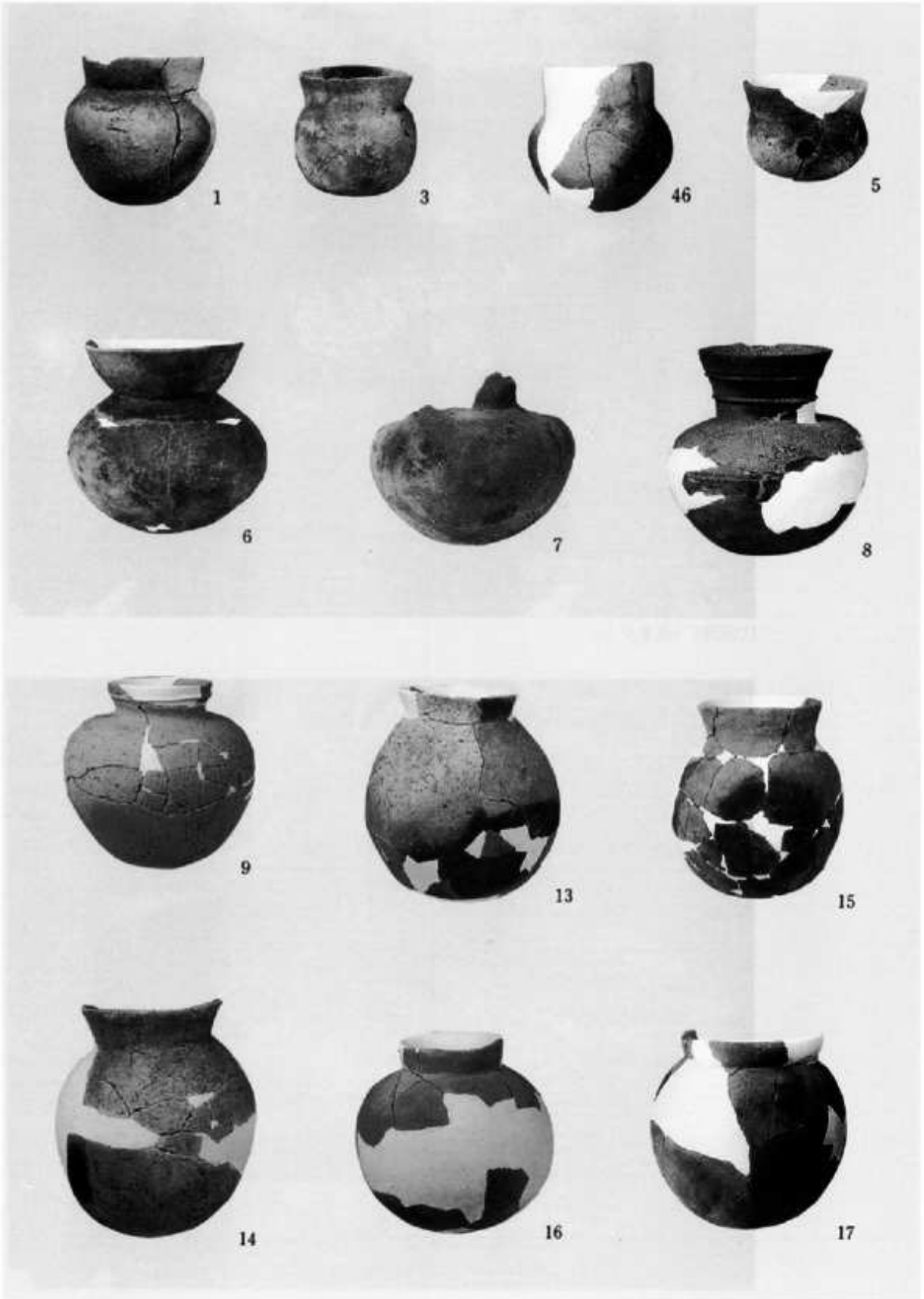
(1)SK05（北から）

(2)SK08・09（南から）

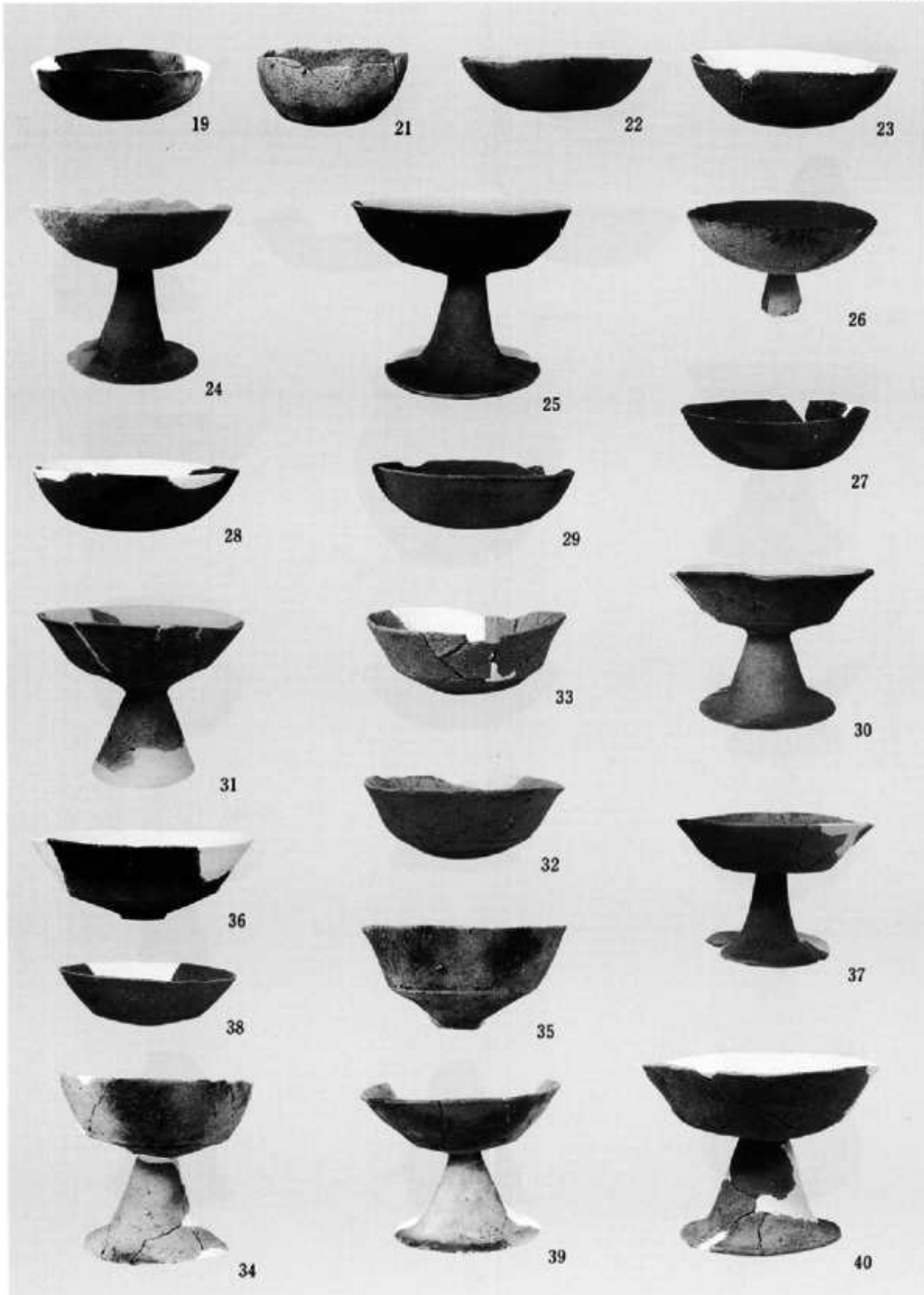
(1)SU01（南東から）

(2)SU02（南東から）

PL. 18

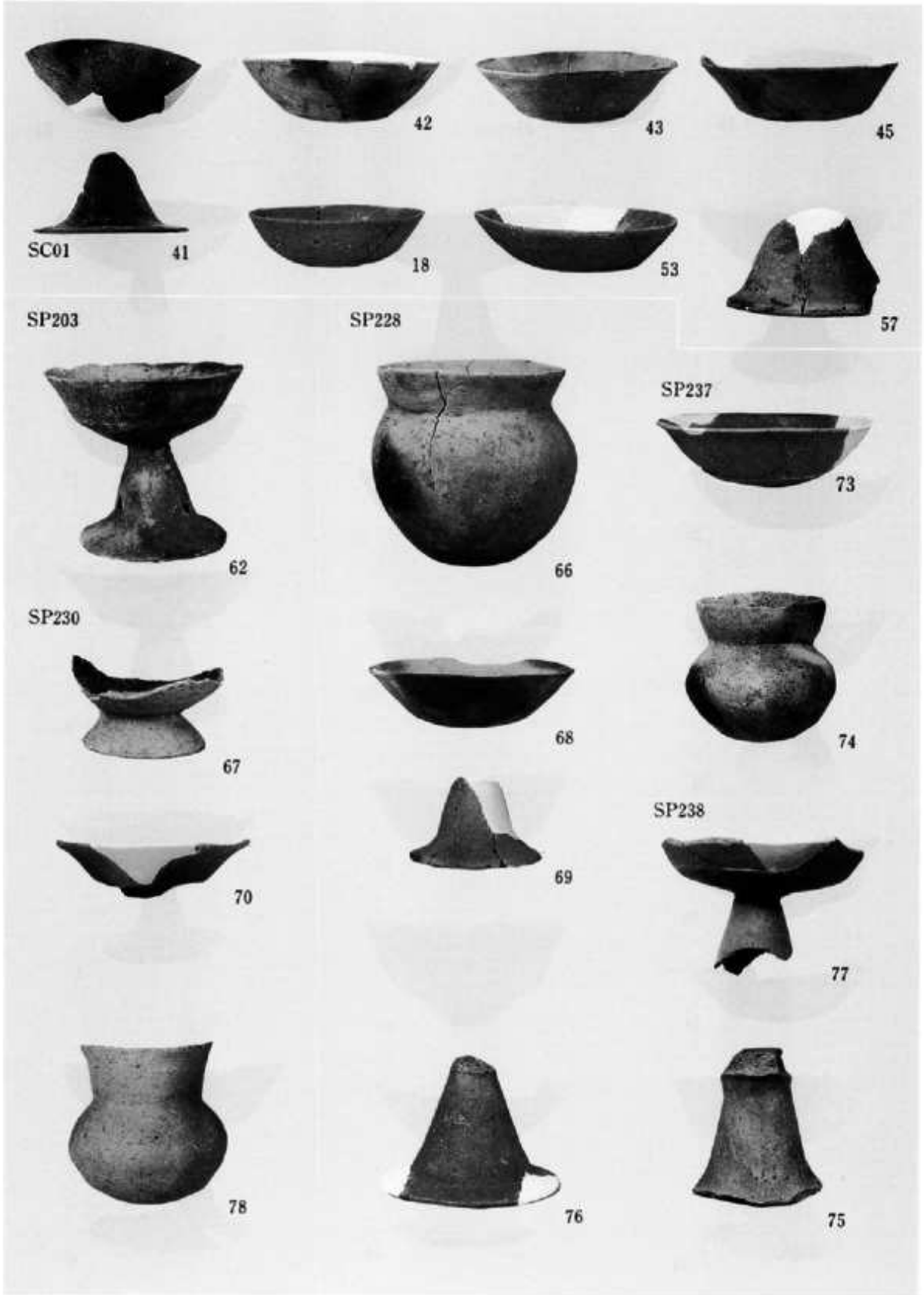


SC01出土遺物1



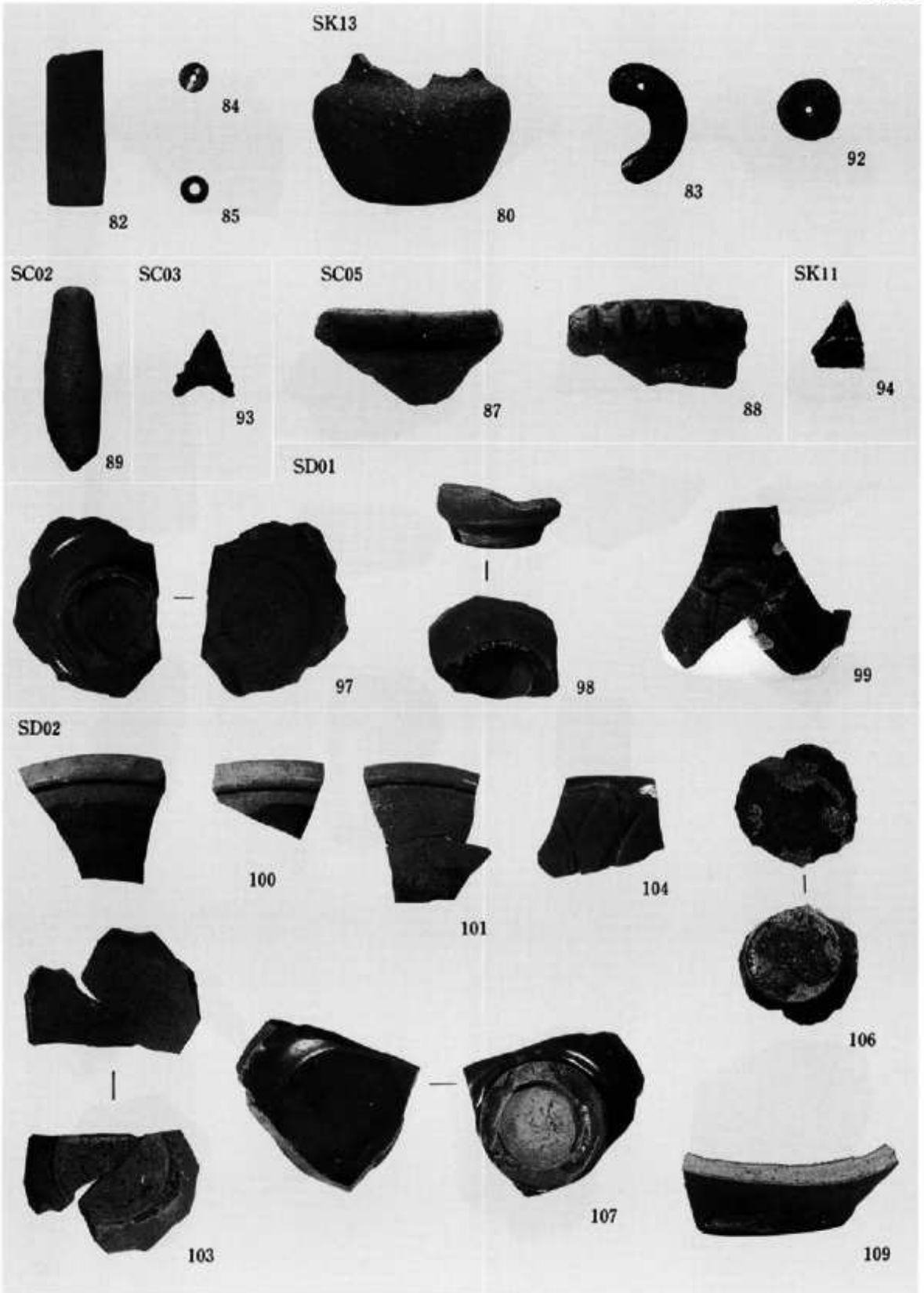
SC02出土遺物2

PL. 20

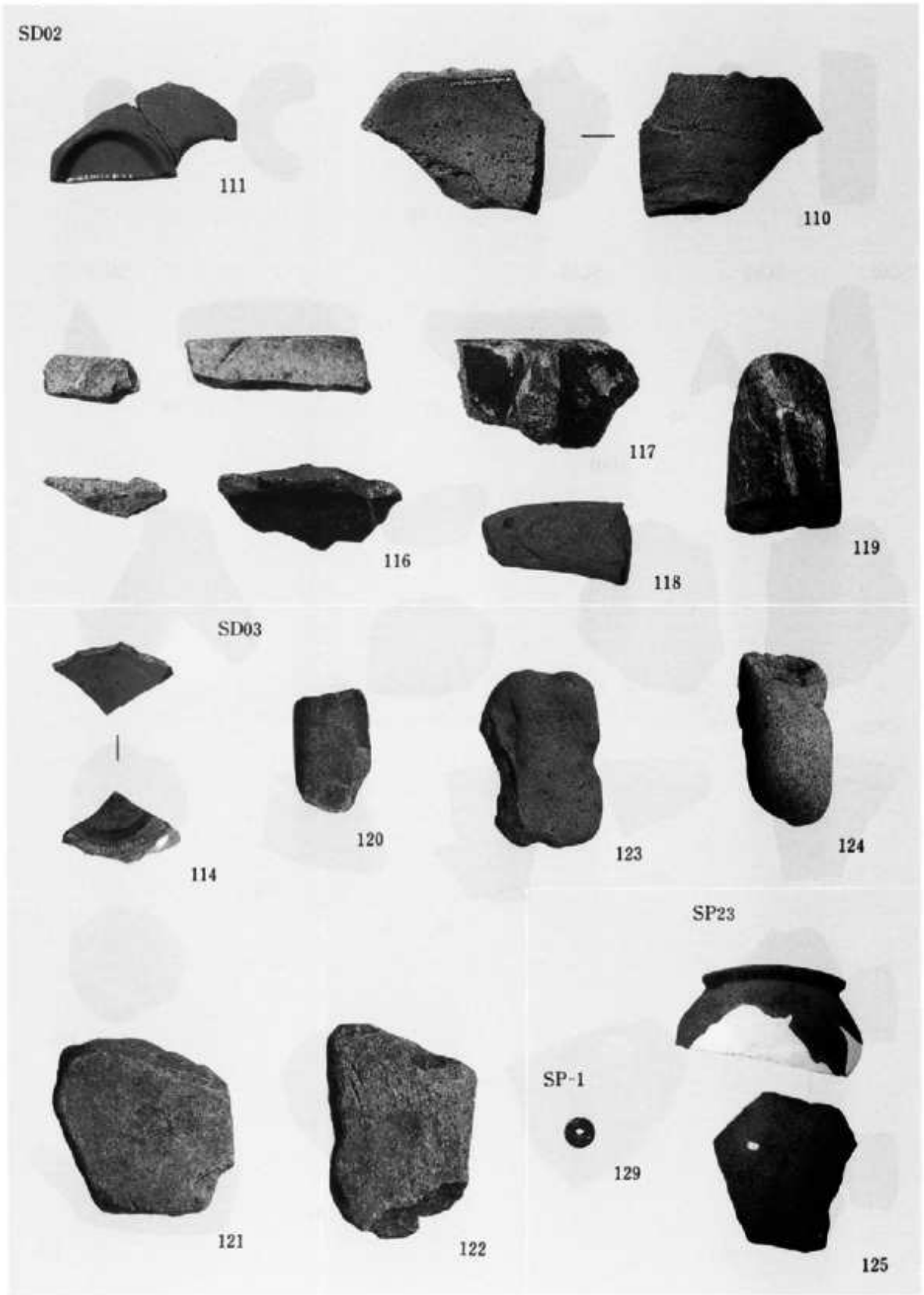


SC01・及び床面ピット出土遺物

PL. 21

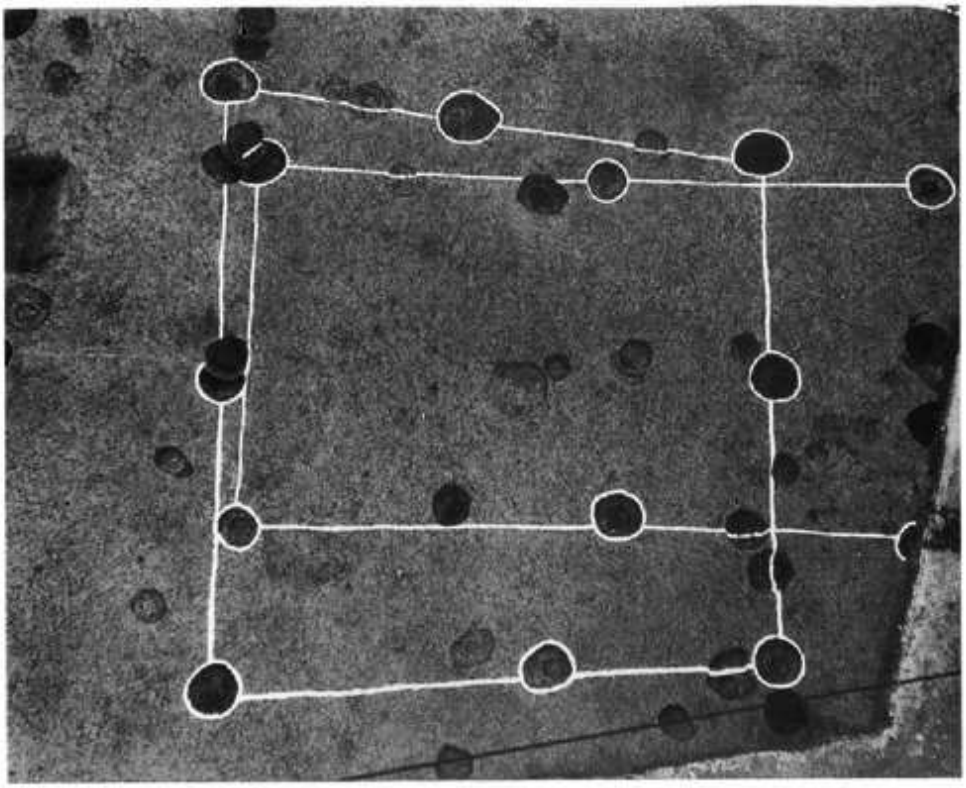

SK13
84
82
85
80
83
92
SC02
SC03
SC05
SK11
89
93
87
88
94
SD01
97
98
99
SD02
100
101
104
106
103
107
109

PL. 22



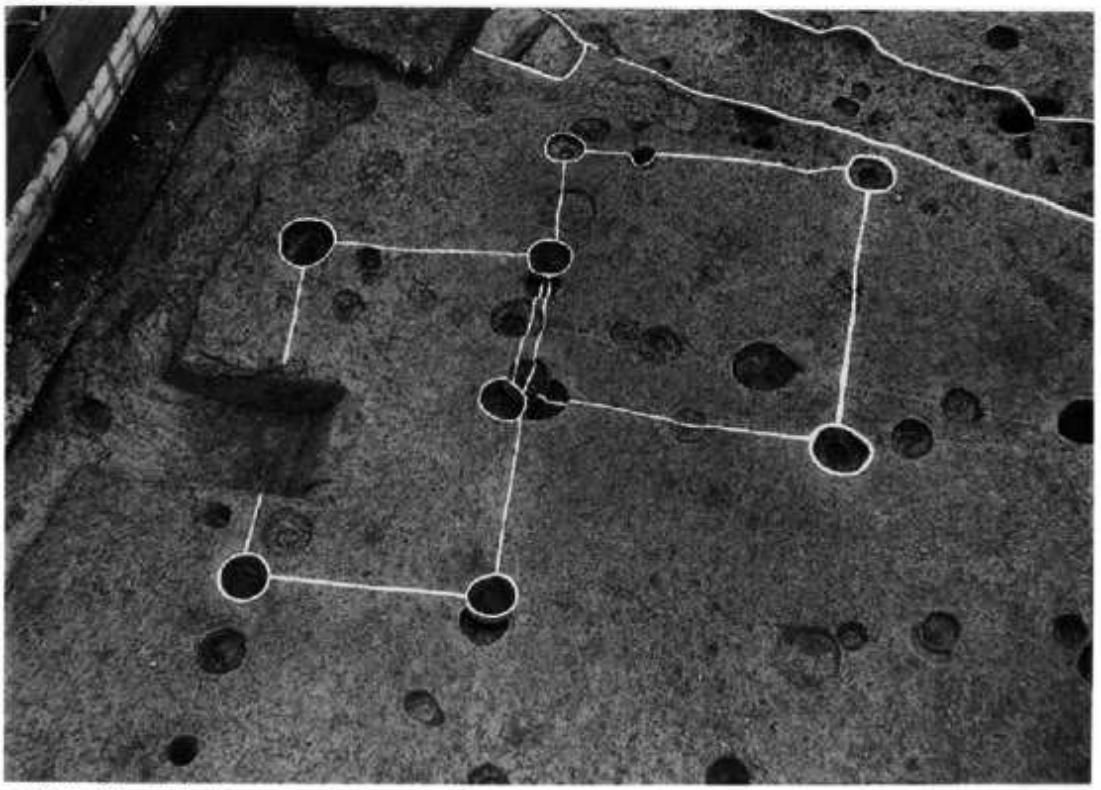
溝・ピット出土遺物

(1)調査区全景（西から）



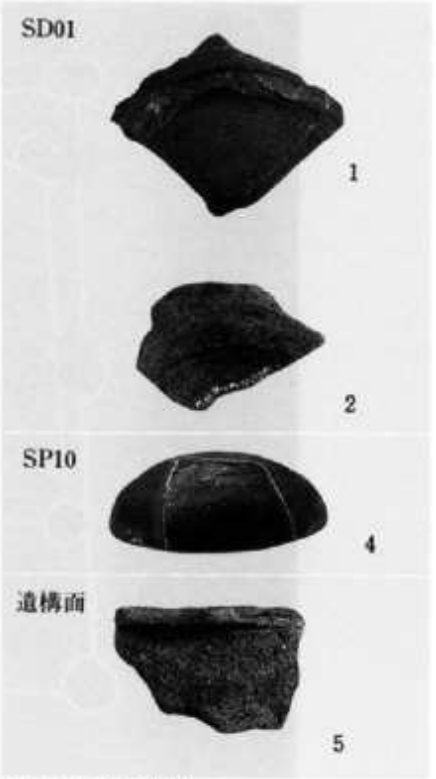
(2)SB01・02（東から）

PL. 24



(1)SB03・04（西から）

(2)SD01（北から）



(3)各遺構出土遺物

(1)調査区遠景（北東から）

(2)調査区全景（北西から）

PL. 26

(1)SC01上面（南から）

(2)SC01上面（東から）

(3)SC01下面（南から）

(4)SC01下面（東から）

(5)SC01屋内土坑（東から）

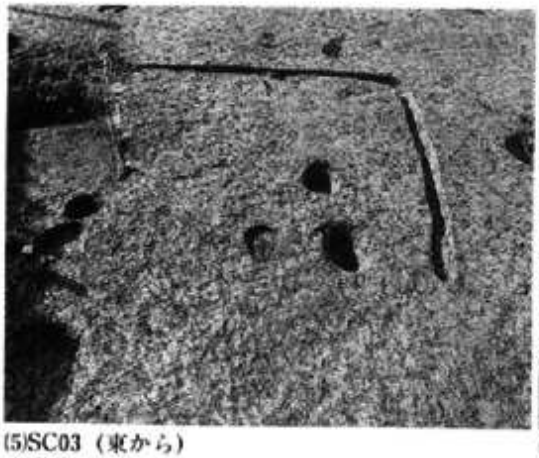
(6)SC01ピット内高坏（東から）

(1)SC02（北から）

(2)SC02（西から）

(3)SC02土層断面（北から）

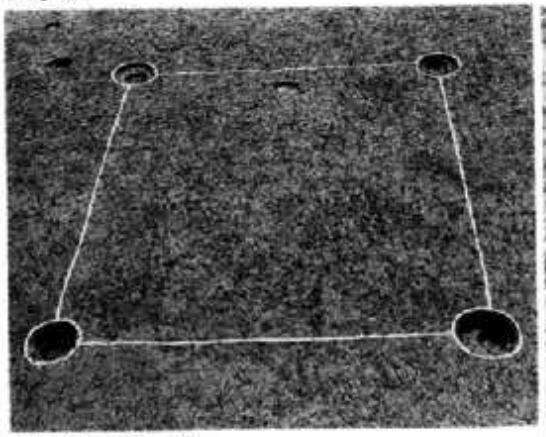
(4)SC03（北から）



(5)SC03（東から）

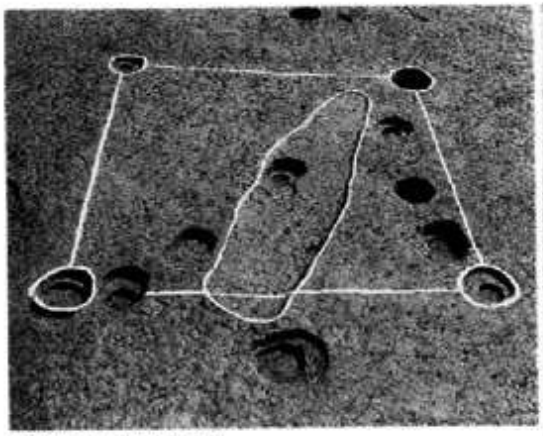
(6)SC04（北東から）

PL. 28



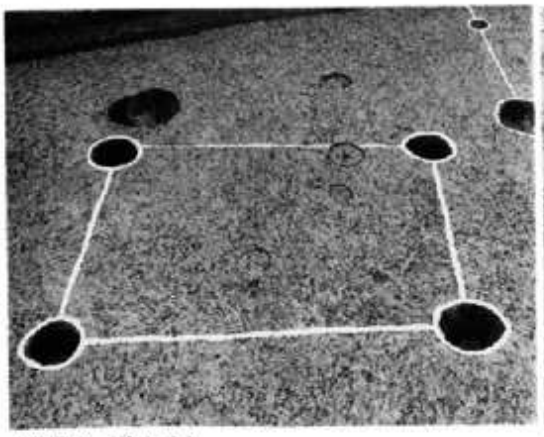
(1)SB10（北から）

(2)SB10柱穴土層断面（北から）

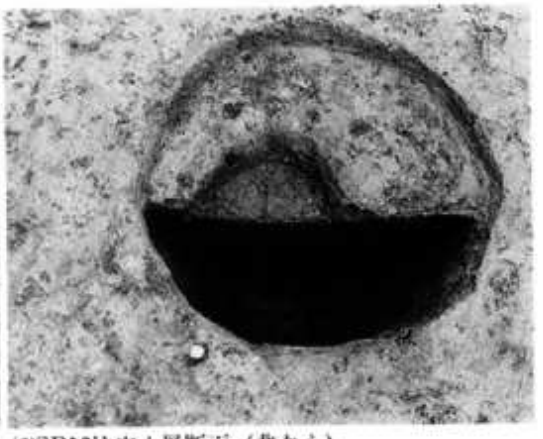


(3)SB11（北西から）

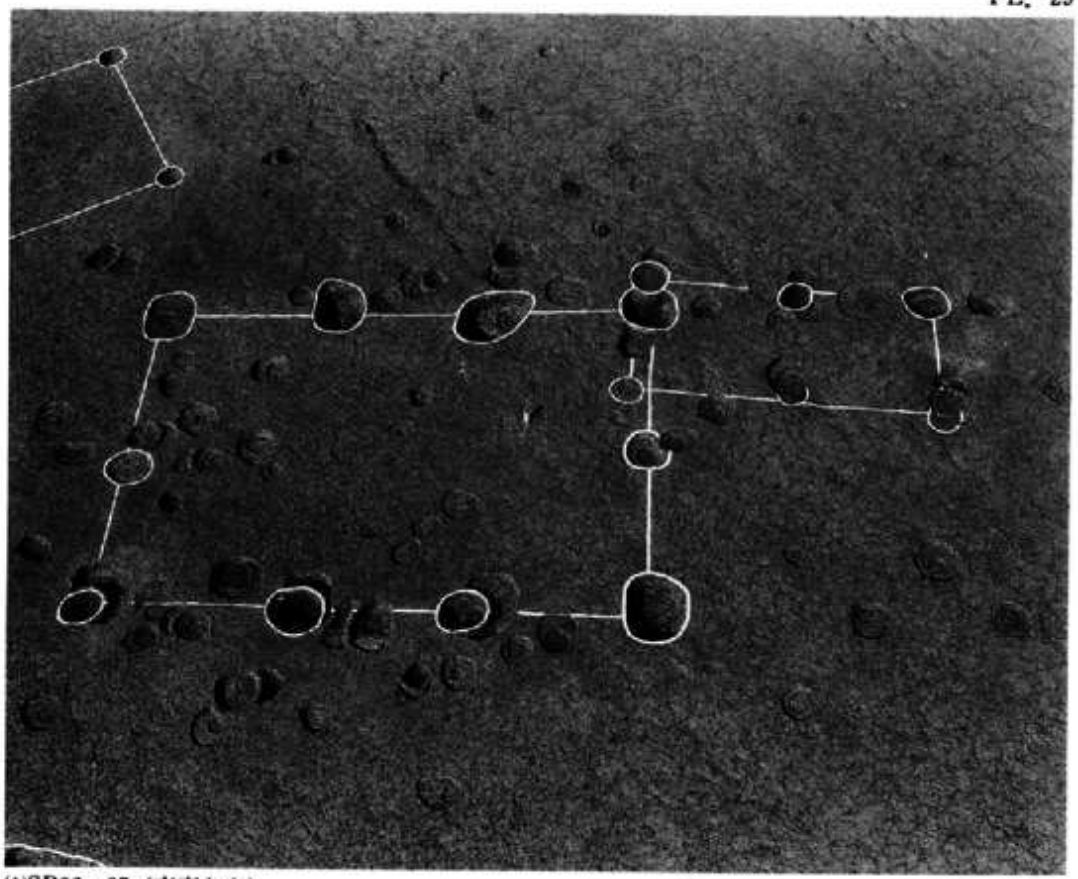
(4)SB11柱穴土層断面（南西から）



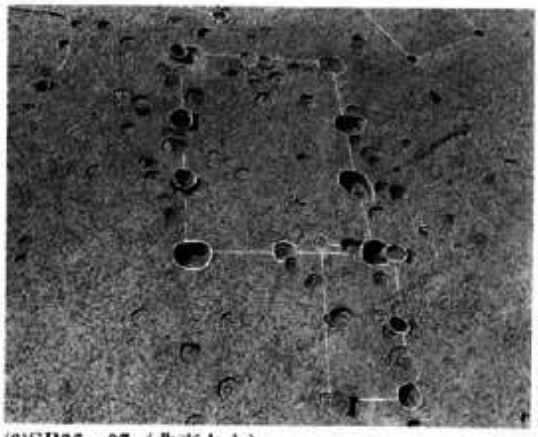
(5)SB12（北から）



(6)SB12柱穴土層断面（北から）



(1)SB06・07（南東から）



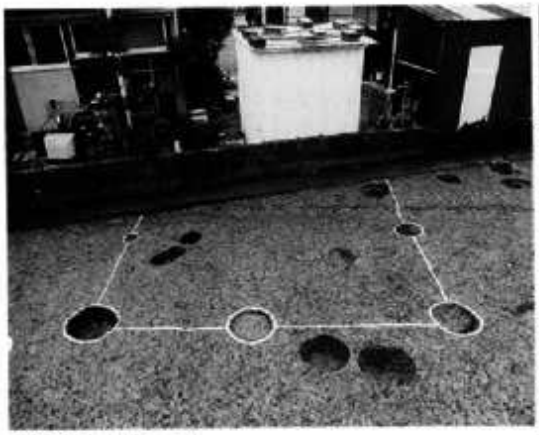
(2)SB06・07（北東から）

(3)SB06柱穴土層断面（北東から）

PL. 30

(1)SB08（北西から）

(2)SB08柱穴土層断面（北東から）

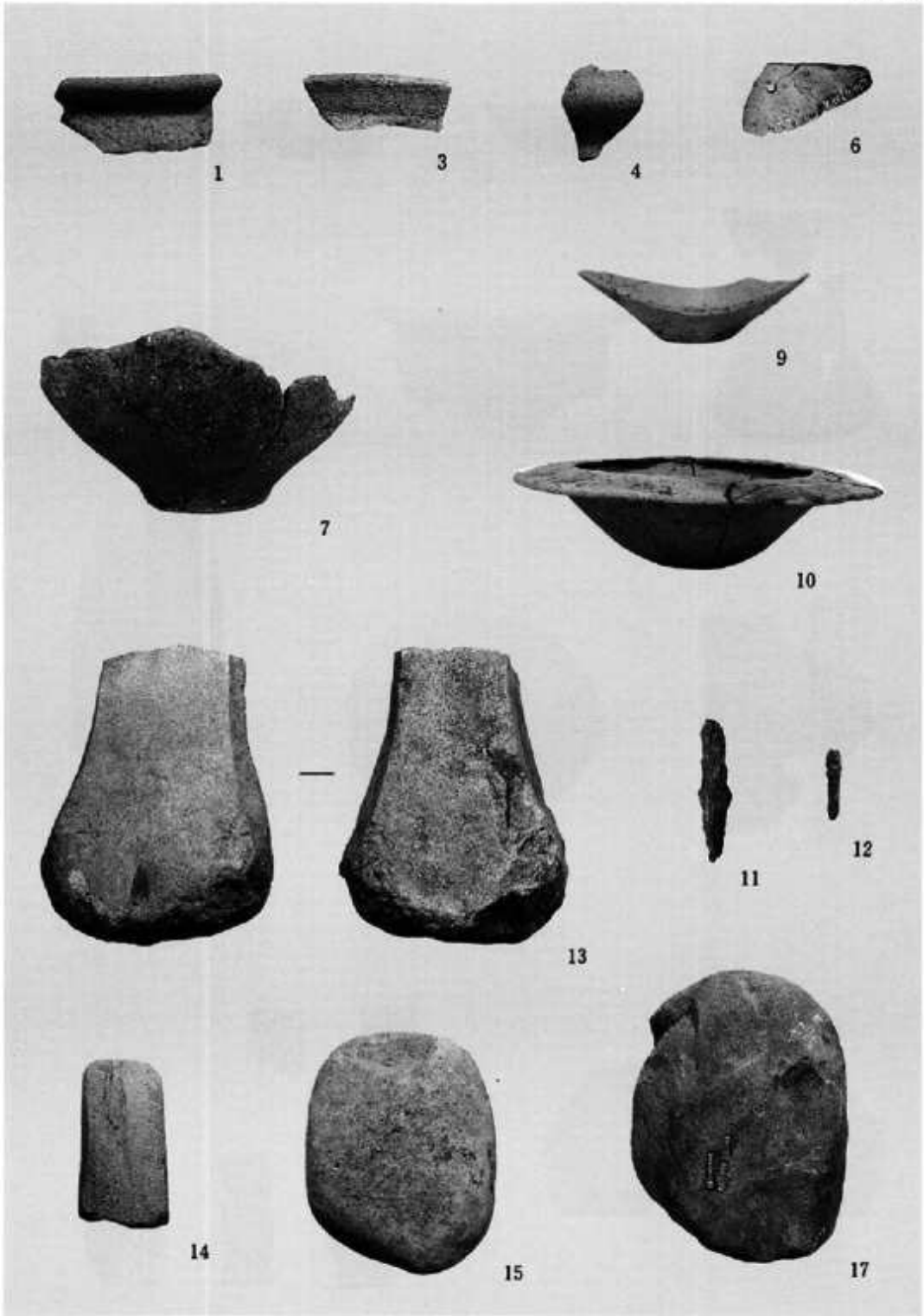


(3)SB 09（北から）

(4)SK05（東から）

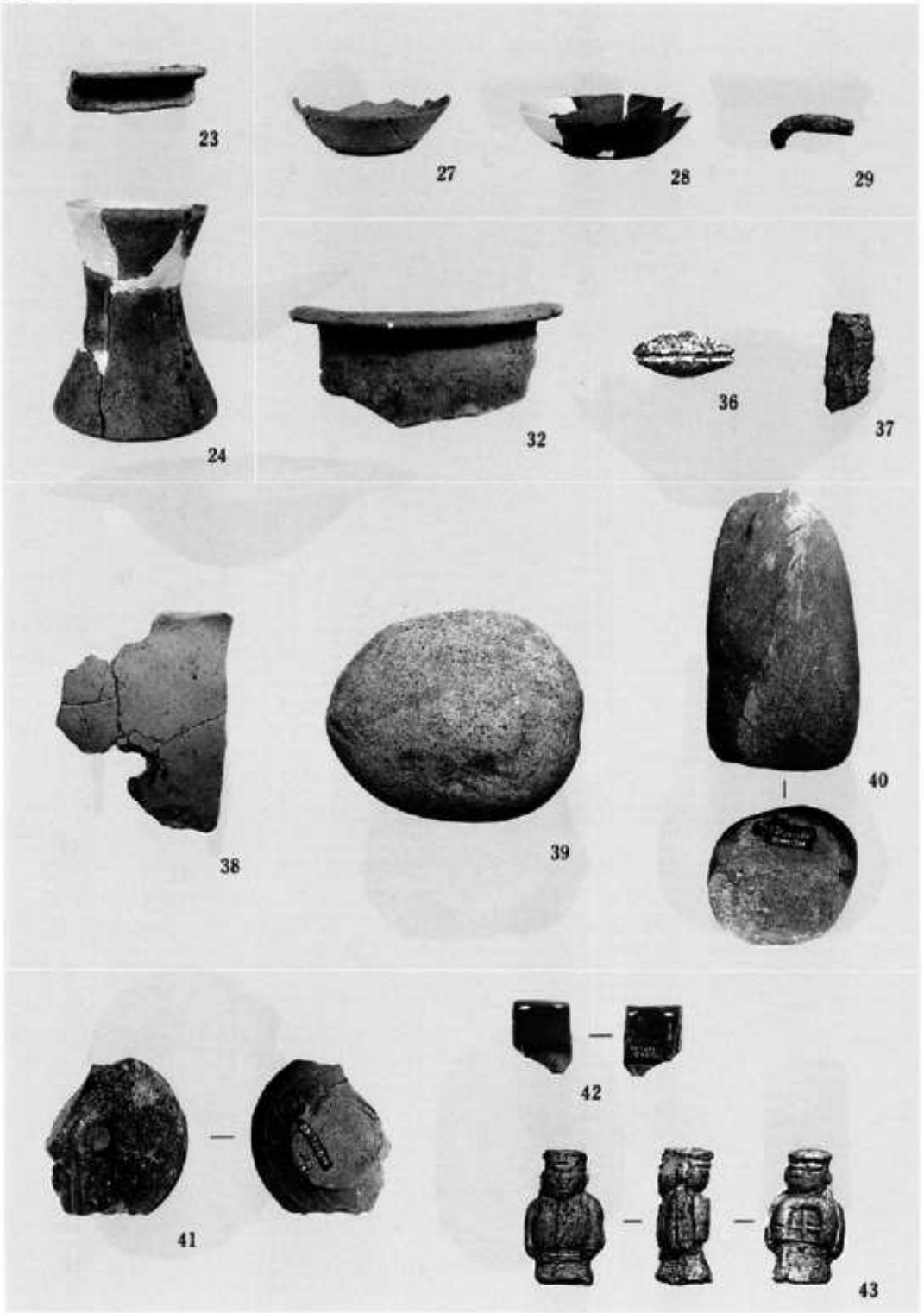
(5)SK05（北から）

(6)SK05遺物出土状況（東から）



SC01出土遺物

PL. 32

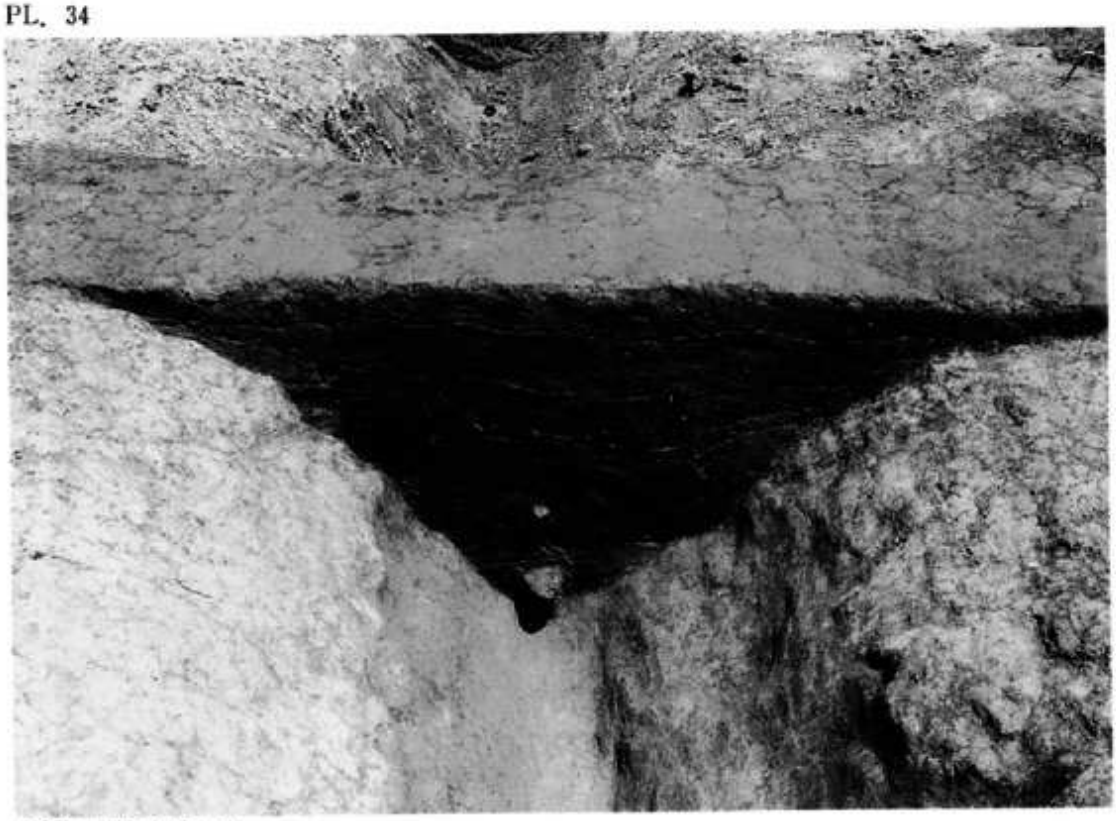


各遺構出土遺物

(1)調査区全景（北から）

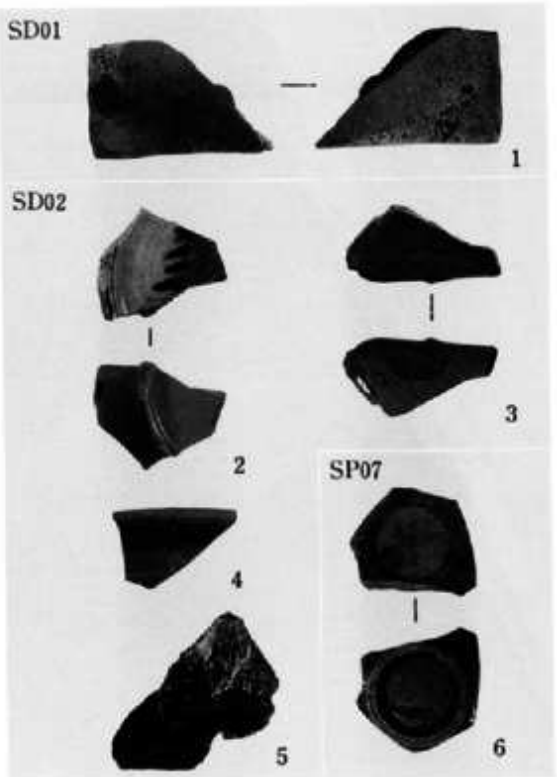
(2)SD01（西から）

PL. 34



(1)SD01土層（南から）

(2)SE01（東から）



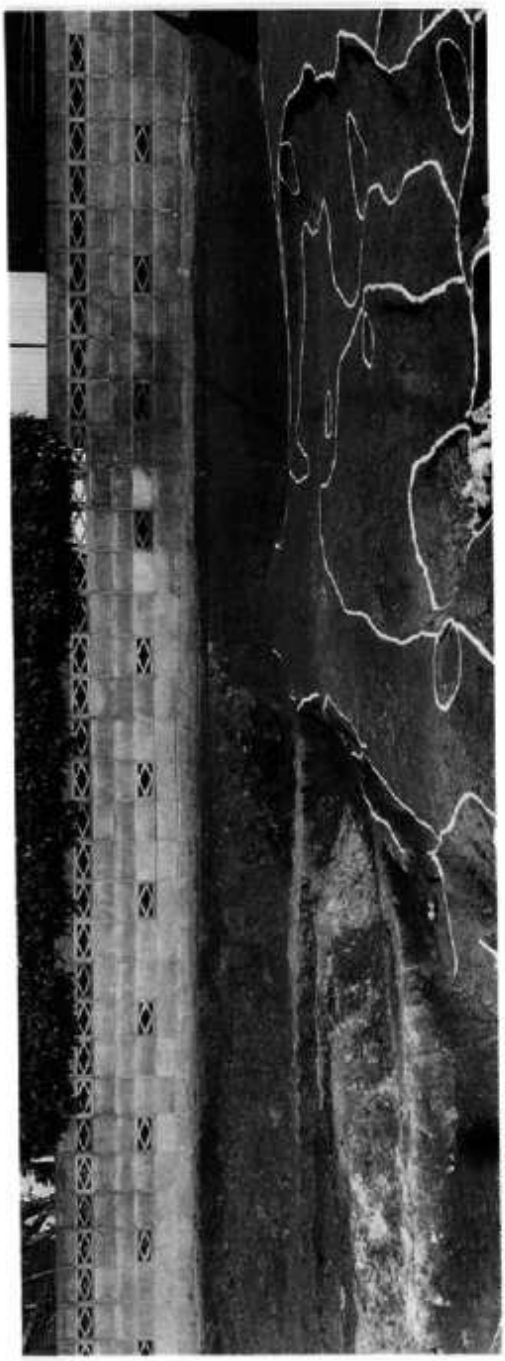
(3)各遺構出土遺物

(1)調査区全景（南から）

(2)調査区全景（東から）

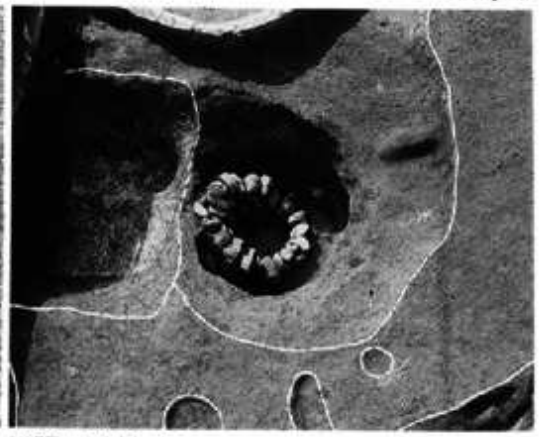
PL. 36

(1)調査区北壁土層断面（南から）



(2)調査区東壁土層断面（西から）

(1)SE06内詰石（北から）



(2)SE16（東から）

(3)SE16内側石組井側（北から）

(4)SE16井側内石臼（西から）

(5)SE16外側石組井側（東から）

PL. 38

(1)SK08（西から）

(2)SK08土層断面（南から）

(3)SK009（北から）

(4)SK14集石（西から）

(5)SK15土層断面（北から）

(1)SG01・SD03土層断面（西から）

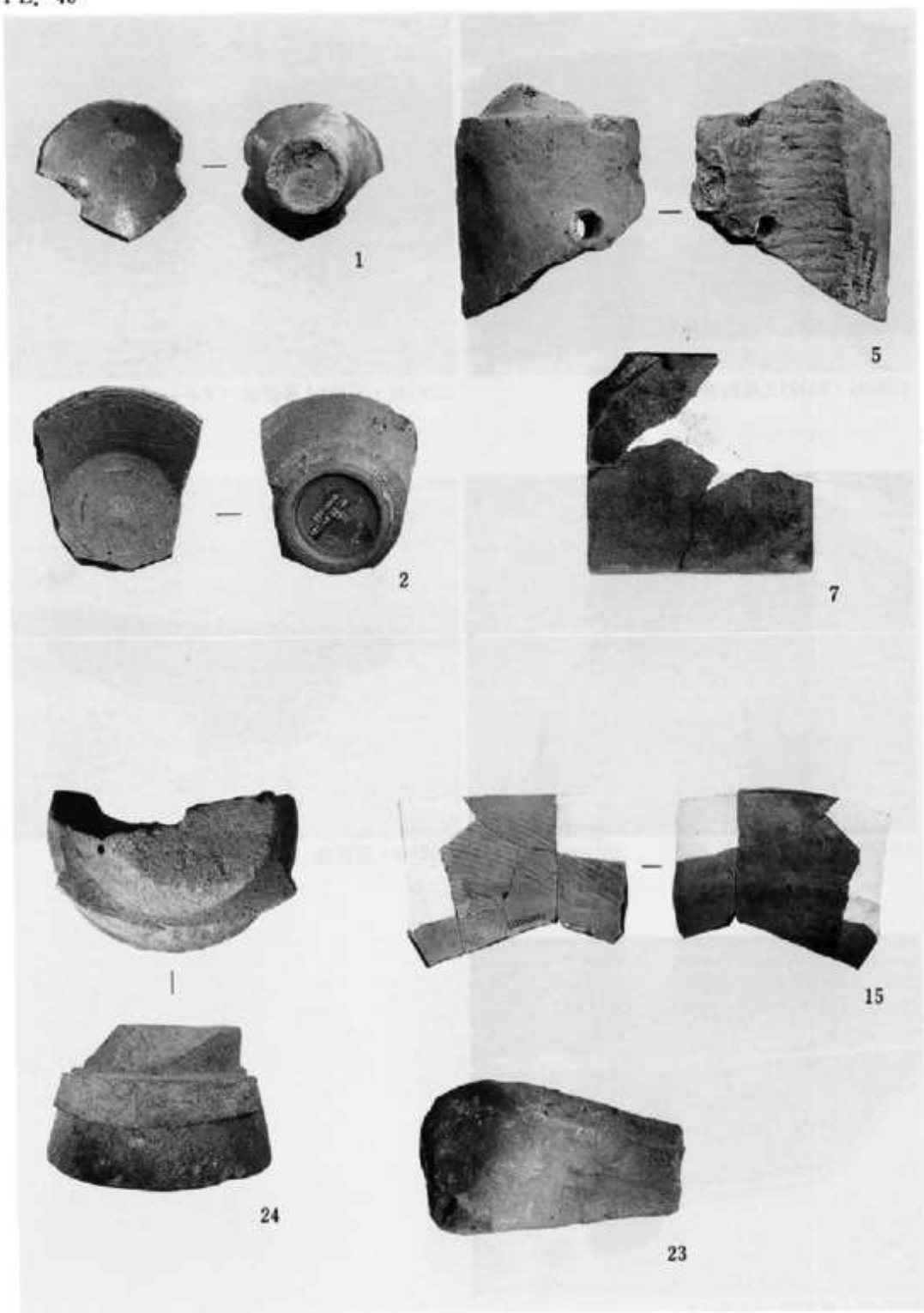
(2)SG01・SD02土層断面（北から）

(3)SD02（西から）

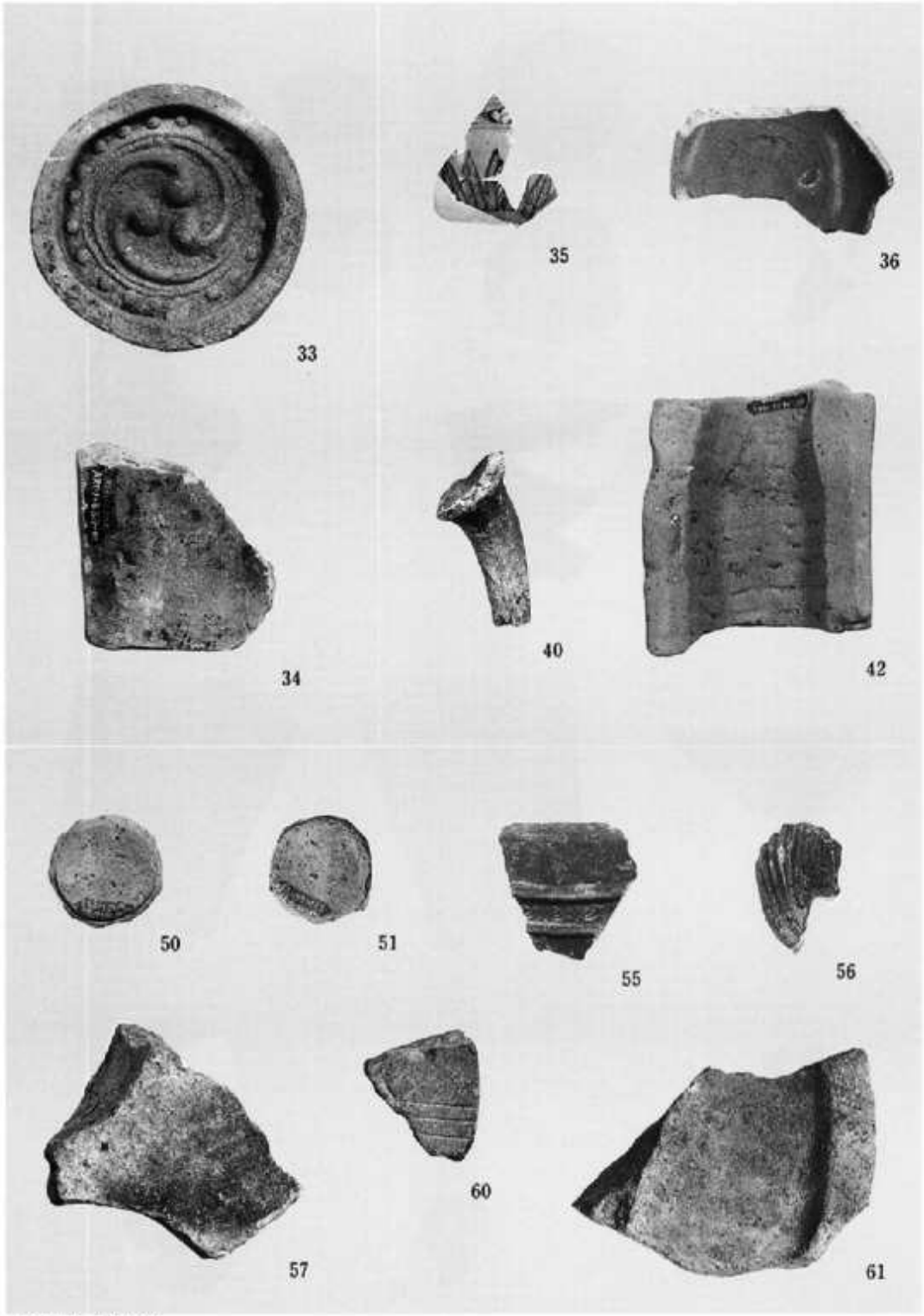
(4)SD04土層断面（西から）

(5)SD12土層断面（北から）

PL. 40

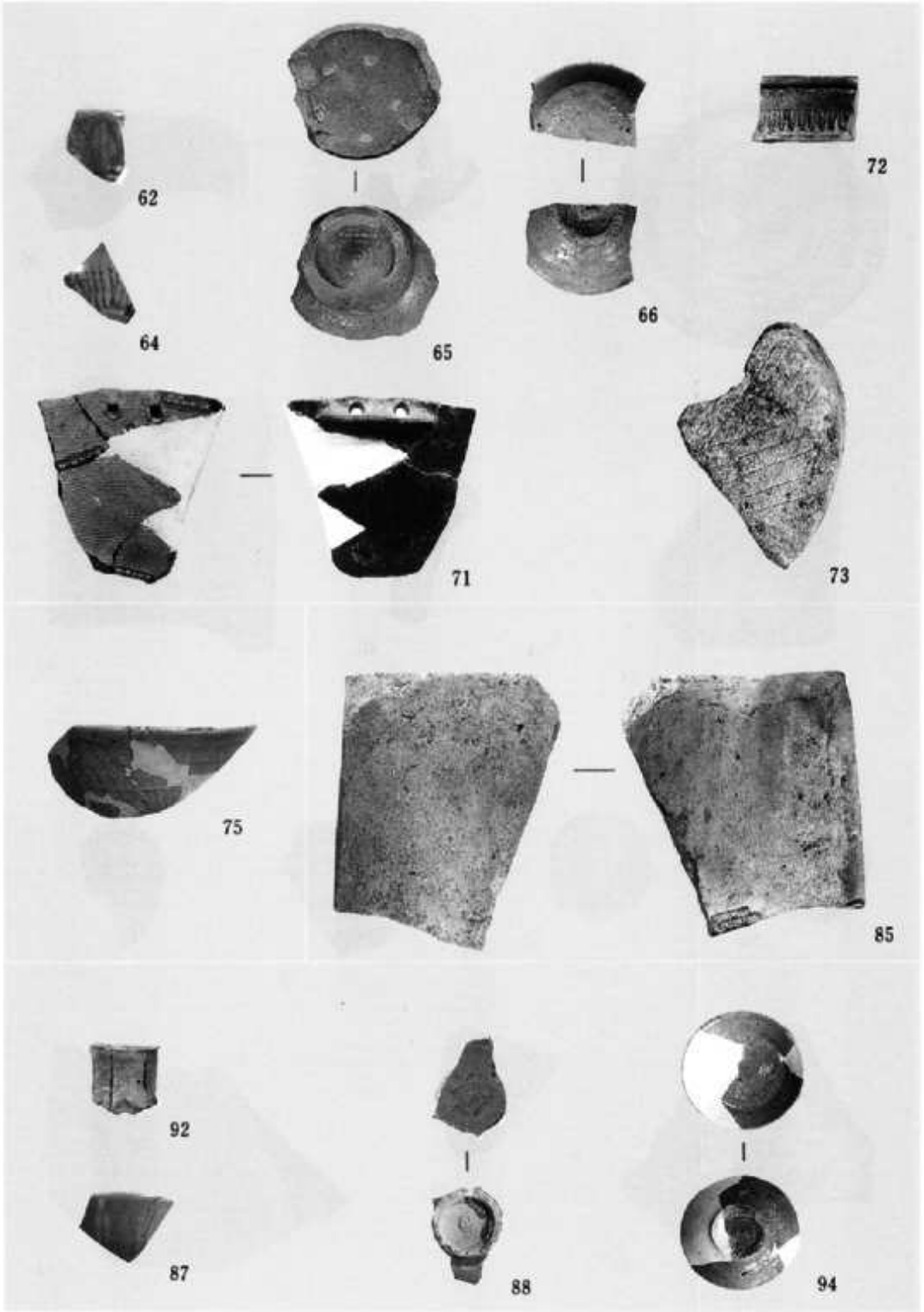


各遺構出土遺物1



各遺構出土遺物2

PL. 42



各遺構出土遺物3

有田・小田部 第18集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第340集

1993年 (平成5年) 3月31日

発 行 福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神1丁目8の1

印 刷 ㈲松古堂印刷